


# 鬼か、仏か、
# ☆安倍晴明

2001年10月6日より
全国東宝系ロードショー！
映画「陰陽師」

その魅力を
徹底的にときあかす！

豪華インタビュー◎野村萬斎／伊藤英明／真田広之／監督・滝田洋二郎／原作者・夢枕獏

映画のメイキング秘話も充実◎陰陽道／装束／美術／特撮／造型 ―――――――― ほか

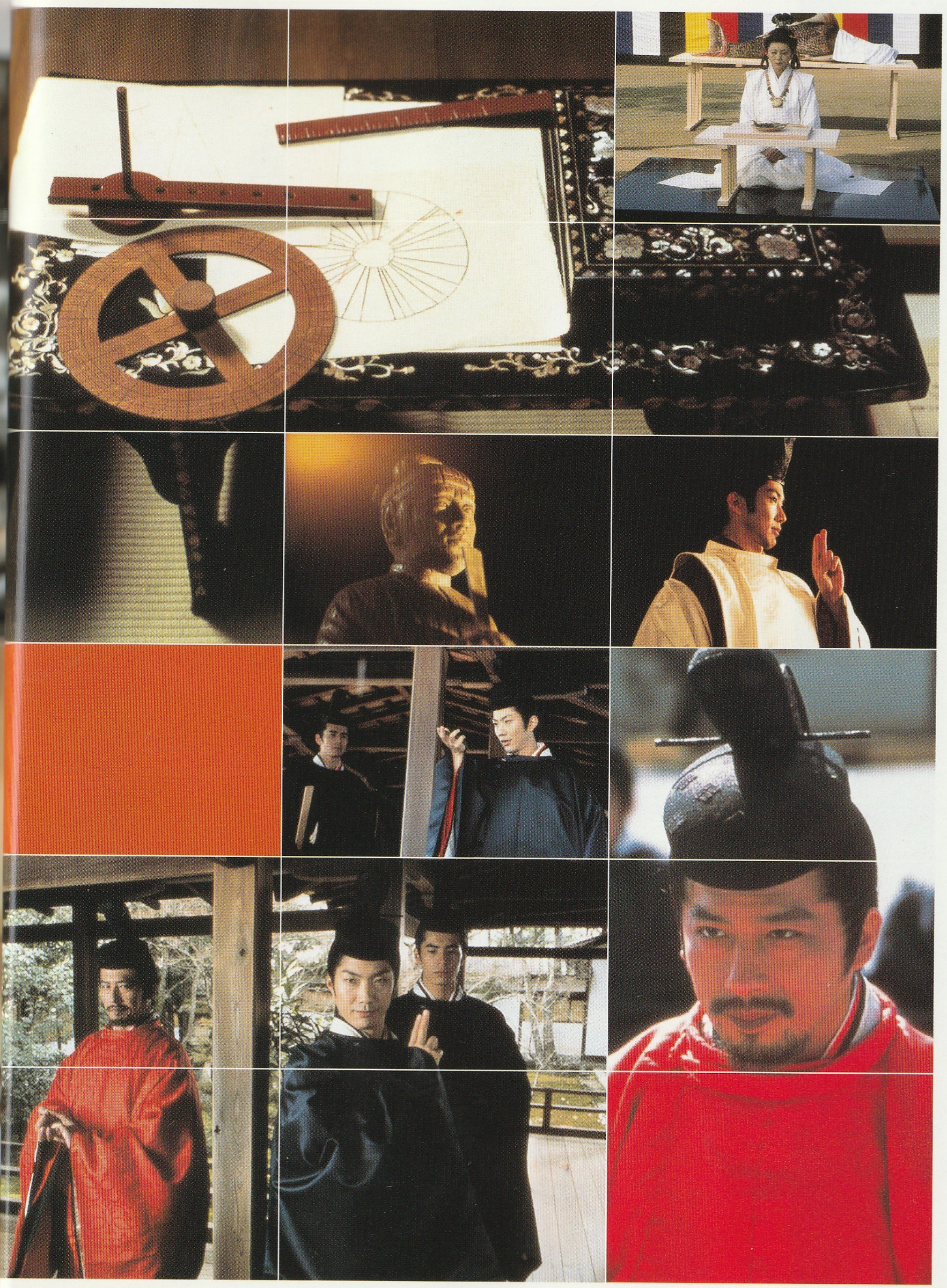
# 陰陽師 ときがたり絵巻

陰陽師
contents



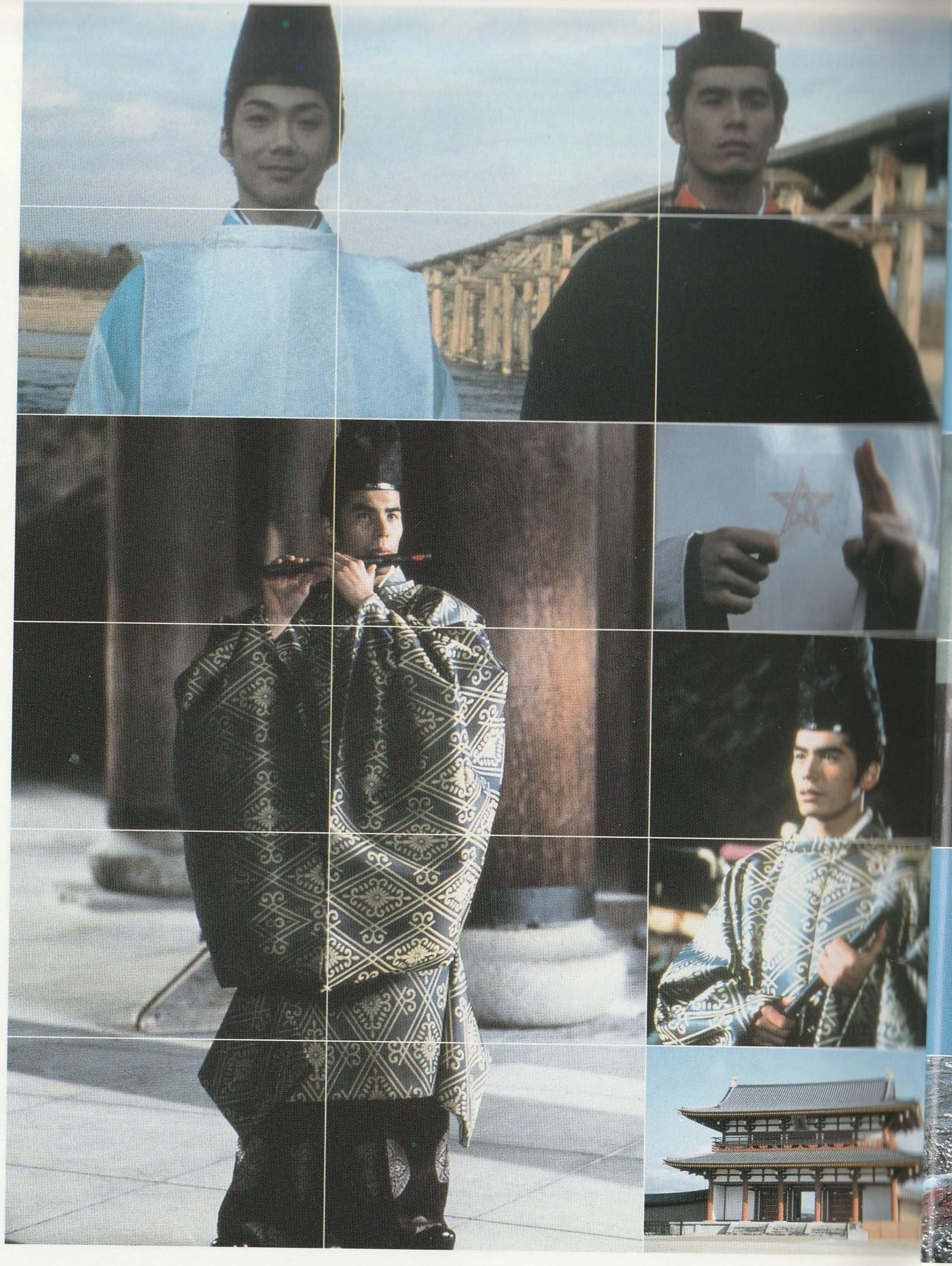
■陰陽師　ときがたり絵巻■

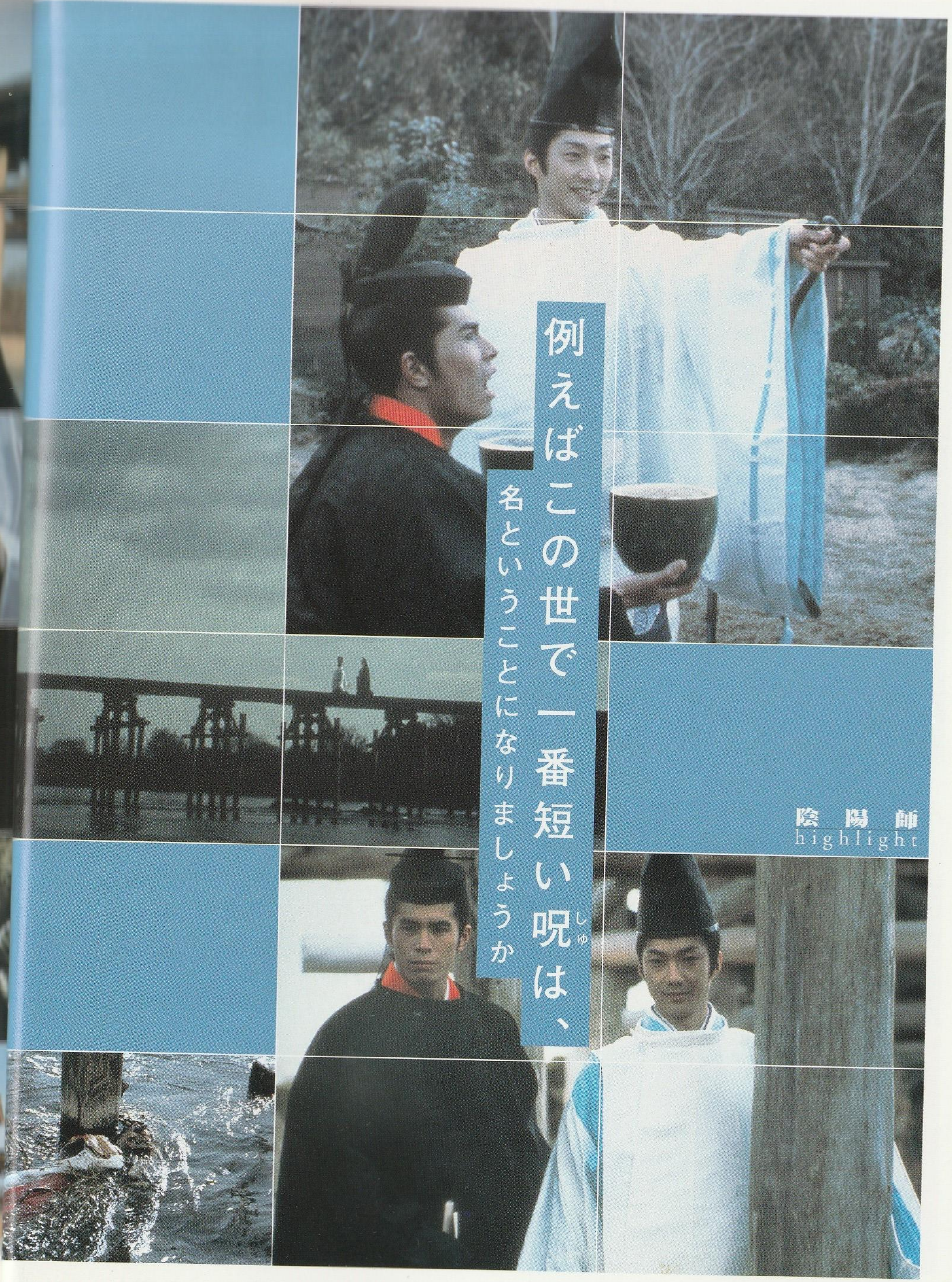
ISBN4-04-853380-0






恐れるな。
相手はただの陰陽師ぞ
陰陽師
highlight



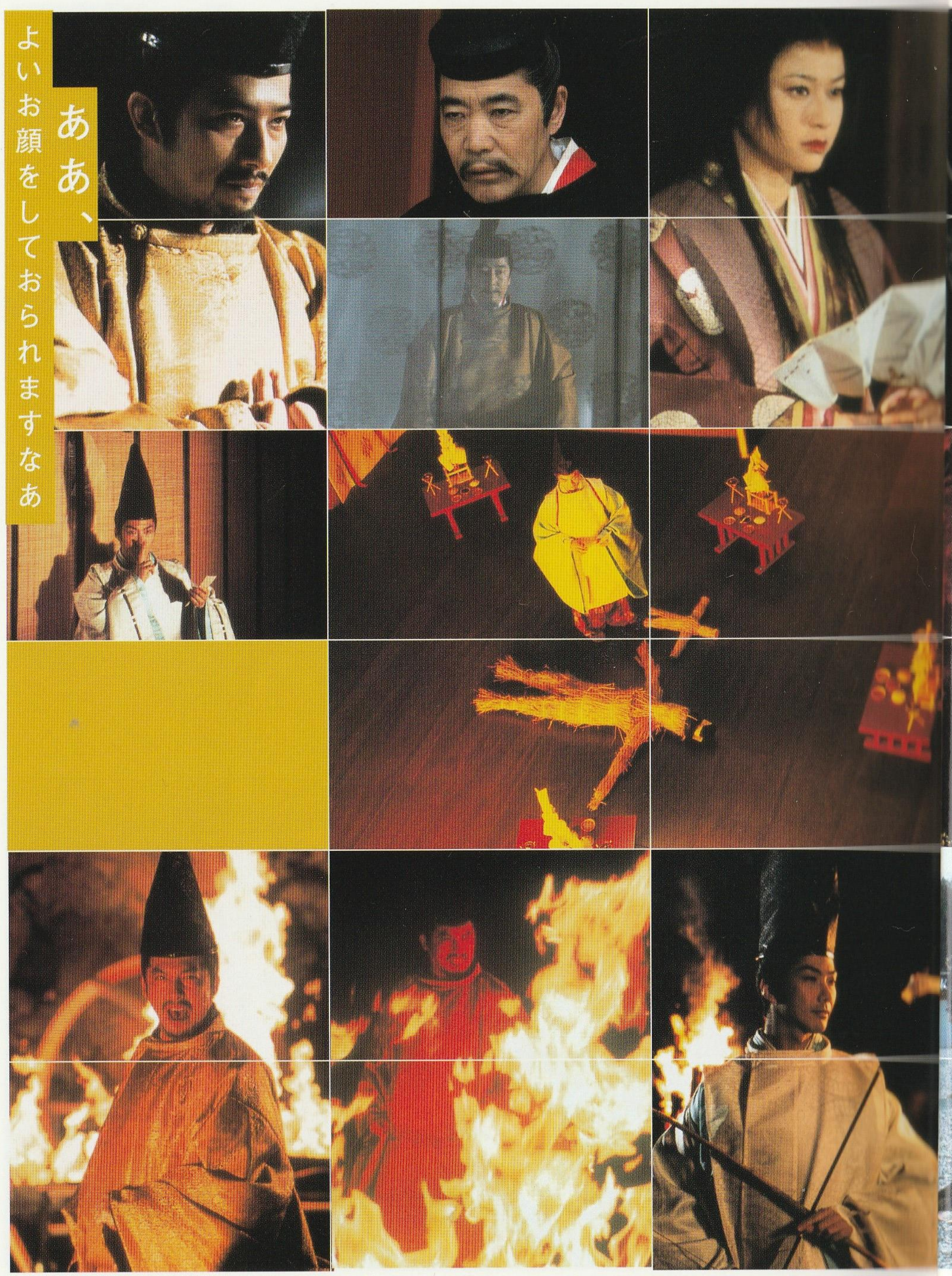


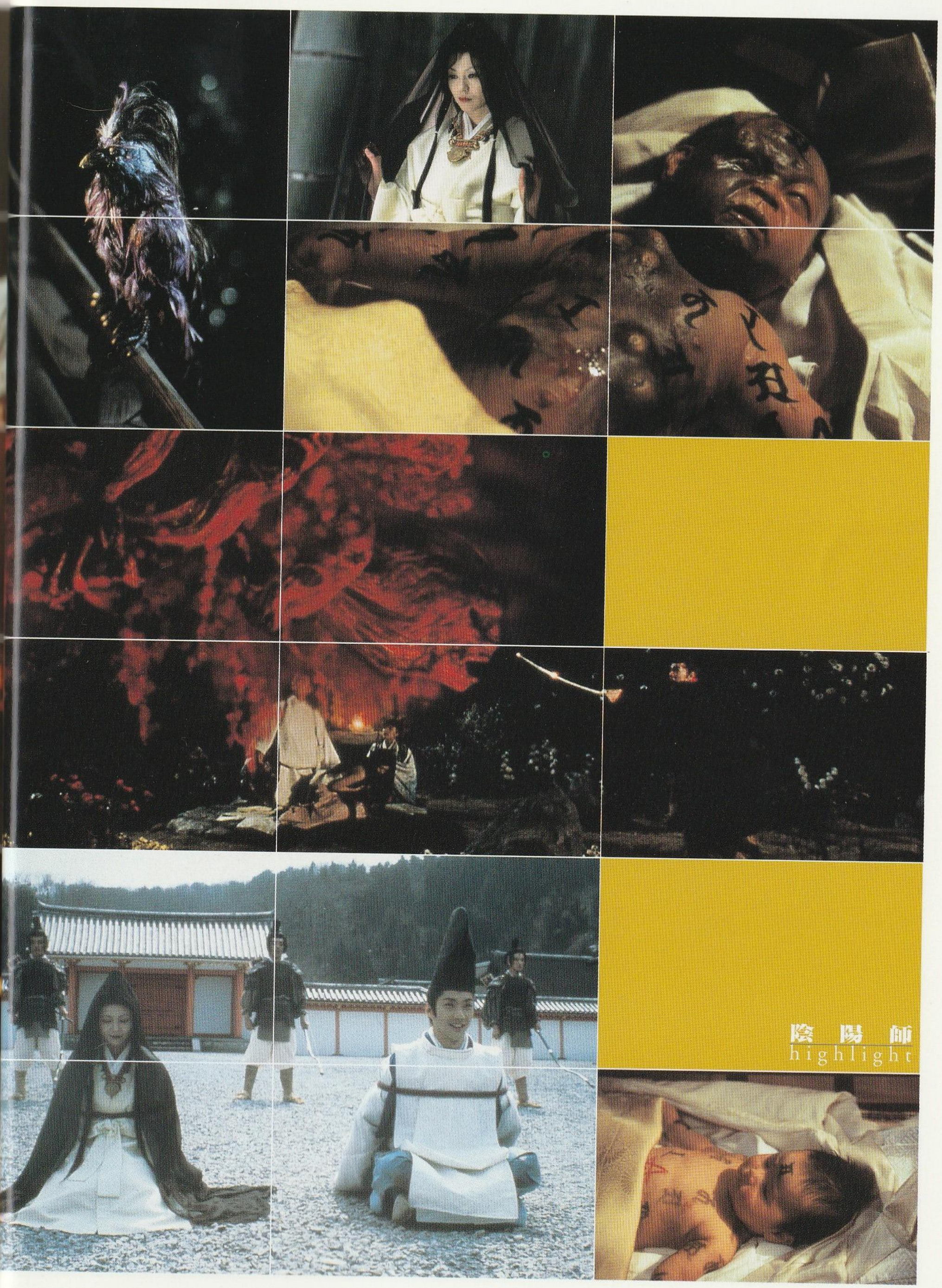
# 例えばこの世で一番短い呪（しゅ）は、

名ということになりましょうか

陰陽師
highlight

# ああ、よいお顔をしておられますなあ





陰陽師
highlight



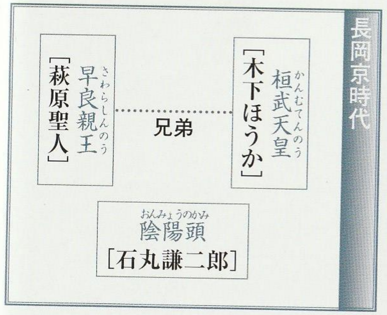
陰陽師
highlight



俺は・・・・・・、お前だけは失いたくないのだ

# 映画『陰陽師』ものがたり

帝と殿上人たちが
栄華を極めた京の都、平安京。
その都には鬼や物の怪、怨霊…
魑魅魍魎が棲まう闇もあった。
平安の闇に立ち向かう一人の男、
名は安倍晴明。




陰陽頭の祭文が響き渡り、将軍塚の前で遷都のための儀式が執り行なわれていた。新しき都の名は平安京。

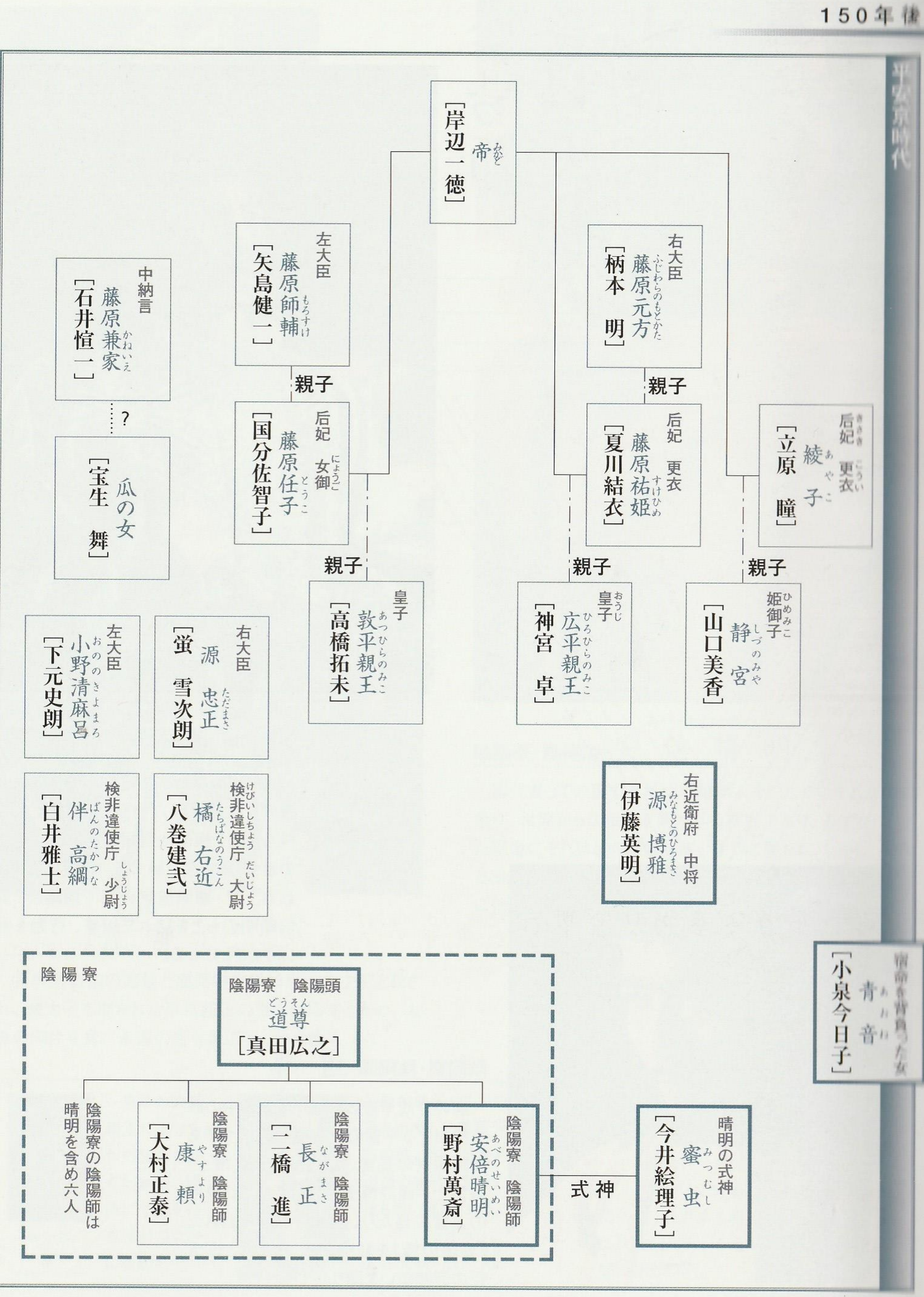
儀式の席に顔を強張らせた一人の女性・青音の姿があった。衆目の注がれる中、青音が人魚の肉片を口に含み飲み込む。それを見届けた桓武天皇は頷き言葉を発した。

「これを以て、新しき都の守りとなさん」

七九四年に長岡京から山城の地に都が移されて百五十年の後、そこには多くの民や物資の往来があるだけでなく、闇が闇として残り、鬼や物の怪、怨霊までもが巣食う都となっていた。この人と鬼とが渾然一体となって棲まう時代に、鬼、怨霊の祟りから逃れようと人々は多くの神社仏閣を建立した。そして、法術を操り闇を消し去る力を持つ者、陰陽師に助けを求めた。

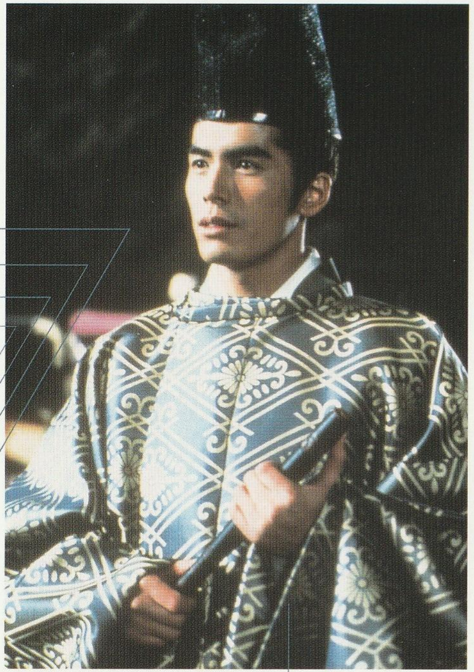
弦楽に秀でた殿上人・源博雅は、一人の天才陰陽師・安倍晴明と出会う。次第に親交を深める晴明と博雅の二人は怨霊を祓う為に、連れ立って出かけるようになった。藤原兼家邸の瓜にかけられた「呪」を解き評判を上げた晴明のもとに、帝から皇子・敦平親王にかけられた「呪」を解いてほしいという依頼が舞い込む。

晴明と博雅の二人は青音の協力を得て、一旦は敦平親王にかけられた強い「呪」を解くのだが、その裏には平安の都を転覆させ天下を我が手中に治めようとする陰陽頭・道尊の恐ろしい陰謀が渦巻いていたのだ…。



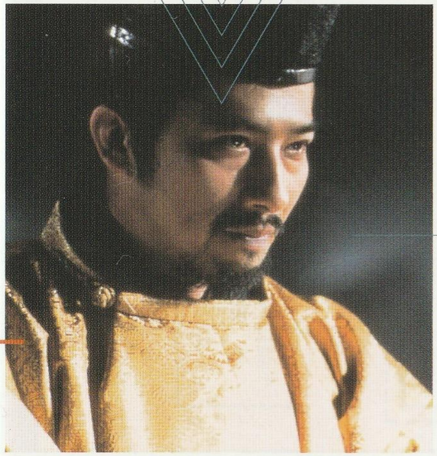
# 陰陽師 登場人物相関図

雅びな平安の世に繰り広げられる人と鬼、怨霊とのせめぎ合い…、それは人間関係の歪みから生じる心の葛藤の写し絵であった。



右近衛府 中将 源 博雅（みなもとのひろまさ）

帝にもつながる血筋の、高い身分の貴族。殿上人としては珍しく純真な心の持ち主で、横笛や琵琶などの管弦楽器の奏者として名を馳せる。怨霊に悩まされる上官・藤原兼家の命で陰陽師・安倍晴明のもとを訪れて以来、行動を共にすることになる。



陰陽寮・陰陽頭 道 尊（どうそん）

暦の作成や吉凶の占いなど禁中の政を担当する平安の政府機関の一つである陰陽寮の長官。陰陽師や天文博士、暦博士、漏刻博士などを束ねる。晴明の上官に当たり、内裏で執り行われた「奏聞の儀」を利用して、右大臣と左大臣の派閥争いを煽り立てる。





陰陽寮・陰陽師 安倍晴明（あべのせいめい）

当代きっての実力を持つ陰陽師。そのたぐいまれな力の余り、世間からは距離を置かれる存在であり、みずからもまた現世にそれほどの執着は無いように見える。しかし、博雅と出会い、共に闇と戦い謎に立ち向かう中で、晴明も徐々に他人に心を開いていくことになるのだが…。



式神

晴明・式神 蜜 虫（みつむし）

晴明が使役する式神の一人（？）。蝶の化身で、冒頭で晴明の不思議な力を示す一役を担う。濡れ縁で酒を酌み交わす晴明と博雅の掛け合いに参加。

協力



青 音（あおね）

長岡京造営の遅延と藤原種継暗殺事件の主犯と目され、皇太子を廃された早良親王の霊を封印するため、人魚の肉片を食べ永遠の命を身に宿した女性。



帝（みかど）

息子の敦平親王にかけられた怨念を解くために、寝所にて鬼を待ち受けることになるが…。



皇后 更衣 祐 姫（すけひめ）

帝の皇子・広平親王を出産した藤原元方の娘。帝の気持ちが他の女性に移った後も想い続けている。

親子

右大臣 藤原元方（ふじわらのもとかた）



平安時代の公卿の一人。道尊による「奏聞の儀」で将来を断たれたことから、心の闇に怨念を抱く。

協力

# 野村萬斎

名 安倍晴明（あべのせいめい）

## 夢枕先生が この役に僕を指名してくださったことには、大変光栄を感じました

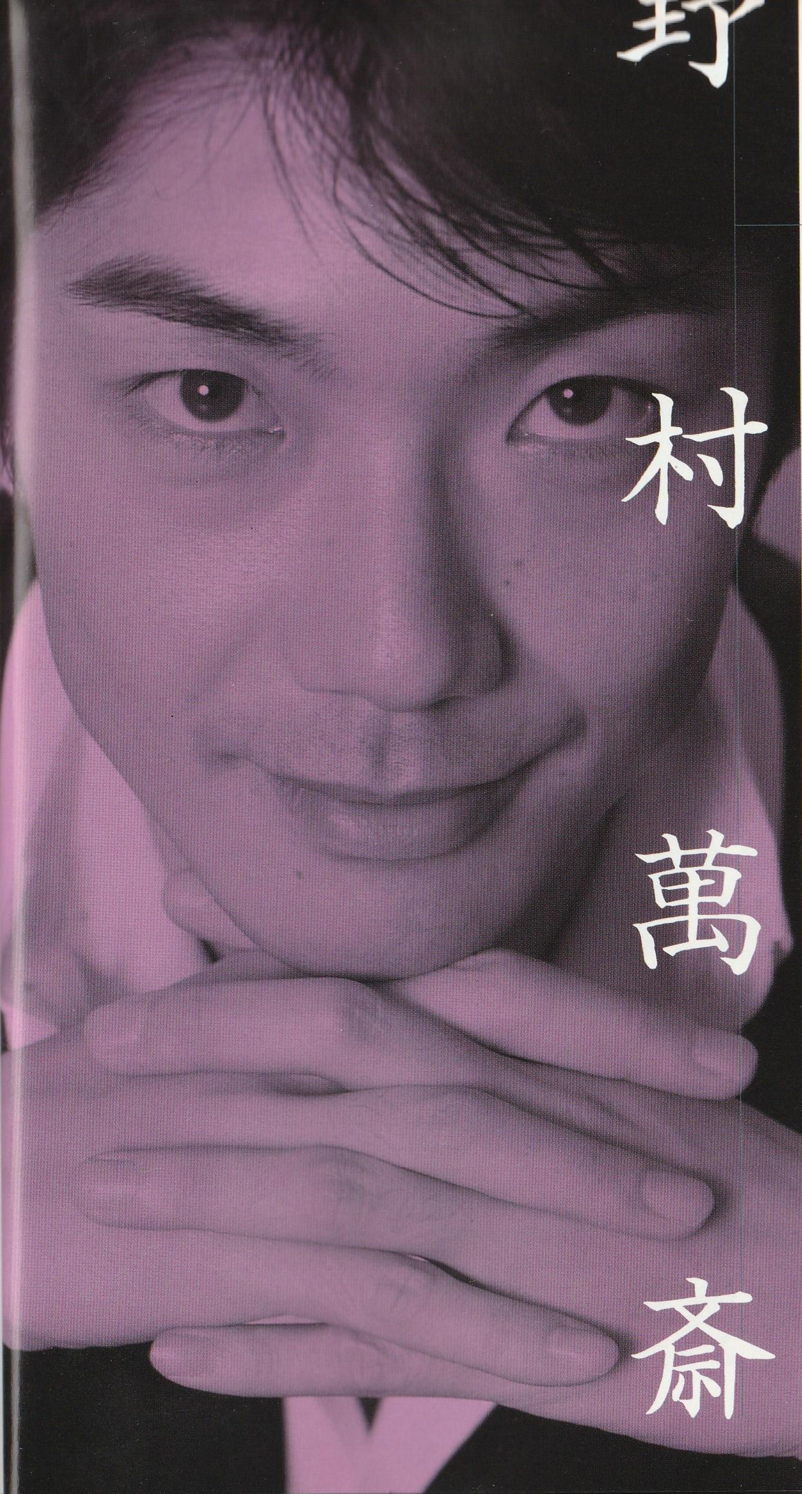
誰もがうなずく配役だろう。希代の陰陽師・安倍晴明役に、狂言という伝統芸能の世界に身を置く野村萬斎というキャスティング。製作発表時も、この役を引き受けた理由として〝自分がやりたいこと、スピリットと通じるものがある〟と語っていた野村。

「この役に、夢枕先生が僕を指名してくださったのには、大変光栄を感じました。でも、きっとやれるな、というか……僕にこの世界をやれ、という理由が、僕にも確信できましたね」

　三歳で初舞台を踏み、以後、狂言をホームグラウンドとしながらも、海外公演やドラマ出演と活躍の場を広げてきた。だが、意外にも映画への出演は'85年の黒澤監督の映画『乱』以来であり、しかも主役での登場だ。だが、彼からはそのプレッシャーは余り感じられない。

「（晴明は）最初、誰が主役かしら、というぐらい余り出てこないじゃないですか。晴明の視点というものは殆ど無くて、博雅や道尊からの視点で進みますから。他の役がカメラを向いて話しているのに、一人だけ背中を向けているシーンが多くて。ただ、そういった存在感のようなものは、我々伝統芸能系の人間でないと難しいのかな、と」

　さらに、狂言や能楽と、陰陽師という職業は、内なる波に身をまかせトリップするという点で根源的に似ているのではないかと野村は語るのだが、それがもっとも端的に現



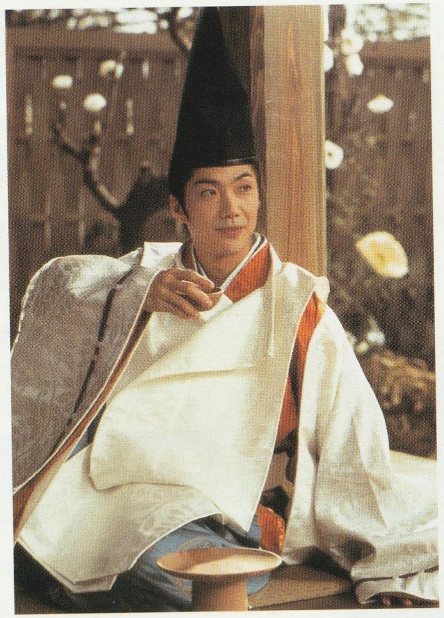












■PROFILE
1966年4月5日生まれ。東京都出身。狂言師野村万作の長男。3歳で初舞台。'94年に『萬斎』を襲名。'97年NHK朝の連続ドラマ『あぐり』に出演し数々の賞を受賞。本作が映画初主演

## 僕らが序破急と呼ぶテンポをぶつけていったとき、真田さんも絶対ついてくる

れているのが、クライマックス”泰山府君祭“のシーンかもしれない。

「最初台本上では、足を踏み鳴らして、あの二人の周りを歩く”反閇（ヘンパイ）“という儀式をやる、ということになっていたんです。色々資料ももらったんですが、どうやろうかと。そうしたら監督がある日、『反閇が、ということを考えるのはやめて、違う次元に跳ぶことにしよう』と。儀式ではなくて、異次元ということを見せればいいのだ、という発想の転換があって。じゃあ、私のやりたいように舞わせて頂きます、と。それで次元を超えるようなイメージ、抽象性を舞で表現したつもりです」

ひるがえる袖さばきの美しさ、豊かな表情を宿す指先——野村”晴明“の醍醐味が詰まったシーンだ。

「晴明という人は、一般的な価値観から見ると、ちょっとヘンな人……どこか崩しているというか、危なそうというか。最初から好感を与える必要はないんですよね。台本を読んだときも、最初は”何、この人“という悪印象から入っていて、僕の好きなパターンだな、と」

晴明と似ている部分は？という質問に「どうでしょうね」と苦笑しつつ語る様子は、明快で歯切れ良く、劇中のクールでミステリアスな面影とは一線を画す印象。”役者“という言葉をまざまざと思い起こさせる、数少ない存在かもしれない。そんな野村が晴明を演じる上で心がけたのは、つねに感情をリセットすることだったという。

「いつもフラットでいる……感情をおもてに出すということは、その場の呪にかかってしまっている、ということになりますから」

”晴明“という呪にかかってはいけない、と口にしつつも、それは決して役者として、やりやすい演技ではない。

「時々やりたくなるんですよ、例えば『……月を指差してこう言えばいい。”あの月をお前にあげよう。“その娘がうんとうなずけばその月はその娘のものだ。』……これ、いいセリフだなあ、ちょっとファンサービスのために言いたいなあと色をつけてやったら、監督に『ちょっと重いね』と言われました（笑）。基本的にはいつも無感情でクール。ただ、その晴明が唯一人間味を見せるのは博雅だ、というあたりで、見ている人は晴明に親近感を持っていくということになっている……と思うのですが。ヒデ（伊藤英明）も非常にチャーミングな博雅で」

三月だというのに雪に降られたりと、撮影スケジュールは過酷を極めたが、スタッフもキャストも息の合った現場だったようだ。

「（撮影中は）適当に和んでいますよ。シーンによりますよね。対決のシーンなんかだと、真田さんともお互い（視線も）ギンギンとして。博雅とは割と和んでいるシーンが多いので、冗談を言ったり、他愛の無い話をしたり——。小泉さんとは僕、年が近くて。ロケの間に、真田さんと僕と小泉さんでカラオケ行ったりして……。生キョンキョン（笑）。どんどんリクエストしてどんどん歌ってもらいましたよ」

そして今回の撮影でもっとも印象に残っているのが道尊役の真田広之との殺陣だという。

「僕は狂言の世界の人間で、真田さん自身もお若い頃から、JACというところで、呼吸を持ってちゃんと動く訓練を受けられていて、僕もそういう意味では肉体労働者というか、型を持って体で表現することを得意としていますから……。例えば僕らが序破急と呼ぶテンポの取り方をぶつけていったとき、真田さんも絶対ついてくるという。そういうことができる役者が、伝統芸能以外にもいるということに、僕はすごく喜びを感じました」

『陰陽師』は、何年後でも古びずに、楽しめる映画だと野村は言う。

「伝統芸能とも通じるところがあるんですが……平安時代を借りつつ、普遍的な、誰にでも対応できる物語になっていると思うので、家族で見に来ていただいてもいいんじゃないかなあと」

晴明は本来なら、ヒーローというよりはアンチ・ヒーローとも言うべき存在。そんな彼が現代に必要とされているのは、一体どんな理由なのだろうか。

「自分を縛っているものから羽ばたきたいんだけれども、羽ばたけないでいる部分がひとりひとりあるだろうと思うのですが、安倍晴明という人はそれをシラッと見ていて、だけどどこかへ跳ばしてくれる存在ですよね。人間は生きている限り、呪にかかってしまうということを気が付かせてくれるというか。それが晴明ブームを作っているのかなと思いますね」







陰陽師 interview

## 晴明は、人間は生きている限り呪にかかってしまう、ということを気づかせてくれる存在

野村萬斎





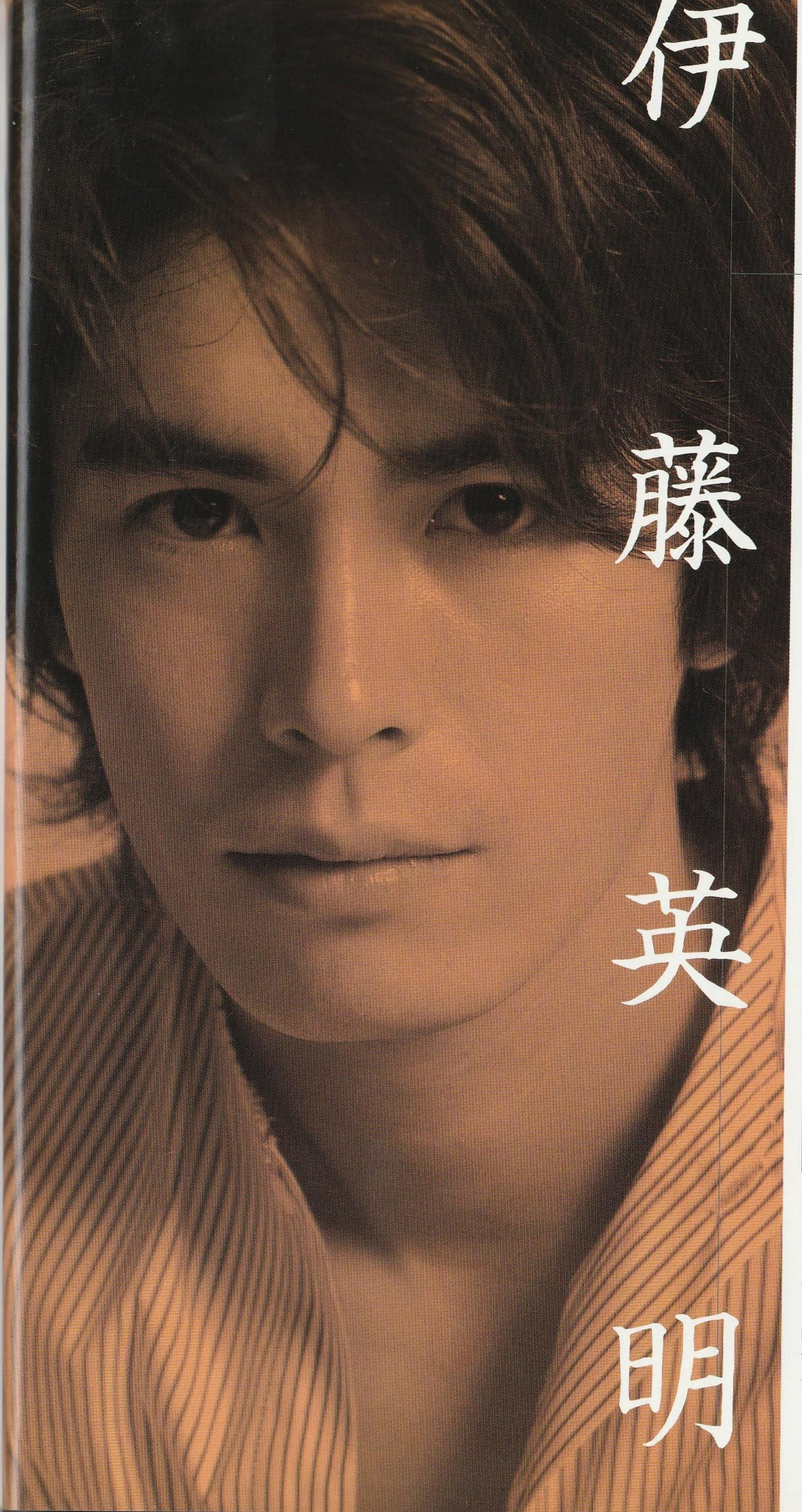


陰陽師 interview

# 伊藤英明

役名

源博雅（みなもとのひろまさ）









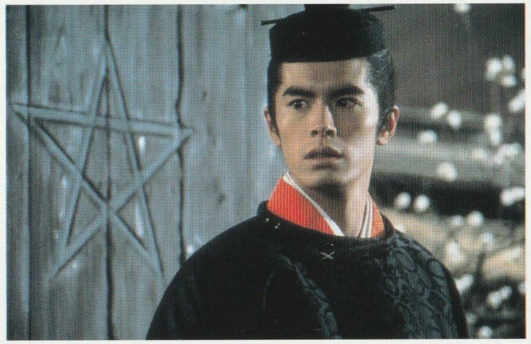
**■PROFILE**
1975年8月3日生まれ。岐阜県出身。ドラマ『デッサン』で'97年俳優デビュー。以後、ドラマ、CM、映画と幅広く活躍。今後が最も期待される若手俳優のひとり。

## 博雅は可愛げのある、犬みたいな男。純真無垢で「呪」にかからない。そういうところ、僕にソックリ（笑）

**陰陽師**
interview

伊藤英明にとって初めての時代劇ということは、我々にとっても彼の、本人いわく「コスプレ」を目撃するのは本作が初めて。そのイイ男ぶりは今さら言うまでもない彼のキマリっぷりと新鮮な魅力に、まず目を奪われてしまうだろう。

「初めて衣装を着たとき、おお〜、似合うなあって。これくらいやっぱりナルシストじゃないと（笑）。時代劇って、大掛かりなコスプレじゃないですか。ナルシストじゃないとできないなと思いましたね」



今回、意識的にナルシストとなった彼は、平安時代の所作や立ち回り、そして源博雅のキャラクターの一部となっている横笛の練習に励んだ。

「横笛は、先生について1ヶ月くらい練習したんですけど、その方に天才だって言われて……本当ですよ（笑）！　普通は簡単に音が出ないらしいんですよ。でも僕、3日で出て。いや、本当なんですって。失敬な（笑）」

衣装や笛の腕前だけではない。陰陽師・安倍晴明（野村萬斎）のパートナーとして大きな役割を果たす博雅は、演じる伊藤自身が、愛嬌とサービス精神に満ちた人だからこそ成立したとも言えるはず。

「やっぱり役は僕から出てくるもんですから、まったく違うものにはならないですよね。博雅は可愛げのある、動物にたとえると犬みたいな男で。純粋すぎて"呪"にかからない。で、そういうところに晴明が惹かれるっていう。その純真無垢なところは僕自身にソックリだなあと。イメージ的には2枚目で売ってるんですけどね（笑）」

クールで無頼派の晴明と、中将という位を持ち、都の存亡のために心を砕く博雅。キャラクター的に両極端だからこそ生まれる化学反応。それは本作の中枢を担うものだ。劇中で晴明が博雅を称してたびたび言う「よき男だな」の言葉には、晴明の博雅に対する愛おしい気持ちが表れている。

「晴明との関係は、友達ともまた違う、ホモセクシャルな部分があるんじゃないかな。恋愛感情的な部分も。それが作品の色気みたいな感じで出ればな、って思いましたね。萬斎さん自身もすごく色気のある人で、今でも晴明役は、僕のなかで萬斎さんしか浮かばない。萬斎さんだったから胸を借りてできたし、うまくふたりの関係が出せたんじゃないかと思うんですよ。萬斎さんも、

陰陽師
interview

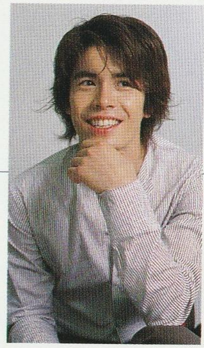
# 撮影は朝から朝までで過酷だったのに、萬斎さんと広之さんはとにかくタフ。ついていくだけでやっとですよ

博雅がヒデでよかったって言ってくれてたし」

野村萬斎とは、おたがいのモノマネをし合っているという一面も。そんなところからも、撮影現場での和やかな雰囲気が漏れ伝わってくる。

「現場の雰囲気はすごくよかったですよ。ただ、もう撮影が過酷だった。朝から朝までスタジオにこもりっきりだし、ずっと衣装をつけてたから、ちょっと寝るっていうのもできないんですよ。でもね、僕は立って寝るっていうのを覚えました。劇中で博雅が居眠りするシーンがあるんですけど、あれもマジ寝です(笑)。萬斎さんと(真田)広之さんはタフで、岩手県でのロケが多かったんですけど、毎日のように飲みに行ってましたからね。すごいパワー。ついてくだけでやっとですよ。広之さんに『俺はいろんな役者さんと飲んできたけど、アイツには勝てない』って言わしめたほどの実力者ですから、萬斎さんは。郷ひろみの歌を腰をカクカクさせながら歌うらしいですよ。あ、言わないほうがいいかな(笑)」

そして、すごいパワーなのは俳優陣だけではなかった。



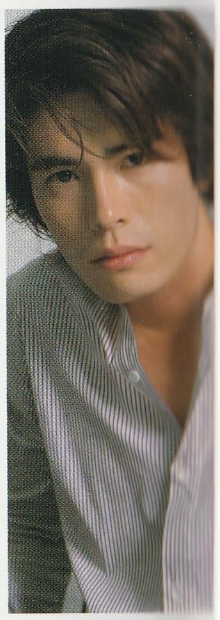
「僕に対してすごいエネルギーをバンバン出してくるんですよ、滝田監督。『秘密』でも仕事してるし、プライベートでもよく飲むんでどんな人間か知ってたつもりだったんですけど、今回何度殺してやろうと思ったか(笑)！　監督には前から『おまえは役者としての基本がなってない』って言われてたんで、いつもうまい具合に逃げてたんですけど(笑)、今回ガッチリとした役をいただいたので、捕まってしまった。運が悪かったです(笑)」

滝田監督はことさら伊藤に厳しかったとか。演技のアイデアも、ことごとく却下されたと、彼は口をとがらせる。

「もうね、全然僕を信用してくれないし、聞いてくれない(笑)。滝田さんは、言うよりやれっていう人なんですよ。『思ったことは出せ』と。せっかく人がしゃべってやろうと思ってるのに(笑)。テストで監督の言うとおりにやるじゃないですか。でも本番で自分が思ったようにやると『おーいっ！　なにやってんだあ！　テストどおり！』って。監督、腰が悪くて歩くのもきついくらいなのに、遠くから僕に向ってガーッと走ってくる(笑)。まあ、最初のうちはそういうこともありましたね」

逆に、博雅の見せ場のひとつである、鬼になってしまった祐姫(夏川結衣)と対峙するシーンでは、監督の演出に従ったという。

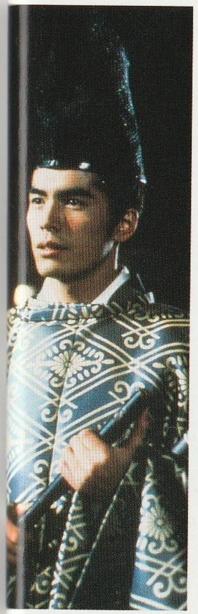
「カセットレコーダーにセリフを吹き込んで、あとは人形が……って、うそうそ(笑)。あれはもう、監督のものでしたね。長回しのシーンで、3回撮ったんですけど、ワン・テイク目は鼻水で顔がボロボロになって、監督に『汚い』って言われて、もっかいやって。2回目は涙のせいでまばたきが多くなって……。あれもテストをふくめて6回くらい真剣に泣いたから、スッキリしましたけどね。あんまり普段泣くことってないじゃないですか。もう、カタチではなく、子供のように泣きじゃくりましたからね。滝田監督に泣き過ぎるなって言われたんだけど、『しょうがないじゃん、悲しいんだもーん！』って(笑)。カット変わりで見せるところで、夏川さんのほうは写らずに僕の芝居につき合ってくれてるときもふたりで泣いてて、おたがいもう、どうなってんの⁉ってくらい泣きましたからね」



監督との数々の攻防戦(？)の結果か、演技の面でも、伊藤は新境地を開拓している。

「博雅は唯一観客の目線に立ってる役なんですよね。作品の笑いの部分を担当している。そういうコミカルな演技は初めてだったし、チャレンジになりましたね。自分自身でも、こんなところもあったんだって。"呪"に驚く表情とかも、もう恥ずかしくて！　ずーっと長回しのなかで、『ハイ、こういう顔して～』って監督に言われて、芝居じゃないじゃん！　みたいな(笑)」

監督の声色を使って、口では憎々しいことを言いながらも、その目からあふれる滝田監督に対する信頼と尊敬の念は、隠せてはいない。伊藤はみずからを"滝田組"と誇らし気に言う。

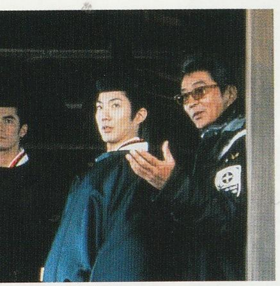


## 滝田監督みたいな監督はいないです。僕も滝田組として、監督がなにかやるときは1カットでも出たい

「監督は、ダメならダメ、いいならいいってハッキリ言うから疲れないですね。信頼関係があります。撮影中も、時間がないなかで何回も何回も俺のためにつき合ってくれたし。こんなにやってくれる監督もいないですよ。また滝田監督がなにかやるときは、1カットでもいいから出たいですね、滝田組として……」

晴明と博雅のように、萬斎と、夏川と、そして滝田監督との間で、伊藤自身も数々の化学反応を起こした。そしてまた、俳優・伊藤英明は滝田監督との間に生まれる新たなものをつかむ日を心待ちにしているに違いない。

「……いや、やっぱり断ろっかな(笑)。なんて、今度は監督に仕返ししてやりたいですね。すごく勉強させてもらった分、芝居で恩返ししよう……とは思わないけど、リベンジはしたいと思います(笑)」









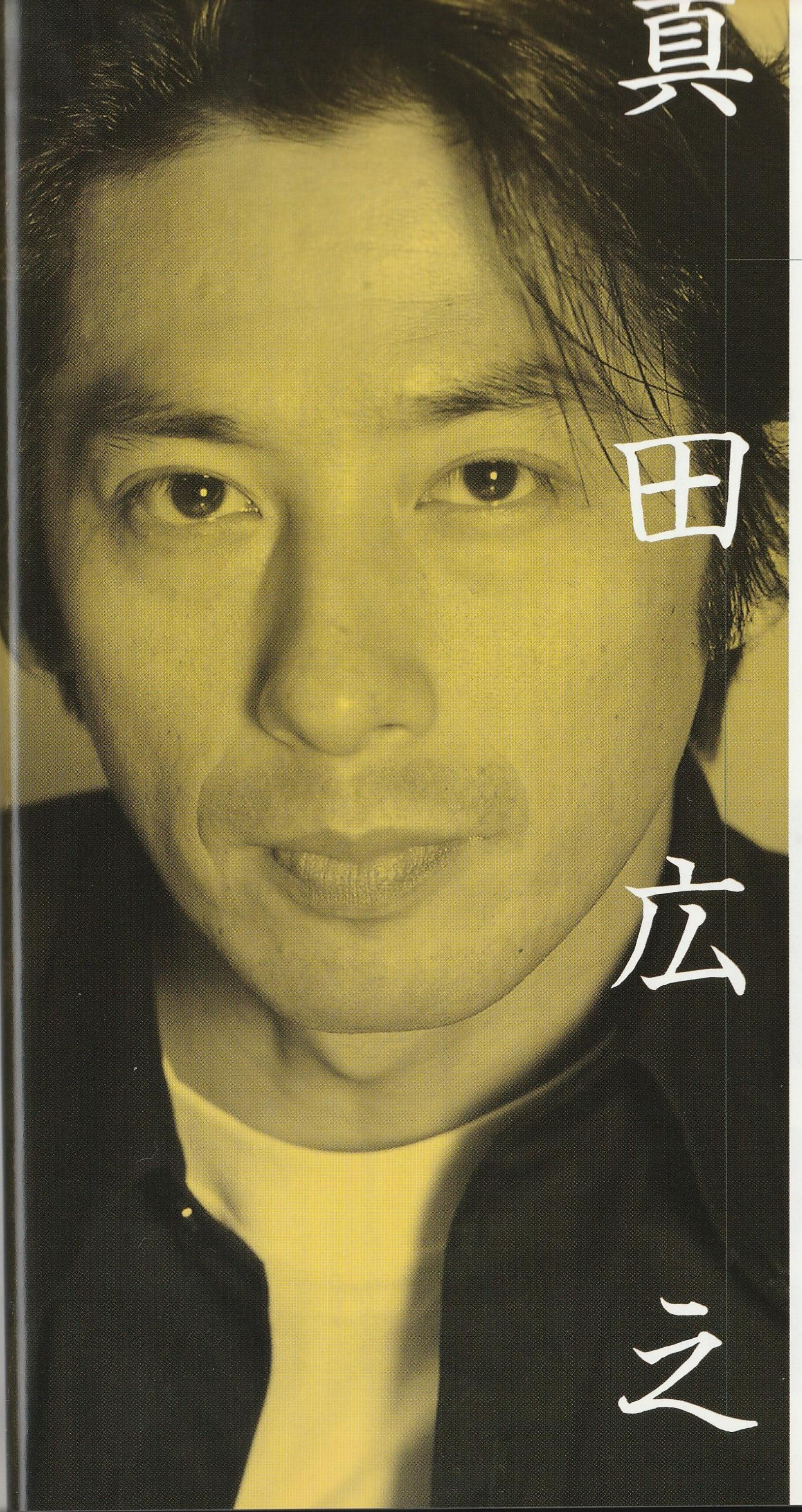


陰陽師
interview

役名

# 道尊(どうそん)

# 真田広之









■**PROFILE**
1960年10月12日生まれ。東京都出身。近年の邦画の歴史と共にキャリアを重ねる一方で、昨年には単身渡英し、ロイヤルシェイクスピアカンパニーに日本人として初めて参加し、絶賛を浴びる。滝田監督とも縁が深い。



『病院へ行こう』('90)『僕らはみんな生きている』('93)など、滝田洋二郎監督とのタッグもこれで5作目。監督は、安倍晴明(野村萬斎)の敵役でもうひとりの陰陽師、道尊という重要な役柄を、真田広之に託した。

「滝田監督とは去年あたりからたまに会って、そろそろなにかやりたいね、なんて話をしていたんですね。それに、滝田さんがCGバリバリの、しかも時代劇をやるって、初ものづくしでしょ? どういうものになるんだっていう興味が非常にありましたね」

監督のやり方も志向も知りつくしている真田の場合、監督との「アイデアのキャッチボール」も現場で頻繁に行われた。その結果、当初、台本にはなかったラストも、真田の提案が採用されることに。

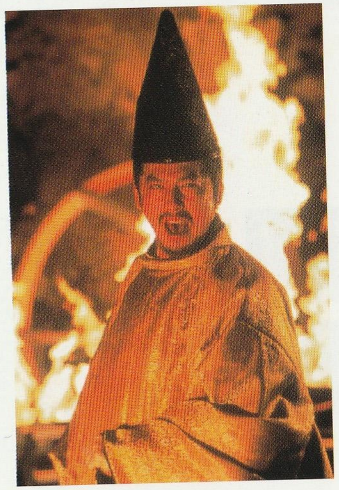
「映画にしては珍しいんですけど、滝田監督は事前に全員集めてホン読みをして、全体のバランスを見るやり方なんですね。でもラストは、撮影に入って2、3週間してからふと、思い付いて。それで監督と相談して、必要な仕掛けとか美術さんにお願いして。なんとか本番に間に合った」

真田のアイデアは、道尊の存在を深く印象づけ、かつストーリー的にも趣きを醸すことに見事に成功している。道尊というキャラクターに真っ向から挑み、劇中での役割をガッチリつかんでいる真田と、彼の役に対する洞察力に全幅の信頼を寄せる滝田監督との間でこそ、起こり得たことと言えるだろう。

**監督がCGバリバリの時代劇をやるっていう興味がありましたね**

「この映画はありがちな勧善懲悪ものとは違って、人間の愚かさ、醜さ、弱さを、晴明が関わっていく事件の中で描いていくっていう話だと思うんですね。だから晴明と道尊の戦いも、善と悪に分かれたライバル対決のように見えていて、じつはそうではない。おたがい陰陽師として認め合ってて、晴明は道尊の命までは取るつもりはないんです。"サラリーマン陰陽師としてはあなたは優秀だから、僕の目の届かないところで生きていきなさい"って(笑)。でも権力という"呪"に取り憑かれて、かつプライドが高い道尊は、だったらただの夢に破れた男として、と。そこにワルなりの哲学が感じられたらって思ったんですね」

実際の撮影でも、滝田監督にとっては初の本格的CG映画だが、真田にとっては自分の庭のようなもの。シーンの完



## 孤独でしたよ〜。ひとりか、パペットが相手で。毎日「早く人間と絡みた〜い」って叫んでましたもん（笑）

成度は真田の力によるところが多い。たとえば、道尊が口から出ている矢を指でなぞるところ。真田の指はブレることなく見えない矢に沿って動き、後から矢の合成をピタリとはめられたと、特撮スタッフも驚嘆するほどなのだ。

「その辺は、特撮がらみの多い時代劇で育ったもんですから（笑）。あれは矢を持って、子供のマジックみたいに"ナイフを飲みま〜す"って世界。けっこう恥ずかしい演技ですよ、3、40人いるなかで、大の大人がやるわけですから。それはもう、"見学者お断り！"みたいな恥ずかしさがありましたね（笑）」

CGとの"共演"でもこれまでの経験をフルに発揮。

「『この辺にCGでムンク調の顔が現れるはずですから』って言われて、じゃあ、これくらい驚いてもいいわけ？　本当にすごいんでしょうね、って（笑）。あとはもう自分のなかで描いた映像を相手にひとり芝居をするだけですから。想像力で補っていくしかないんで、楽しくもあり、しんどくもあり。多いんですよね、僕はこういう役回りが」

それもやはり真田だからこそ。しかし、奢りなど微塵もない彼は、初主演の野村萬斎への賞賛も惜しまない。

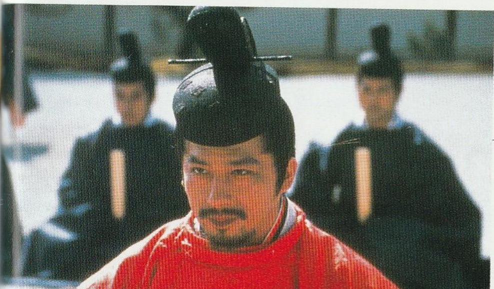
「もう、最初に共演したときに、遠くにいて見つめ合うだけのシーンなのにビシバシ電波が交信できた。ヘンな言い方ですけど（笑）。で、これはいけそうだな、と。当然衣装は似合うし、動きも完璧だし、佇まいがそのまま晴明になってる。いわゆるセリフ回しが上手いとか表面的なことではなく、精神的に完全に役を把握してる、自分の場所を知ってるっていう空気感が非常に心地よかったですね。よく、ふたりですみっこで演技を合わせてたり、気が付けば自主トレしてて（笑）」

野村を親しみを込めて"萬ちゃん"と呼び、現場以外でもよく行動をともにしていたことは、ほかの出演者、スタッフも証言するところ。

「今日はゆっくり飲もうかって、割と熱く語ってみたりなんかして（笑）」

このふたりがサシで話す内容とは一体……？

「映画、舞台全般、それからやっぱり、日本はどうなのよ⁉って（笑）。もちろん、演技の具体的な善後策を練ったりもしたし。」











## 萬ちゃんならここまできてるだろう、じゃこっちもここまで持ってってといて最後にぶつけ合おうって

晴明と道尊が、熱く日本を語るシーンを想像すると、何やらこちらの胸が騒ぐような気もするが……。だが互いへの信頼の深さがうかがえるエピソードではある。

さらに、野村のタフさについてはこんなエピソードも。

「けっこう徹夜続きだったんですよ、撮影！　ホテル出てから帰るまで24時間たってたとか、明るくなっちゃってもう撮れないから終わり、とか。で、昼開始とか言われると、ギリギリまで寝てるわけですよ。それが、なーんか音がするなと思って目が覚めると、隣の部屋で萬ちゃんがお弟子さんに稽古つけてるんですよ、朝から。頭が下がる〜と思いながら、僕は2度寝しましたけど（笑）」

そして、真田の場合、肉体的なだけではなく精神的にも過酷なことが多かったとか。

「孤独でしたよ〜（笑）。ひとりで"呪"を唱えてるか、式神っていうパペットを相手にしてるかで。毎日『早く人間と絡みたーい』（道尊口調）って叫んでましたね（笑）。道尊って、悪に走った理由を細かく語られないじゃないですか。そうなるともう、有無を言わせない強引さで一国を牛耳ろうという意志を露骨に表さなくちゃいけない。そのスピリットの部分でも、萬ちゃんならここまできてるだろう、じゃこっちもここまで持ってってといて最後にぶつけ合おうって、敵を信じて孤独な戦いを続けていた（笑）」

そうして、真田と野村がそれぞれ積み上げていった道尊、晴明というキャラクターがぶつかり合うラストは、最高値で爆発するのだ。

「後半の衣装も爆発してます。ボロボロの、頭はボブ・マーレー状態のやつ（笑）。あれ、すごい気に入ってるんですよ。着たとたんに、もうなんかエネルギーが湧いてきて『道尊モード、入りましたっ！』って（笑）。あの道尊人形のついた携帯ストラップ、作らないかなぁ？（笑）」

真田の圧倒的なボルテージの高さで、道尊は笑いすら誘うほどに濃くて、忘れ難いキャラとしてスクリーンに誕生した。そんな道尊の携帯ストラップがあれば、強力な魔よけとして活躍してくれるはず（笑）。







陰陽師
interview

# 華麗なる陰陽師アート集

天野喜孝（あまのよしたか）

天野喜孝氏によるキービジュアルとコンセプトデザインの数々。妖しく美しい『陰陽師』の映像を生んだこれらのイメージ画を、天野氏のコメントと共に鑑賞していただきたい。



①



③



②

①メインビジュアル決定画
②初期に描かれたイメージイラスト
③「鬼」のイメージ

天野「キャラクターをきっちり決め込んでいくというより、僕の中にある『陰陽師』のイメージをビジュアル化したと言った方が近いかな。イメージボードのような感覚で描きました」





①



②



③



④

陰陽師
art works

⑤



①～⑤鳥辺野より魑魅魍魎が復活するシーンの様々なイメージ

天野「脚本がまだ決定していなかったので、こんなシーンになったら面白いだろうなという僕なりのイメージ画です。いろんな屍が復活するわけだから、鬼だけでなく馬に乗った兵士なんかも描いています」

# 道尊（どうそん）

晴明が持つ潔白な『白』のイメージに対し、道尊には高貴かつ野望の象徴として『黄色』がイメージされている。本編でも、本性を現した道尊は『黄色』の衣装を身につける。

①


②


①②道尊のイメージを表現した2点

天野「道尊の衣装をデザインしたわけではありません。が、道尊というキャラクターは話を担う重要な役だと感じましたので、画には彩色してよりイメージを確立させています」



# 道尊の式神（どうそんのしきがみ）

道尊の側に常に控えている道尊の式神。生物感がありながら、かつ「この世のものではないもの」のイメージが顕著に表れている。

③



①


②

①3種類のラフ。
顔のみパターンを変えて描かれている
②初期のイメージ
③本編登場の式神に近い形

天野「監督からの注文は『カラスなんだけど、カラスそのものではダメだ』という、大変難しいものでした」



# 青音（あおね）

150年の時を超えて都を守る謎の女性・青音。身につけた衣のデザインや装飾品の古めかしさと顔の若さが悲しげなコントラストを生み出している。


①


④


②




③

①③～⑧青音の衣装デザイン画
②装飾品に焦点をあてて描かれたもの

天野「肉体だけが若々しいんだけど、他のものは朽ち果てている“寺院に保存してある仏像”をイメージしました。生身の青音と時間を感じさせるもののギャップが美しいかなと」

⑧



⑦


⑥


⑤

# 蜜虫（みつむし）

可憐なる晴明の式神・蜜虫。本編に登場するキャラクターの中では、唯一生身を感じさせない、幻想的な存在である。

①



②

①～④衣装デザインのために描かれたイメージイラスト

天野「僕の中に蜜虫＝妖精のイメージがありましたので、晴明や博雅と違って、ファンタジーの世界に住んでいる感じを出しました。少女という設定でしたので色っぽさは抑えて、大人の女性になりかけの可愛らしさを表現したつもりです」


③


④





# 祐姫（すけひめ）

女の執念を象徴する存在・祐姫。彼女の物語にインスピレーションを得た天野氏は、一気に多数のイメージイラストを作成したという。


①

②


⑤



③


④

①～⑤祐姫のイメージイラスト

天野「血の海があって、そこから祐姫が這い上がってくる画が頭に浮かんだんですよ。実際にシナリオにはなくても、祐姫の深層心理をビジュアル化するとこうなるというイメージです」

# 映画解説

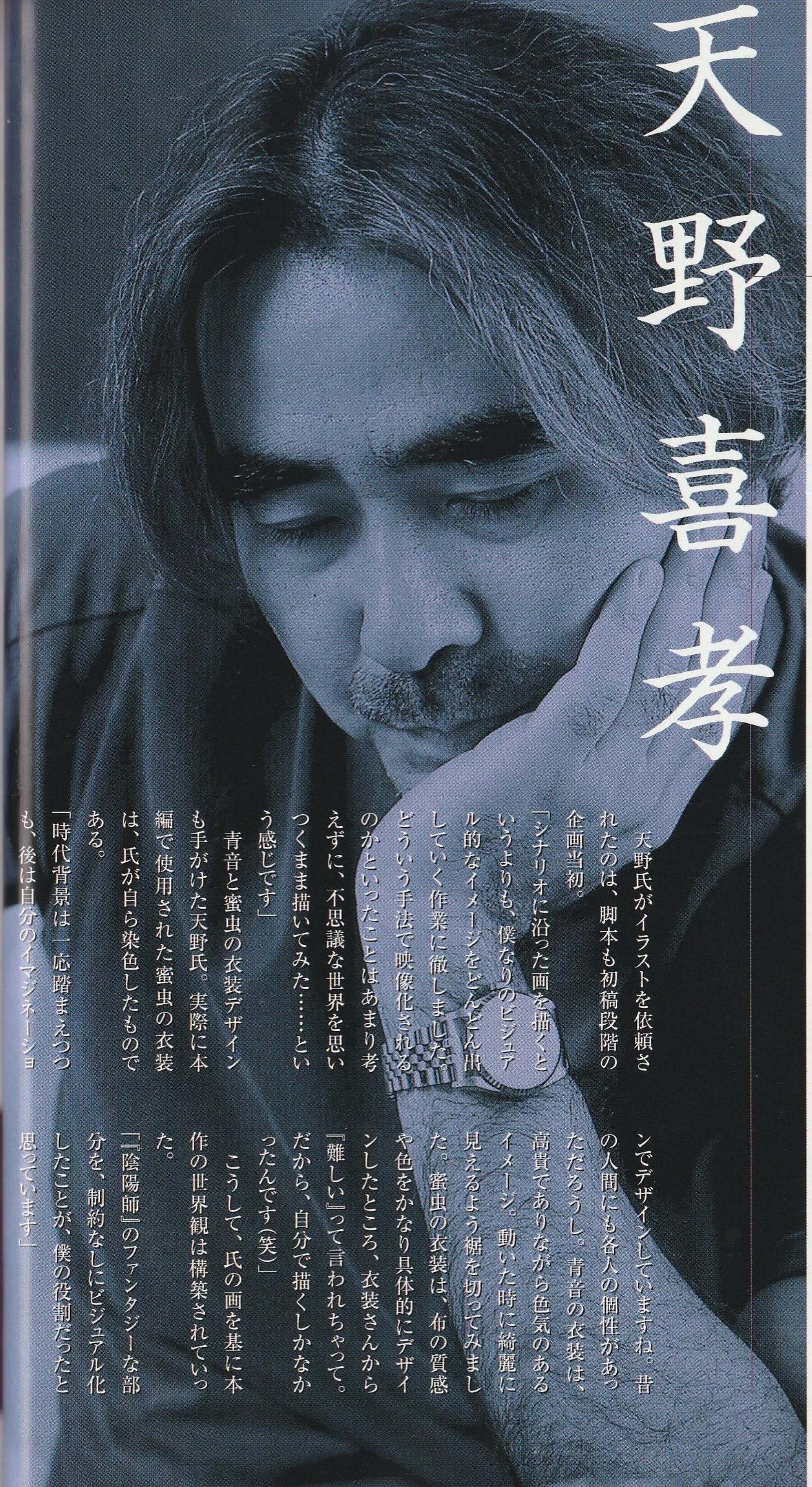
*contents of the film*

初の時代劇に挑んだ滝田洋二郎監督のインタビューの他、
劇中で使用された陰陽術の詳細な解説、
陰陽道指導の高橋圭也インタビューなど、
映画の内容をより深く、濃く追求。



キービジュアル・コンセプトデザイン

# 天野喜孝



天野氏がイラストを依頼されたのは、脚本も初稿段階の企画当初。

「シナリオに沿った画を描くというよりも、僕なりのビジュアル的なイメージをどんどん出していく作業に徹しました。どういう手法で映像化されるのかといったことはあまり考えずに、不思議な世界を思いつくまま描いてみた……という感じです」

青音と蜜虫の衣装デザインも手がけた天野氏。実際に本編で使用された蜜虫の衣装は、氏が自ら染色したものである。

「時代背景は一応踏まえつつも、僕は自分のイマジネーションでデザインしていますね。昔の人間にも各人の個性があっただろうし。青音の衣装は、高貴でありながら色気のあるイメージ。動いた時に綺麗に見えるよう袖を切ってみました。蜜虫の衣装は、布の質感や色をかなり具体的にデザインしたところ、衣装さんから『難しい』って言われちゃって。だから、自分で描くしかなかったんです（笑）」

こうして、氏の画を基に本作の世界観は構築されていった。

「『陰陽師』のファンタジーな部分を、制約なしにビジュアル化したことが、僕の役割だったと思っています」







**■PROFILE**
1952年静岡県生まれ。'84年に『魔天』（朝日ソノラマ）を刊行。以来、イラスト画集の刊行はもとより、ゲームのビジュアルコンセプトデザイン、リトグラフ製作、舞台美術などで多方面で活躍している。

監督

# 滝田洋二郎









■PROFILE
1955年12月4日富山県生まれ。'74年向井寛主催の獅子プロに入社、多数の成人映画を手がける。'85年発表の「コミック雑誌なんかいらない!」で注目を集め、以来、次々と話題作を発表。近作に『お受験』『秘密』(どちらも'99年)など。

意外な気もするが、滝田監督が陰陽師という題材と出会ったのは、企画段階での事だったという。

「いやもう、映画の企画としてでしたね。『陰陽師』ってものを知ってますか、と。で、知らなかったんですよ。まずこういう職業の人が、国にとって大事な地位にいたにも関わらず、知らなかった——陰陽師なる存在をね。原作を読ませて頂いて、……現代から見ると、ある種ちょっとオカルト的な部分もあるんで、あ、これは面白いかなあと」

コミック、テレビ、舞台……と現在様々なメディアで展開されている『陰陽師』。オカルトにやることも出来れば、アクションものとしても作れる。だが、滝田監督が映画という表現の中でやろうと思ったのは、原作の小説の持っているテイストの中でも、現代に通じる人間同士の普遍的なドラマだったという。

「原作には、いわゆる"闇に潜むもの"を描くだけじゃなくて、人間の本質的なことを哲学的に描いている部分もあったりして。今の我々でも同じことを感じる、というのは逆に新鮮ではありましたけどね。映画のテーマも、"人は心ひとつで鬼にも仏にもなれる"というところを大事にしたいな、と思ったんですけれども。ただやっぱり二時間の中に話を収めるためにはどうしても、色んなエピソードをまとめなければならない。まず陰陽師なるものを説明し、理解していただいた上で、面白がらせて、新しい話を作れるか、ということですね。まあ、これは映画の持ってる宿命だから。陰陽五行説なんてことをやり始めたらキリがないし、言葉でしか説明できないですからね。それを頭で軽く固めておいて、あとは具体的にはシーンによってやっていくしかないよね、と。それが正しいのかどうかよりは、面白いかどうかでしょう」

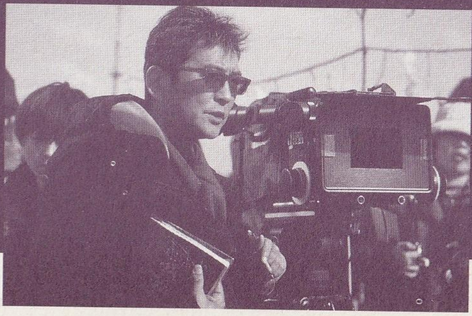
## 『陰陽師』ってものを知ってますか、と。で、知らなかったんですよ

そのために集まった役者陣の豪華さは、他に類を見ない。

まずこの人ありき、の企画だったとも言える、狂言師・野村萬斎。そして、監督曰く"僕の中の時代劇に納まる人"真田広之。

「まずね、決まりかたが凄いな、というか、美しいんですよ、野村萬斎さんっていうのは。背景も自分の絵にしてしまう。それはやはり立ち居振舞いの美しさであったり、声の良さであったり。古典芸能の底力を見せつけられた、という感じでしたけれどね。あれはやっぱり凄いね。古典芸能は芝居が大きいとか、先入観

**陰陽師**
interview



## 道尊と晴明は、お互いにお互いを理解し合える、他の人には理解できない、頂点に立つ二人の戦いにしたかったんです

があったかもしれないけど、彼の場合は芝居の解釈がもの凄く柔らかかった！　それはやっぱり大学時代、シェイクスピアやったりっていうところもあるでしょうけど。今回は、現代劇との接点みたいなところで彼と仕事やって面白かったなあ、っていう気はしますけどね。対する真田さんも、狙い以上だったと思いますね。あれだけの大きな芝居をしながらはまる人ってなかなかいないじゃないですか。僕、真田さんとは何本も現代劇の映画をやってるんで、ぜひとも時代劇も、と。念願の時代劇ですね。彼はまた萬斎さんとは逆で、萬斎さんは古典があって現代劇ができるけれども、真田さんは、現代劇であれだけ柔らかい、繊細な芝居をする人が、時代劇ではあれだけ大きな芝居もできる、という。やっぱり、優れた俳優というのは設定とか関係無しに自分の存在をアピールしてみせる、ということをお二方にはもの凄く感じましたし、また、あの二人で良かったなあ、と思いますけどね」

原作やコミック版では晴明と博雅の友情が読者に支持されている感があるが、今回の映画版では、晴明とライバル・道尊の激突が見所の一つとなっている。二人に関しては、"激しく且つ美しく対峙して欲しい"というのが監督の中でのテーマだった。

「あの二人の役柄的な関係でのことを言えば、ある意味でのホモ・セクシュアル的な部分はあるんですよ。それは博雅をめぐってのことではなくて……博雅と晴明の間にもあるんですが……道尊と晴明は、お互いにお互いを理解し合える、他の人には理解できない、頂点に立つ二人の戦いにしたかったんですよね。それは、ホモ・セクシュアルそのものをやりたいということではないです。ただ、精神的なことを詰めていくと、そういう言葉にしかならない、ということなんです。でも、それは判るでしょ？と言えば、男は判るんです。女性も多分お判りになると思うし。まあ、それが判らなくてもこの映画の見方が変わるわけではないですが」

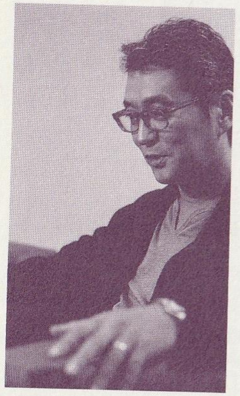
そしてその間に入る、源博雅。生まれながらの貴族でありながら、奢ったところのないピュアな心の持ち主。監督に言わせると「人のいいボンボンだね！」ということだそうだが、同時に彼はこの作品のキーパーソンでもあり、人物解釈は非常に難しかったという。

「博雅については、二枚目でありミュージシャンであり、ちょっと間が抜けているというか。自分では気づいていない才能に長けている。音楽であったり、人を思う心だったり——。人のいい奴っていうのはいるのかなあ、と思っていろいろ考えた結果、ヒデ（伊藤英明）みたいな若いのにやらせてみよう、と。伊藤英明の持っているまっすぐさ、天真爛漫な感じが出ているといいなあと思っているんですけどね。……彼しか出せない表情ってあるなあ。最初に内裏で師輔が『この御子をさしているというのか』と言うシーンで、彼がニコッとするんですよ。あの顔はなかなか、他の俳優じゃ出来ないなあと思うんですよね。そんなに嬉しい顔が出来るのか、っていう表情をするんですよ。だからやっぱり素晴らしいと思いますね、伊藤君は」

滝田監督にとって、初めての時代劇だった今作だが、撮り終えて、監督の中にはひとつ確かな手応えが残ったようだ。

「実際やってみると案外、"何だ、いつも面白がってる通りにやればいいんだ"と。そうじゃないと自分らしさは出てこないんだということがわかりました。撮り始める前にはありましたね、わくわくも不安も全部。この映画には『"呪"に縛られる』という言葉があるんですけれども、僕らも時代劇という名の呪に縛られていて、やったこともないのに時代劇というのはこう撮らねばならぬとか、何となくあるんですよ。だからこそ時代劇って面白いな、って思いましたね。約束事があるようで全然無いんだもの。江戸時代もそうかも知れないけど、この時代ってのはもっとしばりがあって、帝がいるときには決まった人たちしかその場には上がってはいけないよとか、色々あるんですよ。だけど途中でそんなのどうでも良くなっちゃってね（笑）。芝居にならないじゃないか、これじゃ、って。そういうこと感じさせないように、映画の感情をつかんでもらえればいいんではないかと。逆に映画のサイズでは困ったことがあるのね。つまり、普通現代劇だとかなりのアップを撮るじゃないですか。それでも背景がわかるわけ。それがどこか、家ですね、ホテルですね、仕事場ですね……みたいな。ところが、時代劇っていうのはアップを撮りづらいですね。そこは一体どこなんだ、っていうのが判らないんですよね。だって柱ひとつしかないんだから。そういう意味ではサイズは色々苦労しましたね。後は動かし方でうまく見せたいというか。そういう意味では非常に勉強になりました」

監督にとって一つのポイントとなったのは、"怖さ"をいかに表現するかだった。キービジュアル＆コンセプトデザインを担



陰陽師
interview



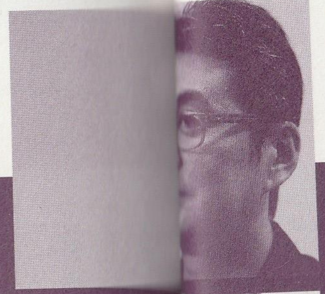
当した天野喜孝にも、物の怪に関してはとくに何枚ものイラストを描いてもらったという。

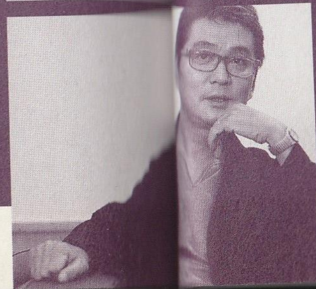
「物の怪や百鬼夜行なんて、誰も見たことがない。で、現代に残ってる絵を見ても、けっこう笑えちゃうんですよね。つまり本来怖いから語り継がれているはずものが、実際にある絵ってのは、もの凄く滑稽なんですよ。それを感じてた人は怖かったのかも知れないけど、実際には存在しないものがああいう風におかしく描かれてるっていうことは、"これが陰陽術の××です"って見せても怖くないだろう、と思って。当事者は怖かったんですよね、多分。だけど生成りにしても、当事者は怖いけれども、はたから見てると笑っちゃう可能性もあるでしょ。そのものを見せて怖がらせるとか笑わせるとかいう映画じゃなくて、見る人によって怖いんですよ、と。映画の場合は、見えないものへの恐れを、見せなければならない。見せすぎると、何やっても怖くない。だから出来るだけ見えないように感じさせよう、というのがテーマで、そこで『天野さん、あなたが感じる怖いものを描いてくださいよ』と要望して、怖いものもいっぱい描いていただいたんです」

## 僕らも時代劇という名の呪に縛られていて やったこともないのに、時代劇こう撮らねばならぬとか、何となくあるんです

やり方次第で映画の印象ががらっと変わってしまうという点では、CGもまたこの映画のポイントの一つだった。今回はトータル200カット以上もCGを使っての作業。物の怪が人を襲うシーンや晴明が陰陽術を使う場面のほか、実は、二人が都大路を歩く場面など、何気ないシーンでさり気なく使われている。

「この映画において、物の怪・怨霊・悪霊であるというのは一体何なんだ、ということをCG班とも相談しました。登場するけど実在してないものを撮ろうとしたとき、CGを使わざるを得ない。でも、そういうものを積み重ねる映画なのか、ということですよね。ですからそれは極力やめて、現実に近いものにCGを足していく、という考え方にしたんですけれども。物の怪と一緒で、見かたによって怖いという人と、CGだと思うと怖くないんだっていう人もいる。それをいかに、感情に即した現実感にしていくかということだけに、今回は重点を置きましたけれども。数じゃないんだよね。集約された象徴的な怖いものを、どう作れるか、ということなのかな。見せすぎないように。例えば、町並みなんてのはCGじゃないと作れない。あと口から鬼を吐き出すなんてのも。そういうのはちゃんとやるけれども。CGはどうしても時間と金がかかるし、かければかけるほどいいものができる、それは今回良くわかりました。後は絞りかた、見せ方の問題ですよね」









## 誰が決めたのでもない呪に、みんな自主的にかかるよね。恋愛なんかも、そうでしょうね

怪異を描きながらも、訴えたいのは時代を超えて共通する人間の情の物語、それが今回の『陰陽師』という映画ではある。

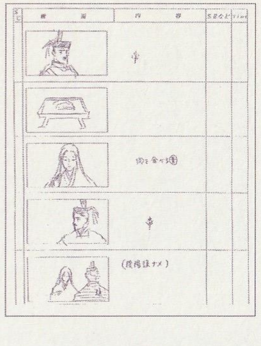
「あなたの周りに似たようなことありませんか?と自分に置き換えて見ていただきたいな、と。あなたの気持ちひとつで、ものの見方というのは色々変わるんじゃないかなぁ。"呪にかかる"という言葉を自分の身に置き換えてみればわかりやすいんじゃないかなあと。僕だって時代劇の呪にかかるかも知れないということがあったし、もっと大きく言うと、映画ってこうじゃなくてはならないという呪にかかっていることもあるんですよ。それはそうでしょう? 仕事はこうでなければならない、社会はこうであるべきだ、とか、立場であるとか。そういう意味では、誰が決めたのでもない呪に、みんな自主的にかかるよね。私は社長の息子だから偉い、なんていう考えは呪にかかっているだけで、そんなことあるかい!ってね。恋愛なんかもそうでしょうね。まあ、特に生成りのくだりなんて、今は実際に姿が鬼にならないだけで、ある種の鬼になる人はいるでしょう、例えばストーカーとか。永遠に繰り返されていることは身近にもあるんではないでしょうか」

陰陽師が内包するテーマは決して古いモノではないのだ。そうでなければ、現代にこんな支持されることがあっただろうか。

「明治時代に、陰陽寮というのは廃止されたらしいのですが、つまりそれまではあったということなんですよね。今でも政治家なんかは占い師に訊いたりすることがあるらしいと聞きますし。僕らだって、お葬式だ結婚式だって、お日柄を選んだりするじゃないですか。そういう意味では、今でも陰陽道的なものって生活の中に相当あるでしょう。だって、七草や豆まき、ひな祭りとか……生活の中で意味合いは違っても残ってますよね。同じように、安倍晴明という存在も語り継がれていくと思いますね」

# 陰陽道 解

不明瞭な部分が多い平安時代の「陰陽道」をはじめ、作中で描かれる世の不思議を解き明かす。

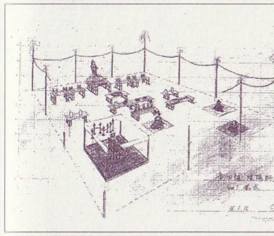


## 弌 早良親王の御霊を鎮める儀式

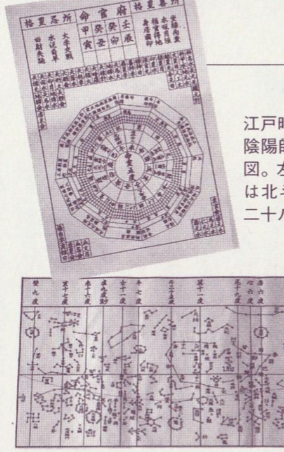
本編の冒頭。平安京遷都の主因となった早良親王の御霊を鎮める儀式、そのハイライトシーン。祭司は桓武天皇、場所は将軍塚。祭壇中央に置かれているのは人魚である。斎王の陰陽頭が「東に青龍、西に白虎、北に玄武、南に朱雀、これすなわち四神相応、平安の地……」と祭文を唱える。最後に平安京守護を命じられた青音が、「御贄」から切り取った人魚の肉を食べて、儀式は終了する。

日本古来より人魚といえば、『若狭国風土記』などに記されている八百比丘尼伝説が有名だ。その昔、若狭の国（現在の福井県）で娘が人魚の肉を食べてしまった。それ以後、彼女は老いることがなく、数百年も生きて、最終的には尼になったという物語である。

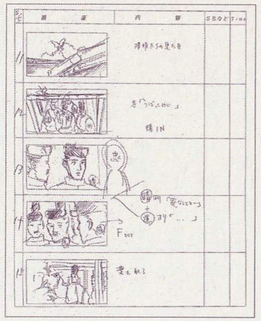
ここでは、青音が帯びた使命と、なぜ後の世に晴明たちと出会った時も若い姿のままでいられたのか、その理由が描かれている。

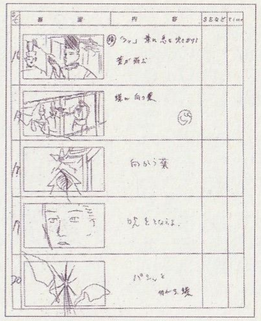


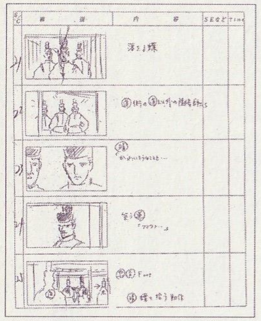
桓武帝が祭司となって行った早良親王（すどう天皇）御霊会の祭壇配置図。



江戸時代、陰陽寮の陰陽師が使っていた図。左は占星盤、下は北斗を中心とした二十八宿を表す。







## 弍 蝶をあやめる

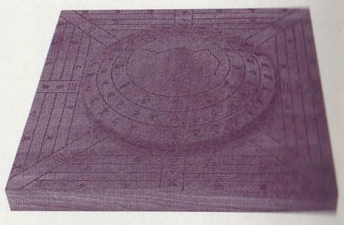
陰陽頭・道尊の腹心である長正に、奏聞の儀に出席しなかったことと、陰陽頭の前で慇懃な態度をとったことを咎められる晴明。そこに、たまたま通りかかった忠正が「陰陽師の位などたいした意味もあるまい。必要なのは方術の力。優っている方が上じゃ」といいだし、それを証明することになってしまう。

『宇治拾遺物語』の晴明は、若い僧たちの頼みを断れず、式神を宿らせた葉で蛙を殺すが、ここでは飛んでいた季節はずれの蝶を、息を吹きかけた葉で真っ二つにしてみせるのだった。

……というのは、実はその場の方便で、晴明が方術を使って周囲の人々に見せた幻影だったというのが、このシーンの真相。晴明は、剣に見立てた指で葉の表面をなでて、「入式神見幻夢」と唱えることで、幻を見せる式神を葉に宿らせたのである。

真相を知らない長正たちは、晴明が不可視の手段で蝶をあやめたと信じて恐れ、博雅はいたずらに命が奪われたと信じて心を痛める。しかし、道尊だけは驚きもせず、ただ不敵に笑っていた。彼は晴明の術を見抜いていたのだ……。

晴明が用いた印は、実際に道術を用いる時に使われているもの。真っ直ぐ立てた2本の指を剣に見立て、術を施すのである。呪文の方は、本編のために作られたオリジナルで、「式神よ、葉に入って幻を見せろ」ぐらいの意味である。このように陰陽道の呪文は、漢文調であることが多かった。



本編で晴明が使っていた木製の六壬式盤。円盤部分は天を、方盤部分は地を意味しているという。

映画鑑賞前後にぜひ一読

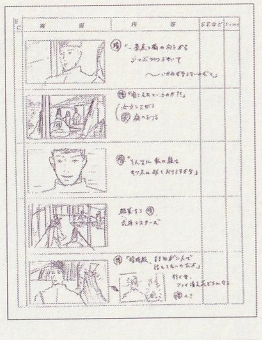
## 陰陽道 用語辞典

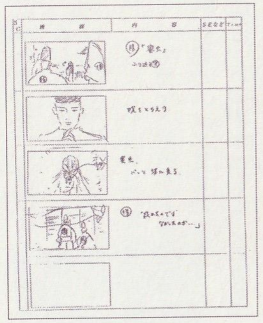
**【陰陽】**原義は山の日陰（陰）と日あたり（陽）で、万物生成の源である「気」の両面を表す。「陰」は受動的で静・重・柔・冷・暗などの性質を持ち、能動的な「陽」は動・軽・剛・熱・明の性質を持つ。万物は陰陽の交合によって生じ、その消長によって四季が形成されると考えられていた。

**【陰陽五行説】**易から発生した陰陽説と、世界は木・火・土・金・水の5要素を組み合わせでできているとする五行説を融合させて森羅万象を説明するのに用いられた哲理。陰陽説とは世界が陰と陽との対応にあるとする相対的な論。五行のうち、木・火は陽に、金・水は陰にそれぞれ属し、土はその中間にあるとされる。

**【卜占】**暦を使った占術全般を指す。元来は陰陽寮によって掌握された皇室のものであったが、鎌倉期以降は庶民の間にも広まった。具体的な吉凶判断は、日ごとに配された十干十二支、六十干支や陰陽五行に基づいて定められている。

# 三 安倍晴明の式神たち





藤原兼家邸の松の木に瓜がなったのは吉か凶か？ 事の次第を判じてもらうため、源博雅は安倍晴明邸を訪れた。人気のない庭を抜けると、そこには幾人かの女たちに囲まれ、館の主である晴明がのんびりと寝そべっていた。博雅は要件を話すため、晴明に人払いを頼む。すると、女たちのさざめくような笑い声がふと途切れて、あとには花や美しい紙を切り抜いた人形だけが残っていた。女たちは式神だったのだ。そして、庭で花と戯れていた少女・蜜虫も人ではなかった。晴明が「現成真姿（げんせいしんし）」と唱えると、その姿はかき消え、代わりに晴明があやめたはずの蝶がひらひらと舞っていた……。

『陰陽師』での晴明は、花や蝶の精霊を式神としているが、これは映画のためのフィクション。実際には、式神とは目に見えない鬼神であったと伝えられている（余談だが、晴明が蜜虫の正体を明かした時の呪文「現成真姿」も映画オリジナル。幻を解いて本当の姿を現せ、という意味がある）。

また道尊の式神は、毒々しい飾り羽根を持つ3本脚のカラスだ。3本脚のカラスといえば、日本神話に登場する「八咫烏（やたがらす）」を連想するが、これは神鳥やカラスの精霊などではなく、たまたま鬼神がこのような姿形をとっていると考えるべきだろう。

陰陽師は式神を使役するというが、特に晴明には式神にまつわるエピソードが多い。彼の屋敷には人気がないのに、庭が掃き清められ、荒れる気配がないのは式神がいるからだとか、彼の妻が式神を恐れたので一条戻り橋のたもとに隠したなどである。古伝によると、どうも晴明は日常的に式神を使っていたようだ。博雅が一条戻り橋の上でボヤいた内容を知っていても不思議はないのである。



道尊が使役していた式神。情報収集を主な役目とし、晴明たちの行動を密かに監視するなどしていた。

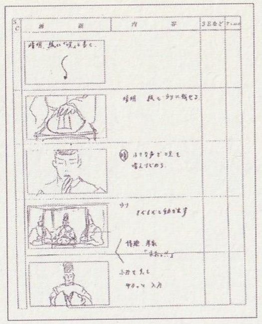
**【陰陽道】**
中国古来の「陰陽五行説」によって森羅万象を解き明かし、それを予見し、制御しようとする総合的な技術。占術を専門とする「陰陽」、天体観測により地上の出来事を予測しようとする「天文」、暦の作成をする「暦」、時刻を知らせる「漏刻」にわかれ、朝廷と陰陽道が深く関わっていた平安～室町時代には、多くの陰陽師たちが「陰陽寮」に属していた。

**【五行　ごぎょう】**
陰陽道では、森羅万象を「木」「火」「土」「金」「水」のいずれかに分類し、各属性の盛衰（相生相剋）によって、物事の相性や成り立ちを解き明すと考えるのが五行説である。木は火を、火は土を、土は金を、金を水を、水は木を生かすのを「生じる」、反対に、木は土を、火は金を、土は水を、金は木を、水は火を害するのを「剋す」という。





# 四 松の木に実った瓜の呪（しゅ）をとく

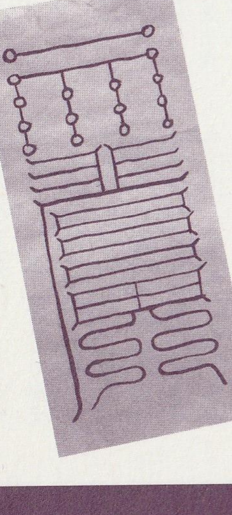


博雅の願いで、藤原兼家邸を訪れた晴明。庭へ行くと、確かに博雅が彼に話した通り、松の枝に見事の瓜がなっている。それに呪がかけられていると看破した晴明は、早速必要な呪符を瓜に張りつけ、呪文を唱えた。「乾坤定位（けんこんていい）　赫々煌々（かくかくこうこう）　解呪瓜（かいじゅか）　現出蛇蠱（げんしゅつじゃこ）　急々如律令（きゅうきゅうにょりつりょう）」。

繰り返し唱えて、彼が剣印で瓜を切る所作をすると、その表面がうねると不気味に蠢きだした。あまりのことに、思わず声をあげてしまう博雅たち。しかし晴明は少しも慌てず、かねてより用意してあった小刀で瓜を二つに切ってみせた。ぱっくりときれいに割れたその中身は、なぜか黒かった。それもそのはず、中には黒々と鱗を光らせた蛇がとぐろを巻いていたのである……。

このシーンで晴明が使った霊符は、江戸時代の土御門（つちみかど）家関連の資料の中にある「三災解除章（さんさいかいじょしょう）」に記されていたのをアレンジしたものである。実際に陰陽師たちが災難を退けるのに使っていたものだ。またこの奇妙な事件を解決した後、晴明は博雅に、兼家に寄り添う亡霊を見せている。この時唱えた呪文は映画オリジナルで、「開心眼（かいしんげん）　変見鬼（へんけんき）」というもの。方術で一時的に博雅の心眼を開き、亡霊が見えるようにしたのである。

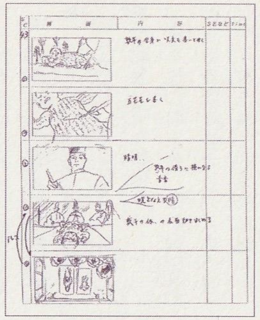
松は長寿の、瓜は多くの実をつけることから子孫繁栄の象徴とされる。松の枝に瓜がなり、その中に蛇がいたのは、亡霊となった女性が、自分を捨てた兼家、あるいは自分から恋人を奪った女性とその子供たちを呪っていたからかもしれない。真相はわからないままだが、少なくとも『古今著聞集（ここんちょもんじゅう）』の「陰陽師晴明、早瓜に毒気あるを占ふ事」をモチーフにしたこのエピソードが、いつの時代も変わらない男女の恋愛の悲しみを描いていることだけは確だろう。

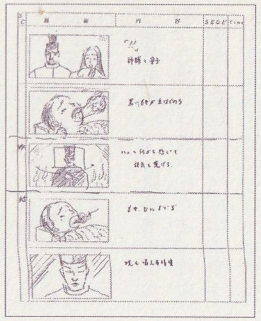


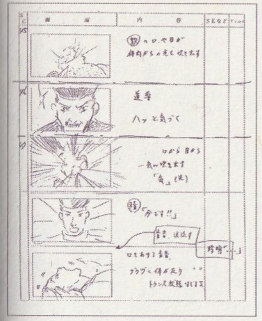
陰陽師が使った呪符。彼らは術を行う際、目的に応じてこのような符を用意した。

**【式神】**
識神、または単に式ともいう。人形に切った紙にかりそめの命を宿したり、「蠱毒」という、複数の毒虫が入った壺を土に埋めて、数日後生き残った虫の生命力の強さを利用するという方法もあったという。伝説や物語の中の晴明も、自由自在に式神を駆使するが、その正体は具体的に明らかにはされていない。式神の使役は秘中の秘であったからだが、式盤に描かれた十二の星の化身＝月将や十二神将であるという説が有力だ。

## 五 敦平親王にかけられた呪を解く





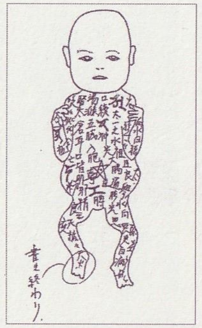


その誕生時、道尊らの祈祷によって魔物や呪い、穢れから守られた敦平親王だったが、誕生後間もなく呪詛を受けてしまう。晴明は敦平を救うべく、その全身に墨で直接呪文を書き記し、呪詛解穢の儀式を行うが…。

その昔、病は風が運ぶと考えられていた。そこで晴明は「あめつちに きよらかす さゆらかす かみのみいぶき あめのみあらしつちのまくしき きよらかす」と歌って、呪力をこめた風で穢れを吹き飛ばし、依童役の青音に身代わりをさせて、後に呪いの正体を暴こうとした。

その頃、道尊はアジトで敦平への呪詛を行っていたが、晴明が呪詛解穢をはじめたのを察知し、それまでの「ゴンゴロゾウギョウミン ダンニヤコウホウ レンヨウケントン アンダラタウン」という呪文から、より強力な「ゴンゴロゾウギョウミン ミタマガリ オン サワラ アンダラタウン」という呪文に切り替える。が、それに素早く反応した晴明に「風蹴魔 陽邪歴 討昇化 風魔天帰」と術を切りかえされ、呪詛を解かれてしまう。

この一連のシーンで晴明は古神道風、道尊は両部神道系の方術を操っている。これは、表の世界の道尊は、陰陽頭として正統派の術を使うが、裏では日本古来の呪いや、怪しげな呪詛を行っているというイメージからきたもの。また道尊の呪文は、実在する両部神道系の真言の中から、濁音が強調されている部分を選んでアレンジしている。



解呪の儀式の一環として敦平に書いた呪文は漢字と梵字がまざったもの。身体の中心であるヘソにセーマンを加えて完成する。

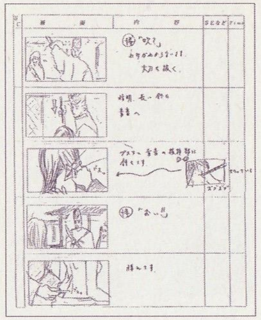
**【四神】**
中国伝来の聖獣。それぞれ陰陽五行説に基づき——
青龍…東／春／青／陽
白虎…西／秋／白／陰
玄武…北／冬／黒／陰
朱雀…南／夏／赤／陽
——を司るとされる。またこれに黄竜をを加える場合もあり、これを「五神」という。黄竜は、中央／土／黄／太極を象徴し、土は各季節にふくまれるとされた。

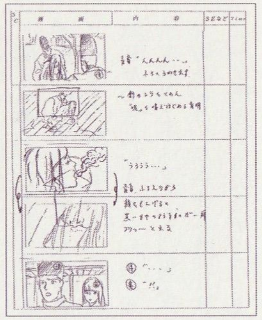
**【四神相応の地】**
風水上、四神に守護されているとする土地のこと。
青龍…河川
白虎…街道
玄武…山
朱雀…池
これらの聖獣の相を持つ土地は、王城にふさわしい吉祥の地とされ、都を定めれば必ず繁栄するといわれた。





## 六 呪の正体を見極める





敦平にかけられた呪詛を肩代わりした青音。晴明は彼女の体内に封じられた呪の正体を暴くため、術をほどこすことになる。

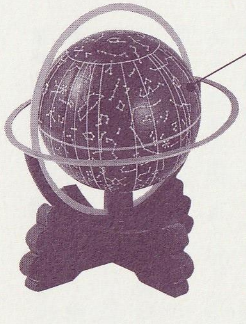
晴明が青音の身体に針を刺したのは、首の後ろにある「風府」と腰のあたりにある「命門」というツボ(ちなみに前者は風邪に、後者は腎臓によいとされている)。このツボに針を刺すという行為は、方術的に意味のあることではなく、完全なフィクション。

しかし、彼が使ったのは「烏枢沙摩明王の真言」といい、古来より穢れを祓い、浄化するために唱えられてきた呪文をアレンジしたものである。

「オン・アミリテイ・ウン・クロダノウ・ウンジャクソワカ」と、唱えながら唇を針にあてることで、真言は震動となって針を伝わり、青音の体内に直接響く。そうすることで、青音につかせた呪詛を体内から追い出し、博雅の刀で断とうというのが、晴明の作戦だ。

やがて術がその効果を高めていくにつれ、青音は苦しそうに身体を痙攣させはじめる。それが最高頂に達した時、青音の口から膨大な妖気が立ちのぼり、彼女の顔は老婆のように変わり果ててしまう。そもそも人を呪殺するために放たれた呪を無理矢理体内にとどめていられたのは、彼女が生死を越えた存在だからこそ可能だったのだ。とはいえ、いくら不老不死の身であっても、それは非常に困難な作業であったかもしれない。

博雅が斬り損ねた妖気が、はるか東の方角へと去った後、晴明は、青音に「呪の正体はわかりましたか」と訊ねるが、彼女は否と答える。しかしこの時、彼女はすでに呪の正体を知っており、晴明もまたそれに気づいていたのである。





陰陽師たちが天文観測に用いた天球儀。陰陽道では、天文上の異変は地上での大事件を予兆していると考えられていた。

**【将軍塚】**
平安京遷都の際、桓武天皇が、坂上田村麻呂の像に甲冑を着せて埋めたという塚。朝廷に危機が迫ると、塚が揺れ動いたという。

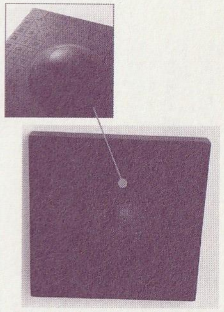
**【セーマン】**
晴明桔梗とも呼ばれる、五芒星の紋。五行の相生相剋を象徴するともいわれ、古来より公民を問わず魔除けとして用いられていた。地域によってはドーマンとセットで用いられる場合もある。

# 七 六壬式盤（りくじんしきばん）を前に祈る道尊

天変地異という言葉がある。その昔、陰陽道の世界では、天上の異変は、地上での事件を予兆していると考えられていたのである。また北極星を中心に輝く空の星々は、天皇を中心とした朝廷の官位と対応してもいた。それらに現れる兆しを読みとり、天皇に奏上するのが、陰陽寮の中でも天文を司る者の役目であったという。

本編の冒頭で、月の近くに星がふたつ輝いていたのを覚えているだろうか？ 陰陽頭・道尊は、当初それを「まもなく都の守り人が現れるとの意」とまでは読み解いていたが、それが誰であるかは、この瞬間までは知り得なかったようだ。そこで彼は、式盤に式神を宿らせ、それが式盤を動かし、そのふたつの星が示すところの意味を導きだす。彼が行ったのは「式占」という、陰陽道の代表的占術であり、式盤を使って「六壬式占」という占術を駆使するものである。


早良親王の辞世の歌を記した血染めの衣で、道尊がアジトの祭壇に祀っていた。彼は如何なるルートで手に入れたのだろうか？

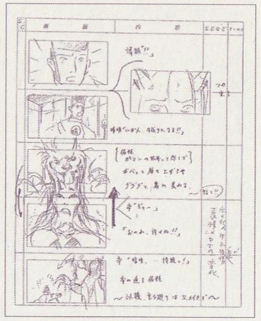

道尊が使っていた鉄製の式盤。前出のものと違い、中央が円錐形になっている。

# 八 藤原元方（ふじはらもとかた）の尋問を受ける晴明

道尊に操られた藤原元方の陰謀により、検非違使に捕縛されてしまった晴明と青音。ふたりは政庁の庭に引き立てられ、元方に尋問される。それは道尊が、元方を操り、晴明を亡き者にするべく仕組んだことだった。しかし、肝心の元方は晴明にあっさり言い負かされ、さらに元方の政敵・藤原師輔が現れて、晴明たちの容疑は不問になる。

最終的に、道尊は強硬手段をとるべく、傍らにひかえていた検非違使のひとりに術をかける。彼か扇の陰で結んだのは陀吉尼印、唱えた呪文は「陰鬼斬殺」である。検非違使に鬼を宿らせ、男が錯乱したとみせかけて、晴明を斬らせようとしたのだ。しかしそれさえも、最終的には青音の機転によって失敗してしまうのだが……。

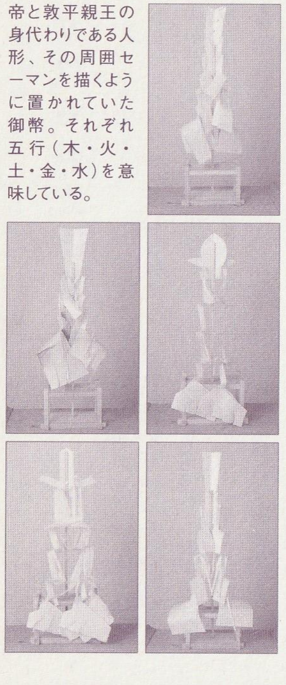
# 九 呪の正体を見極める

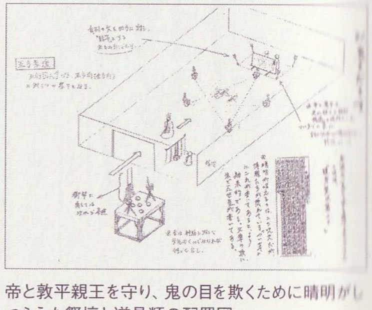


はからずも晴明の命を救った藤原師輔。そのたっての願いで晴明は、夜毎に帝と敦平親王の元に現れる鬼退治をすることになる。晴明は、帝と敦平親王の髪を藁で作った人形に入れ、内裏の一室に安置し、その周囲を取り囲むように祭壇をしつらえて結界をはった。この結界は声を出さない限り、鬼の目から帝と敦平親王の姿を隠しつづける効果があった。帝と敦平親王は御簾の影に、博雅は帝たちを守って衝立ての裏に、晴明は鬼から姿を隠して見えなくする「身固め」の呪法を行い、鬼が現れるのを待つが……。

晴明がしつらえた祭壇は「五方祭壇」。五行説に基づき、それぞれ「木」「火」「土」「金」「水」に対応した五つの御幣と供物を用意したもの……という設定。型通りなら青・赤・黄・黒の五色の御幣を用意するところだが、本編ではビジュアル的効果を高めるため、現在も高知県物部村に伝わる民間信仰「いざなぎ流」の御幣数種を参考にして作られた。また、晴明が唱えていたのは「諾々睪々（だくだくこうこう）左帯三星右帯三牢天翻地覆九道皆塞……」とは、呪禁道の護身禁法という呪文である。

当時、貴族階級の人々は、このように呪詛や異変が起きた際は身を慎んで物忌みし、陰陽師や僧などに祈祷をさせて凶事をやり過ごすという習慣があった。


帝と敦平親王の身代わりである人形、その周囲セーマンを描くように置かれていた御幣。それぞれ五行（木・火・土・金・水）を意味している。


帝と敦平親王を守り、鬼の目を欺くために晴明がしつらえた祭壇と道具類の配置図。

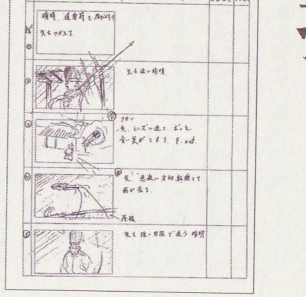
【大金神】
金神ともいわれる陰陽道が産みだした方位神。一カ所に留まらず年毎・季節・日時に合わせて遊行し、この神がいる方角を犯す（事業を興したり、出向いたりするなど）と祟るとされ、大変恐れられた。

【泰山府君】
陰陽道の主神。人の生死を司る神、あるいは閻魔大王の書記官ともいう。元々は中国五岳に数えられる泰山（東岳）に降りて神となった星の精であり、現在は中国泰山を神格化した東岳大帝と同一視されている。この神を陰陽道の主神としたのは安倍晴明であり、彼が泰山府君を祭って奇跡を起こしたとい説話は多い。

【式占】
式盤と呼ばれる道具を用いて行う占術。紀元前の中国で生まれ、日本に伝わった後は陰陽師たちが多様したという。六壬、遁甲、太一、雷公などの種類があったが、雷公は早い時代に失伝し、遁甲と太一はその使用を禁じられ、専ら陰陽寮において六壬式占のみが使用を許されていた。現在も、「陰陽寮六壬式占文」という報告書が多数残されている。

【道尊符】
本編のために新たに作られたキャラクター、道尊の紋。門の中に人型を抱き込んだようなマークで、原作者・夢枕獏氏原案によるもの。

# 拾 源博雅にかけられた呪を還す

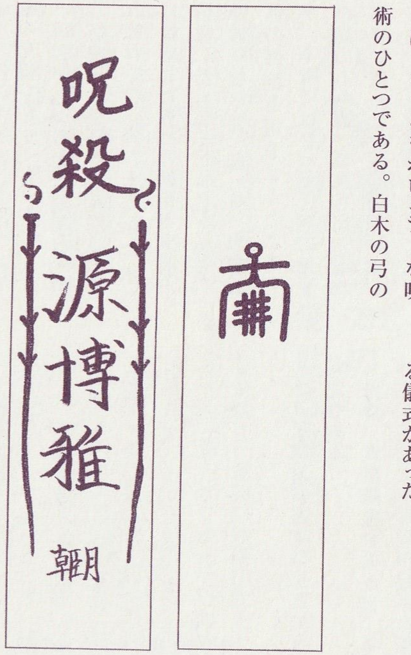


生成りと化した祐姫の背に張り付けられた博雅呪殺の符。それは、祐姫を操り、間接的に博雅を亡き者にしよう企んだ道尊のものだった。晴明は、博雅にかけられた呪を道尊に返すべく、鏃に符を結びつけて天空に放つ。

「音もなく　姿も見えぬ　呪詛神　こころばかりに　負ふてかえれよ」と唱えながら晴明が行った呪詛返しを「還（返）し矢」という。『古事記』に登場する神・天若日子の故事にもあるように、悪心を持って放った矢は、そのまま返って射手を射抜くと信じられていたのだ。ちなみに晴明が唱えた呪文は、実際に明治時代まで使われていたものである。

古来、弓は神聖なものと信じられていたらしい。陰陽道にも、弓にまつわる呪いや儀式が多い。例えば「蟇目の法」や「鳴弦」などは、もっともポピュラーな呪術のひとつである。白木の弓の弦を鳴らし、その音で妖魔を祓うというものだ。妖しいことがあった時だけでなく、男児が産まれるなどの祝い事でも行われたという。

また春先に行われる「追儺会」では、桑の弓、蓬の矢、桃の枝などで、鬼を追い祓う所作をする儀式があった。




道尊が祐姫の背に貼った、源博雅呪殺の呪符（準備稿）。符の裏側に書かれているのは道尊の紋で、デザインは原作者・夢枕獏氏の案による。

**【ドーマン】**
安倍晴明のライバルとされた、蘆屋道満の紋とされる。日本密教、修験道などで用いられている呪文、九字（臨兵闘者皆陣裂在前）をかたどったもので、セーマン同様に魔除けの護符として用いられている。

# 拾弌 泰山府君の祭り

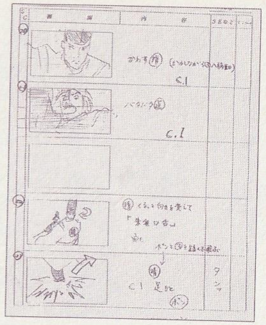


陰陽道で最も重要視される神、泰山府君に長寿や幸運を願う祭りと言われているが、もっぱら天皇や貴人のために行われた秘祭であり、人間の寿命を管理する冥道十二神を祭る儀式で、頻繁によく行われた祭儀である。

しかし、『今昔物語』『古事談』『古今著聞集』の中では、尽きかけたある人の命運を、他の人のものと差し替える術として描かれている。

本編では、泰山府君祭の祭文の代わりに、「謹請泰山府君　甦生博雅　急々如律令」と唱えた後、「天逢貪狼　一陽星君　天内巨門　地声星君　天衝禄存……」と続く「九星反閇の呪」を一部抜粋して使っている。

# 拾弍 晴明、究極の結界



博雅が鏃に結んでいたセーマンに方術を封じられ、早良親王の怨霊としての呪力を失った道尊は、それでも己を貫こうと、晴明に最後の闘いを挑む。それに対して晴明は、究極の術で応じる……。

五行を象徴するセーマンの結界。それを作るために、晴明は、五つのポイントで結界を結ぶため「青竜避万兵　白虎避不祥　朱雀避口舌　玄武避万鬼　黄龍伏魔」と唱えながら呪文を唱える。最後の黄龍のくだりは、監督のリクエストに応えた陰陽道指導・高橋氏の創作であるが、その他はすべて実在する呪文だ。最後に、陰陽道に伝わる二つの呪文をベースにアレンジした「オンアミリテイウンアタキャラヤビシギョウソワカ……」を唱え、晴明究極の結界は完成する。

**【人形】**
人の形をかたどった紙、板など。呪いたい相手の名前を書いたり、身体の一部を添えた人形を傷つけると、その人物に人形と同じ災厄が降りかかるとされた。

**【反閇】**
邪気を祓い、気を鎮める行為または歩行法のこと。禹歩ともいい、様々なバリエーションが存在する。またその歩行順は、易や北斗七星などの星々に関連するものが多い。

**【暦占】**
日の吉兆判断を暦によって行った占術のこと。現在も「友引」は験が悪いなどというのは、この時代の名残である。平安時代以降、明治維新までの長い間、陰陽師たちが管理していた。

高橋氏は、以前から、映像や文学の中の陰陽道を含めた様々な宗教の儀式、その描かれ方について疑問を持っていたという。日頃より実践・研究している陰陽道や他の宗教の実態と、フィクションの中のそれが、かけ離れすぎていたからである。

エンタテインメント作品とイマジネーションは切り離せない。自由な発想があるのは素晴らしいことだ。しかし、虚構のための嘘が、いつのまにか観客の内側で「事実」にすり替わっていることに愕然としたという。

「多くの人々の手で守られ、伝えられてきたものが、デフォルメされ歪んだ形で広められていく。その結果生まれた、誤解や偏見に満ちた状況と、それに便乗する人々の氾らんを何とかしたい。そう思ったのが、映画の監修を手がけるようになったキッカケです」。

## 『陰陽師』の森羅万象を読み解く、もう一人の陰陽師——高橋圭也氏。本編の製作に際して、氏が担った役割とそのスタンスについて訊く。

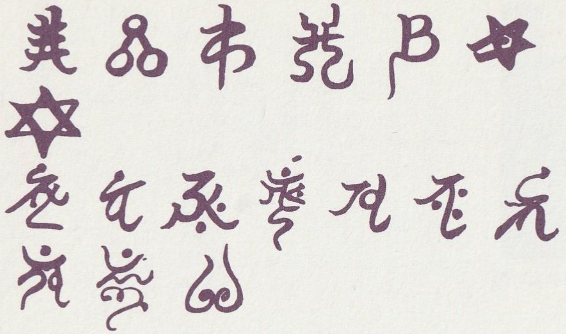
外野からの声は届きにくい。現状を変えたいなら、まず同じ土俵に立たなければと決意し、映画の世界へ飛び込んだ。東宝映画『死国』の民俗考証を皮切りに、初心者向けの陰陽道基礎講座をはじめたり、本を出版したりした。しかし、この「越境行為」に対する反発は、決して小さなものではなかったという。そんな時、NHKドラマ『陰陽師』製作に参加したのが縁で、本編の陰陽道考証をしないかという依頼が舞い込んだ。

「何が偽物で本物か、明確な線を引くのは、ある意味簡単なこと。しかし、撮影現場で、それは違う、そんなものはないといってしまっては先に進めない訳です。私の仕事は、あるシーンに対し、複数の適当と思われる陰陽道などの作法を含めて提案・理由づけすることです。事前に資料を用意しておいても、現場の状況次第では臨機応変な判断を求められたりと、純粋に仕事として難しい作業です。また、自分のやり方が正しいかどうかというジレンマも当然ながらあります……。しかし、陰陽道に対する正しい知識や認識が広まれば、間違った使われ方をされることはなくなりますし、映画を契機に興味を持った人々の中から将来の研究者が現れるかもしれない。いまはそんな日がくるのを信じて、私のやり方を貫いていこうと思っています」。

陰陽道監修
# 高橋圭也

■PROFILE
'59年栃木県出身。映画『死国』、NHKドラマ『陰陽師』の民俗考証を指導。著書に『現代・陰陽師入門-プロが教える陰陽道-』(朝日ソノラマ刊)など。陰陽道北斗派第三代宗家、明階神職。





# 時代劇としての「陰陽師」

事実か、エンターテイメントか——
時代劇としての『陰陽師』の成立過程について、
演出部の仕事を中心に解説します。

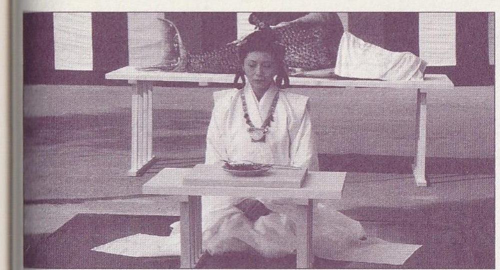
時代劇への準備は、まず資料集めから始まる。今回の映画に関しては、2~3ヶ月という時間が費やされた。演出部である、助監督たちが手分けして、歴史物としてのディテールを支えるべく、脚本にあたりながら、美術、衣裳・小物や陰陽道関係とそのシーン毎での事実関係を確認する。脚本を読む、と一口に言うが、ここでの『読む』とは、そのシーンがビジュアル化されたときどうなるかを頭にリアルに描き、それをいかにドラマとして成立するところへもっていけるか、シーンの組み立てを考える作業のことである。

「今回の映画の中で使っている術などは高橋さんが持っている知識をお借りしてるだけで、僕たち助監督はそれをどれだけ映画にフィードバックできるか、なんです。時代考証は小峯先生が見てくれるので、基本的にはその方に『これはどうだったんですか』ということを訊けばいいので」

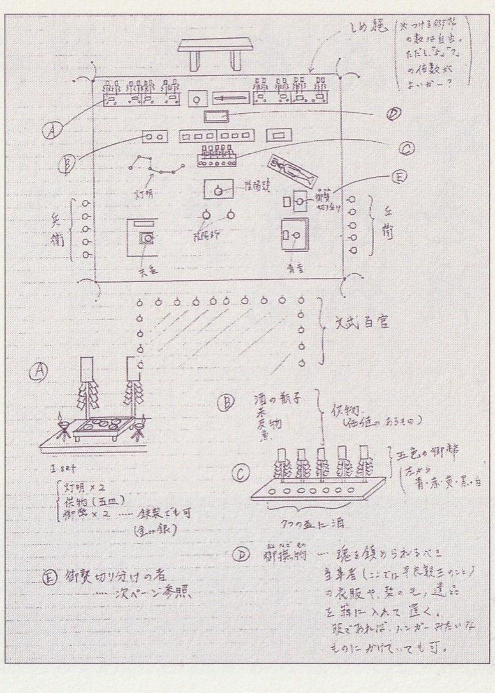
そう語るのは、サード助監督の橋本光二郎氏。今回演出部の中では、時代考証関係の中でも、特に陰陽道関係を担当した。

「ただ、話を聞き出すにしても、ある程度こちらも知識というか、『こんなことがあるんですけど』とか『こんなことが書いてあったんですけど』とか、そういうお話をする土台的な知識が必要で。ある程度陰陽道がらみの本をあさって、バーッと見ていく中で、面白いところをピックアップして、こんなアイデアはどうでしょうか、ということでの資料集めをしてました」

2~3ヶ月間といえども、作



映画冒頭の青音が人魚の肉を食べるシーン。儀式の供物などの配置については、晴明神社の記念祭のものを参考にした




品の専門性を考えれば決して十分な時間とはいえない。しかし、必要なことは必ず調べだしてくるというのがまた、助監督としての腕の見せ所でもある。

「僕たちはもう、足で稼ぐしかないんですね。とにかく色んな図書館をまわって、関連してそうな本を、些細なことまで調べてるんです。単純に本屋に行って古代史コーナーで平安時代の本を見て調べてればいいというわけでもなくて、アクセサリー本のコーナーも見に行って、現代美術を調べたりとか、中国装飾のコーナーを見に行ったり……ひとつのためでも、ひょっとしたらなんか引っかかるんじゃないかって」

だがしかし、基本的に演出部が時代考証をするわけではない。本作であれば、スタッフリストには、日本史家である小峯和明氏が時代考証に名を連ねているし、陰陽道指導は、現役の陰陽師である高橋圭也氏が担当している。

たとえば、映画冒頭、まだ新しい将軍塚の前で青音が人魚の肉を食べるシーン。まさに平安時代が始まる瞬間であるが、文化的には奈良時代に属している。演出的には、ひとつの時代の始まりの機運を表現するため、壮大さを感じさせるのがポイントであった。

そのため、シーン作りも大掛かりにし、将軍塚の前に大臣たちが牛車をずらっと並べて…というシーンが考えられていた。

「ところが、色々資料を見ていくと、奈良時代の絵に牛車が映ってないんですよ。みんな馬で移動している。で、……牛車無いんじゃないの？って。それはやっぱり小峯先生に確認してみないと判らないということになって、調べていくと、恐らく天皇は使っていただろうと。同時期の中国でも、皇帝のみが牛車を使ってて、あとはみんな馬で移動していたりするんで。時代的にいえば、似たことやってるはずですから、天皇は牛車使ってるかもしれないけど他はみんな馬ですよね、っていうことを提案していって。……結局、今回、最初のシーンには牛車は出てこないんですけど」

また、物語の山場である、泰山府君の場面。

「脚本には一行、『泰山府君を行う晴明。』って書いてあって（笑）、参ったなーと思いながら、じゃあ、泰山府君ってどう見せたらいいのよ？みたいなことになるわけです」

泰山府君自体は、お祈りを続けるある種の行のようなものであって、それだけでは見せ場として成立させるのは難しい。

かねてから原作者・夢枕氏から『萬斎さんが反閇を踏むのを見たい』という話もあり、それなら泰山府君の中で使えば、舞うような感じも出ていいのではないかと、高橋氏に相談。儀式の場を整える、というニュアンスで反閇を踏むというのは、ありではないかということになった。

しかし実際に反閇とは、本当に足を踏み出す動きでしかない。各地の伝統儀式の中で実際に反閇を踏んでいるビデオなども取り寄せて監督とも打ち合わせたが、見せ場として盛り上げるため、様々なアレンジを考えた末、今の形にたどり着いた。

陰陽道に関してはすべて、高橋氏に相談して決められている。ここではこういう風に見える術が欲しいということを、橋本氏が高橋氏に当たって、高橋さんの方から2〜3のバリエーションをつけて提案がありその中から決めていく形である。

そしてシーンの組み立てが決まったら、今度はそれを監督にプレゼンする。

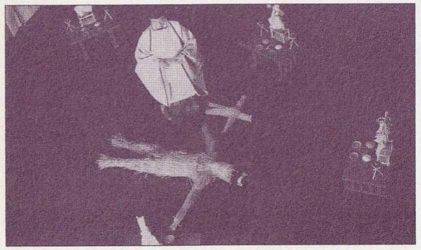
「監督に、僕はこう考えているんです、いいですか、と強気に（笑）訊いて。監督も判らない部分なんで、お前やっとけ、みたいになるわけです。あとはもうこっちで組み立てて、自分がいいと思う形で美術とかとも相談して。監督から、ちょっとこうしたいんだけど、という部分が出ることもあるので、そしたらまた高橋さんとやり取りして、ここまではあり得るとか、そういう話をつめていくんです」



体に文字を書くというモチーフは『耳なし芳一』＋グリーナウェイの映画『枕草子』に想を得て

しかしやはり、陰陽道というテーマは一筋縄では行かなかったという。

「陰陽道って、結構ファジーな部分もあって。術に関しても密教とか神道とか古神道とか色んなものを使い分ける部分があるので、陰陽道を調べつつも、結局そう言った部分も勉強しつつ……。監督からは、基本的に陰陽道からは外れたくない、という意向はもらっていたので。ただ高橋さんから伺ったんですが、彼らというのは、もの凄い知識人で、陰陽道が基本だけれども、お祓いをするときには何でも使えるんだと。必要であれば密教でも神道でも、必要な知識を使いまわせてこそ、陰陽師だというのがあって。ただし映画としてそればかり突き進めても、じゃあ陰陽師って何だ、ってことになっちゃうので」



五芒星の結界の形は、演出部の希望。祭壇は必ずしも一方向だけ向いてなくても可、ということで実現

同じ陰陽師でも晴明と道尊では使っている術の系統が違うように見えるのは、そういうことなのだ。特に道尊は、陰陽道のみならず古神道にもよく通じているという設定。

「僕たちの裏設定でしかないんですけど、道尊っていうのは、古くからの日本の一族の出で、ある程度土着の文化をバックボーンにもっていて、その中で古神道中心で進んできた男なんだ、と。そして陰陽道を学んで都へ出てきて、陰陽頭として立身出世してるけど、彼の根底にあるアイデンティティみたいなものはその辺にあると。道尊のアジトで道尊が念じている前に漢詩が

映画解説●時代劇としての「陰陽師」

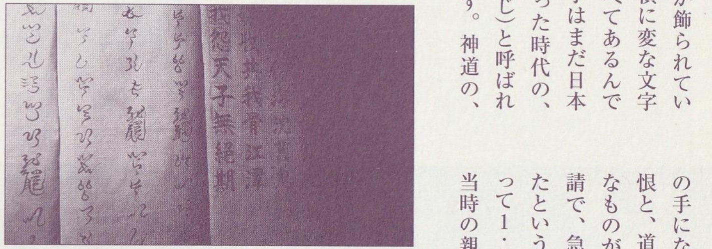
# 映画美術

*arts of the film*

時代ものならではの
美しいコスチュームや
雅な風景、
そしてそれらを支える特撮や
CGや造型たち。
平安という時代がいかにして
フィルムに表現されたか、
その秘密に迫ります。

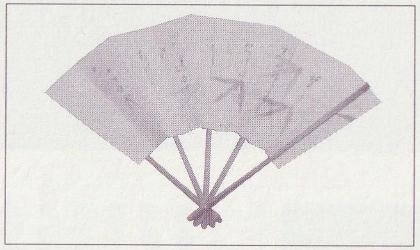
書いてある掛け軸が飾られているんだけど、その横に変な文字が書かれた紙も並べてあるんですが、その変な文字はまだ日本に色んな文字があった時代の、神代文字（かみよもじ）と呼ばれているものなんです。神道の、とある家の何かの秘伝書に伝わって書かれていたりする文字だということなのですが、高橋先生から資料を見せて貰って。一見全くランダムに並んでいるように見えるんですけれども、実は全部、漢詩をひらがなにしてそれを当てはめて書いていってるんです。普通の人は読めないと思いますが、判る人には判るはず。マニアックですが…」

　ちなみに道尊が何度も唱える、早良親王辞世の漢詩は、なんと橋本氏を始めとする演出部の手になるもの。早良親王の遺恨と、道尊の野心を結ぶ象徴的なものが欲しいという監督の要請で、急遽、考えることとなったという。七言絶句の形式を守って1・2・4句で脚韻を踏み、当時の親王が詠むにふさわしいものになっている。



これが道尊のアジトに飾られている掛け軸。右は早良親王の漢詩、左半分は神代文字となっている

　さらに、物語展開上重要な意味を持つ、帝が祐姫に与えた和歌「望月の　刻のゆくまに　欠けぬれば　共に道行け　あけの白露」も、演出部の労作である。当時の風習にならい、一見情景を歌ったもののように見えつつ、男女の情についての隠れた意味までもが設定されているという。



帝が祐姫に贈った歌。「心変わりすることがあったら殺してくれても良い」という意味があるそうだが…

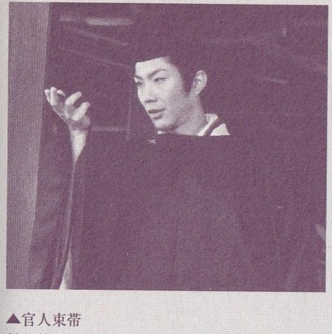
　それぞれの分野の専門家たちは、当然持っている基礎知識の量がケタ違いであり、それが一般の人にとって、面白いのかどうかを判断するのが難しい。そこを、『いやそれって面白いですけど、どういうことなんですか』と根掘り歯掘り訊いてくという作業もまた、助監督の作業のひとつだ。しかし同じことは、橋本氏自身も心がけている。

「やっていくうちにどうしても専門知識に触れてしまいがちなので、初心者の目がしおれてっちゃう。専門家に近づいてっちゃうんですよね。近づかないと仕事が出来ないんですけど。そうなると今度は逆にどこかで一歩足踏みして止まって、考えないと。これ、知らない人も判るのかなとか、平安時代のお話を初めてみた人が、陰陽師とか出てきてコレ判るの？とかって」

　専門家に当たって確認しながらも、大切なのは映画として成立すること。どの辺でラインを引くかは、デリケートな作業だ。

「結局、時代考証って目的がずれる部分がある。映画を面白くするためには、判ってるけど嘘つきますよ、っていう部分はどうしてもあります。そこで小峯先生に、『事実はこうですよね』ってことを確認して、事実に沿っていくこともあるし、逆にこういうお話でエンターテイメントですから、ちょっと嘘つかしてもらって、こういう風にやっても良いですかねえ、っていうところでの折半、というか折り合いをつける感じです。結局どこまで嘘つけるかっていうライン引きってあるじゃないですか。それはやっぱり僕たちじゃないと引けない部分なんです。」

# 衣裳設定其の壱 安倍晴明



▲官人束帯
従七位上の文官にあたる晴明の参内時のスタイル。物語冒頭、内裏で奏聞の儀が行われた際、陰陽寮の面々が身につけたもの。もっとも晴明は奏聞の儀には参加せず綾子のところで悩みを聞いていたが……。



▶狩衣
この時代の公家の代表的略服。脇が開いており、袖つけが小部分なため動きがとり易く出来ている。五位以上の身分の者が着る生地は基本的に絹。ただし、あくまでも略服のため、この衣装での参内は許されなかった。

晴明は物語中ほとんど同じ様な姿で登場するが、晴明用の衣裳は場面に応じて三点用意された(一種類は狩衣ではなく冠直衣が使用されている)。各衣裳は生地の織りと肩口から覗く単衣の色に違いが見られる。この衣装に立烏帽子というのが劇中、晴明の基本スタイルとなっている。また、全ての衣裳が白なのは、白=0、陰陽拮抗の意味が含まれることから。故にいつも、白色の狩衣を身に纏った晴明は常に陰陽師として、仕事モードにあるということ。

地紋は京都の装束を売る店で何百枚もの中から立て枠に藤の柄他、厳選された三種が選ばれた。白の衣裳から覗く浅葱色、紫などの指し色については、担当者が全て野村・晴明を想定してブッキング、糸から厳選されている。ちなみに、衣装の色は演じた野村氏も最初から白を想像していたとのこと。

## 衣裳担当コメント

今回の場合、天野先生が描かれたイメージボードを基にして、監督と話し合いながら、各キャラクターの衣裳を決定しています。現代劇だとファッションの方向性によって、キャラクターの性格などを棲み分けしていくんですが、時代物なので、衣裳の形の制限があり、決められた形の中で、色、生地の質感などを変化させることで各々のキャラが出てくるようにしています。

晴明の衣裳の色は比較的簡単に決定したほうですね。白は0という意味も持っていますし、浄化というような意味合いもあると思います。原作で登場する晴明のイメージもやっぱり白のような気がしますし、演じられた野村さんも最初から白をイメージされてたようでした。晴明=白というイメージが固まった瞬間に、この映画の全体的な色彩が見えてきたような気がしますね。全編白ですので地紋は厳選しています。同じ白でも三種類あるんですよ。





晴明の沓:従七位上の文官である晴明の平常用の沓は浅沓(あさぐつ)だが、撮影用には当時の靴(かのくつ)に近いモノが使用された。

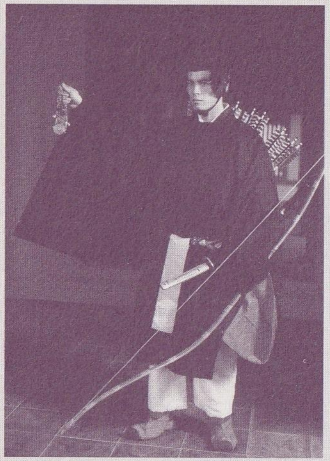


蝙蝠/扇。蝙蝠の羽に似た形をしていたため、こう呼ばれた。晴明が使ったモノの柄は、野村氏のチョイスとのこと。





# 衣裳設定其の弐 源 博雅



▲武官束帯
従四位下の武官にあたる博雅が戦闘に赴くスタイル。物語終盤、内裏に道尊が攻め入るシーンで着用された。手には弓、背には平胡ぐい(ひらやなぐい)に収めた矢を担いでいる。武官束帯着用時の冠は巻纓(けんえい)冠とし、おいかけの緒を冠にかけて、あごの下で留める。



▶直衣(のうし)
山門にて、祐姫(望月の君)の前で葉二つ(はふたつ)を奏でる場面で着用した衣裳。劇中では黒束帯、武官束帯など正服姿のイメージが強い博雅だけに、日常服の直衣は夜間・月明かりのシーンに映える、若者らしく華やいだ柄のモノが選ばれた。直衣着用時の冠は立烏帽子となる。

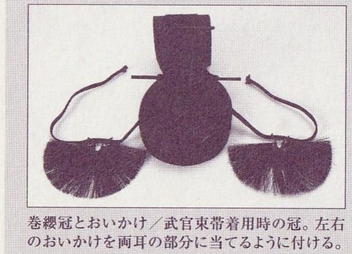
▶黒束帯
参朝の際に着用する装束。物語冒頭、内裏での奏聞の儀のシーン他で着用。この時代における、参朝をはじめとする大小の公事に着用する正服である。武官である博雅は、剣・平緒(ひらお)を着用する。束帯着用時の冠は垂纓冠となる。

## 衣裳担当コメント

博雅に関しては、若いということと右近衛府中将(帝の警護を担当する右近衛府の次官)という役職柄、衣裳自体をあまりお洒落にするというよりは、決められた装束を着せられているというイメージがありました。その為、衣裳にも比較的遊びはありません。

自己主張がファッションに向かうよりは、笛を嗜むところや、内面からにじみ出る誠実さに向かうキャラクターだと思いましたので……。

上の直衣姿に関しては、登場シーンのバックが暗いということや、祐姫とのロマンスという内容もあったので、頑張ってお洒落をしているように見える直衣を選んでいます。基本的には殿上人のルールの範囲内の衣裳になりますね。全てにおいて「若々しく」というのが博雅の衣裳のコンセプトです。



巻纓冠とおいかけ/武官束帯着用時の冠。左右のおいかけを両耳の部分に当てるように付ける。



葉二つ(はふたつ)/博雅が持つ笛の名称。



細太刀(ほそだち)/帯取の部分を平緒と呼ばれるベルトに付けて、腰に差す。

# 衣裳設定其の参
## 蜜虫





▲天野喜孝氏による衣裳原画
P26～の天野氏インタビューでも触れたが、氏は本作のためのキービジュアル・コンセプトデザインを手がけている。なかでも蜜虫、青音に関しては衣裳原案を担当。史実に束縛されることない独創的なアイデアで、見事に儚く美しいキャラクターの幻想美を創り上げている。

▶蜜虫
晴明を始め、陰陽師、殿上人などが史実に裏打ちされたリアルな衣裳構成なのに対し、蜜虫はその特異性、神秘性を活かすために、より独創的な衣裳が求められた。そのため衣裳デザイン全般を天野喜孝氏に依頼。その原画を基に打ち合わせが重ねられた。写真の衣裳の絵柄も、天野氏自らが筆を振るったモノである。
全般的に、何処まで原画のイメージに近づけられるか……という観点から、重ね着の深めのパープルと浅葱色など細部にわたって忠実に再現されたが、天野氏が希望していたグリーンだけは、後に手が加えられる特殊効果に不便が出るためオミットされたという。

### 衣裳担当コメント

蜜虫の衣装は当初、天野先生のイラストにあるように、生地に絵入れをしたものの上から、薄い布を幾重にか羽織るというプランで進んでいました。晴明の式神で蝶の変化した姿……のキャラクターということもあり、柔らかみを持ったフワフワ感が上手く出せればと思っていたんです。

制作作業にかかる前に、天野先生とは打ち合わせさせて頂いてましたので、下の袴の色合いなどはだいたい決まっていました。上モノは本当に先生任せで、色出しだけを私がやった感じですね。生地は絹織物としては薄手のモノです。ノリ入れして張りをもたせ、先生に直に絵付けしていただきました。

結局、監督がご覧になって、「絵がとてもいい」ということになり、柄がダイレクトに見える状態でOKとなりました。金色の部分は使っているうちに結構色落ちするので、現場で絵の具を足しながら使いました。







# 衣裳設定其の四
## 青音



▲青音（全身）
不死の存在という設定とも相まって、どこか幻想的な青音の衣裳は、史実に合わせたモノというより、天野喜孝氏のイメージに忠実に再現されている。前時代の尼という設定から、尼僧の装束を意識した作りになっている。平安朝の女房装束というよりは、奈良朝のそれに近い。蜜虫とともに人に有らざる存在のため、全キャラクター中でも際だった存在感が演出された。







青音の首飾り／150余年前、青音が早良親王より拝領した首飾り。親王と青音を結ぶ思い出の品でもある。
デザインの元となったのは東アジアの品とのこと。両サイドには曲玉があしらわれている。



青音の耳飾り／こちらも曲玉を模した青音のピアス。色は数種の中から小泉さんがチョイスしたとのこと。

### 衣裳担当コメント

青音に関してもデザインを基に天野先生と打ち合わせをして、生地をこちらで捜しました。先生の方でかなりこの時代の衣裳のことを御存知なようで、無茶なリクエストがなかったので、デザイン画から直接起こして仕立てています。気を付けたのは絵だと若干ぼけてしまう、裾の長さぐらいですね。

あと、頭からかぶっている薄い布は色を捜すのが大変でしたね。どちらかというと、原画に近づけるというよりは、演じられる小泉さんのイメージと合わせて、いかに不思議感が出せるかが重要でした。最初は服と同系色で行こうと思っていたんですが、リハのときに小泉さんがたまたま濃い色の布を被っていて、それがすごく顔の色と合ってたんです。黒だと服地の白と合わさってどぎつくなってしまうので、微妙に薄い赤みのない焦げ茶をチョイスしました。

## 衣裳設定其の五 道尊



▲緋色文官束帯
陰陽寮、陰陽頭（陰陽寮の長官）である道尊も官位は従五位以下の文官である。故に殿上人ではない。この衣裳は冒頭の内裏で奏聞の儀が行われた際他で使用された。

▶直衣
内裏を離れた道尊が纏う衣裳。当時黄櫨染という金色に見える装束を身につけられるのは、天子だけとされていた。本来、道尊の官位の者が黄櫨染の装束をまとうことは反逆罪と見られ、罰せられる。敢えてそれに近い色が選ばれたのは、反逆者としての道尊のキャラクターを際だたせるためでもある。



▼直衣（アジト崩壊後）
晴明によってアジトを焼き払われた道尊の物語終盤のスタイル。煤や埃でボロボロになった直衣姿。現世で何かを捨てた男が、触れてはいけないものと契約する……、その覚悟を表すようなイメージである。



### 衣裳担当コメント

台本で持ったキャラクターのイメージが天野先生の原画と同じ、ゴールドだったんです。でも、本当はこの時代に金色に見える黄櫨染の装束を着れるのは帝だけなんですよね。ただ道尊の場合、さも自分が発光するような強烈なパワーを持っていますので、あえて史実的なタブーを破っているように見えても面白いかなと思ったんです。生地の織り方も、光を反射するような手法で作っています。道尊の衣裳は晴明の放った火矢によってボロボロになりますが、衣裳の汚しの加減にも気を遣いました。どの程度汚すかについては、真田さんとの打ち合わせで「滅茶苦茶やっちゃおう」ということだったのでやっちゃいました（笑）。ただし、煤で汚れて黒くなった中に、どれくらい元の色を残すかというのも気を遣った点です。ホントはつやを消しすぎて、後から絵の具で足したんですけど（笑）。破れ、汚れた衣裳を着ていても、どことなく威厳というか圧力があると感じてもらえば大成功です。





## 衣裳設定其の六 祐姫



◀生成り
女が般若になりきる手前の状態を指す。道尊の呪によって綾子、敦平親王、そして帝への恨みを募らせた祐姫の変化した姿。丑の刻の闇に沈み込むような真紅の女房装束を纏う。

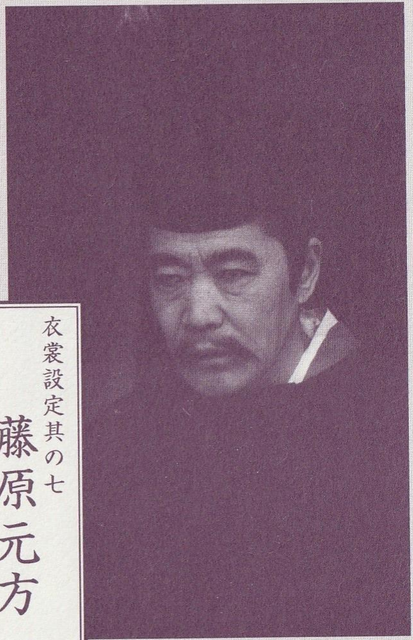


### 衣裳担当コメント

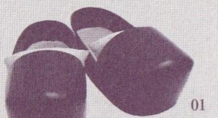
今回の衣裳には時代背景的な面も考慮して、光を反射するような素材が多用されていますが、「生成り」になる祐姫の衣裳には縮緬という素材を使いました。縮緬はこの時代にはない生地なんですが、光を吸収して、艶なくマットに見えるという特長がありますので、キャラクターイメージにぴったりだったんです。

原画から赤で作るというのは決定していたんですが、微妙な色加減にも注意しています。深みのある真紅に近い色を出したつもりです。

## 衣裳設定其の七 藤原元方



◀黒束帯
参朝の際に着用する装束。内裏内のシーンで基本的に使用された。ちなみに物語上、元方は右大臣（従二位の文官）である。故に身につけている衣裳は殿上人の正装が多い。



01

■01／浅沓
元々革製のモノが親しまれていたが、この時代あたりから木製のものが使われるようになった。束帯姿などの平常用の靴である。



02

■02／立烏帽子
貴人の常服である直衣着用時などに用いる冠。



03

■03／笏
もともとはメモを書き記した笏紙を裏面に貼って使っていたモノ。後に右手に持つ小道具となり、束帯時などに用いられた。



04

■04／垂纓冠
束帯着用時に文官がかぶる冠の総称。纓を後ろに長く垂らしているのが特長。写真の元方が被っているモノ。

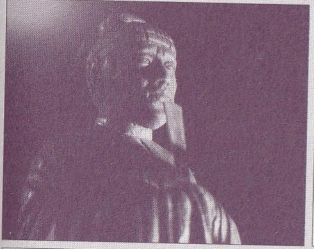
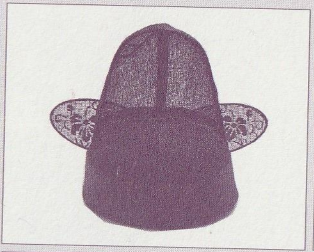
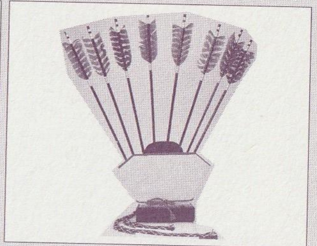
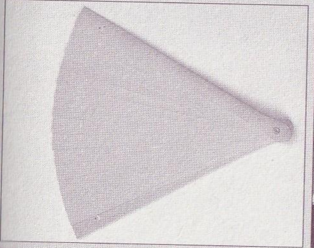
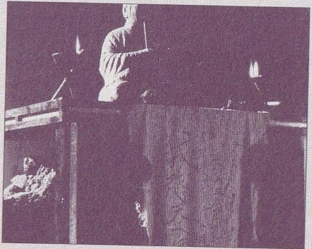
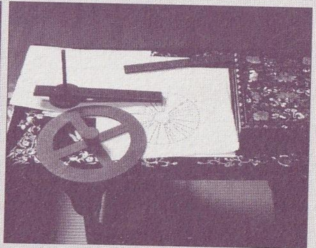
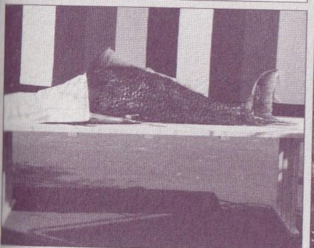
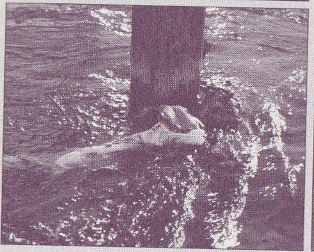
衣裳設定其の他

# 小道具 他

長岡京〜平安京を舞台に繰り広げられる映画『陰陽師』のストーリー。雅の世界とその裏側の世界……、「陰」と「陽」が調和する摩訶不思議な世界観が本作の大きな見所である。現代劇にはない「その時代独自の慣習」や「独特の小道具」も物語を盛り上げるのに一役かっている。考証に忠実な衣裳から、SFXで表現されるあやかしまで、ひとつひとつを、より深く知ることで、『陰陽師』ワールドを何倍も楽しんで欲しい。

衣装設定コメント：山本亜希子・西山太郎・橋本光二郎

| | | |
|---|---|---|
| 01 | 02 | 03 |
| 04 | 05 | 06 |
| 07 | 08 | 09 |

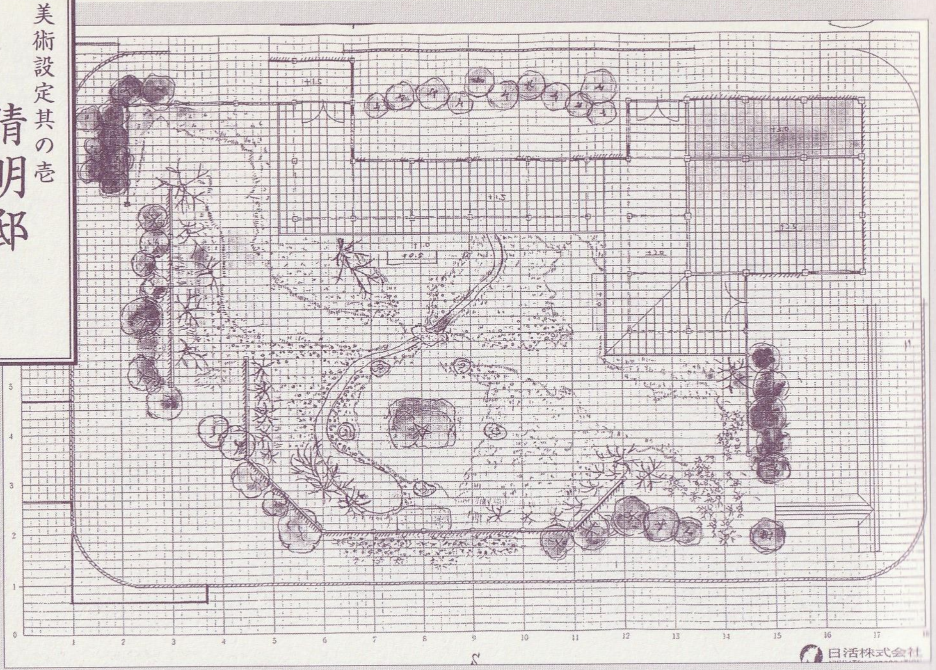

01坂上田村麻呂の像／平安遷都の際、長岡京で猛威を振るった早良親王の怨霊を鎮めるために、都の東の外れの「将軍塚」に奉られている像。坂上田村麻呂は平安初期、東北の蝦夷（えみし）を討伐した武将にして征夷大将軍。将軍塚には田村麻呂の剣も納められている。02早良親王の冠／長岡京でのシーンで早良親王が被っていた冠。03平胡ぐい（ひらやなぐい）／武官束帯姿の武官が背につける、矢を収める道具。04檜扇（ひおうぎ）／平安時代の中期から用いられたもので、笏以外のメモ道具として用いられたモノ。薄い檜板を糸で綴った扇。束帯、衣冠など冠を着用する場合に主に使われた。05我怨天子無絶期と描かれた描かれた布の切れ端／謀反の罪を着せられ、乙訓寺で自害した早良親王が、自らの血でしたためた恨みの漢詩。天子を末代まで祟るという意味。何故か道尊が所持していた。06陰陽用具／陰陽寮に属する陰陽師が使用する道具の数々。本来星を読む道具が中心。07人魚の肉／古来より食すと不老不死の力を得ることが出来ると言われる霊薬。将軍塚を未来永劫守るために、平安遷都の際の早良親王の怨霊を鎮めるための儀式で青音が食したモノ。08女の骨／中納言・藤原兼家が捨てた女の躯。捨てられたことを苦にして自ら命を絶ったらしい。橋の支柱に絡まり野ざらしになっていた。09松の木の瓜／藤原兼家の屋敷の庭の松になった面妖な瓜。博雅からの依頼を受けた晴明が、かかっていた呪を解いた。瓜の中には蛇がいて、瓜を食べていたら内臓から食い殺されていたという。





美術設定其の壱

# 晴明邸




## 美術担当コメント

平安京という時代と作品の性質を考慮して、カメラマンから朱色を際だたせたいというリクエストもありましたし、全体的に色数を多く使わない方向で考えました。特に晴明の場面は「ナチュラルカラーでいきたい」というのが、監督、カメラマン、私の共通見解でしたので、白を基調に色彩を感じさせないようにしました。例えば晴明邸内にある花の色などは白と黄色の二色が基本です。これは現実の花の色彩とかけ離れていますので、何となく奇異な感じに映ると思います。庵全体がこのような色調で統一されているので、現世とちょっと違う世界の匂いを感じていただければ成功ですね。ちなみに、上の図面、中央下の五つの点は、青音に巣くった魔物を出す儀式が行われた場所です。




上／晴明邸濡れ縁
兼家の頼みで晴明邸を訪れた博雅が通された場所。博雅は最初の来訪時にここで、式神を使って脅かされた。本作では晴明邸を含め、いくつかの場面でロケが行われた。古い寺などが中心だったが、各々イメージに近くなるように、時代考証に合わせてチューンナップされたという。晴明が寄りかかっている柱はこのシーンのためにホンモノの木材が立て込まれた。

下／晴明邸門
古びた門には五芒星の札が貼ってあり、牛車で乗り付けた博雅たちが開けようとすると自動で開く。これも、博雅の来訪を予見した晴明によるイタズラであった。

## 美術設定其の弐
# 道尊のアジト




### 美術担当コメント

どうしても天窓が高いところが良かったんです。この時代に天子の転覆計画を立てる男のアジトですから、野望が高い分だけ天井も高くしたかった(笑)。火を使うシーンもありましたし、いろんな意味でリアリティーを出すために洞窟でのロケにしました。ロケにするとスタッフ、役者さんとも不便が多くなるんですが、残念ながら、やっぱりセットだと限界がありますから……。道尊のアジトは晴明邸と同じくらい重要なセットだと思っています。晴明のアンチテーゼとして、強大なパワーを持っていることを鼓舞しなければなりませんでしたから。結果的に、撮り終えてみて、真田さんの演技が鬼気迫っていてスゴかったんですが、そのスケールの大きさに負けていないセットには出来たと思います。

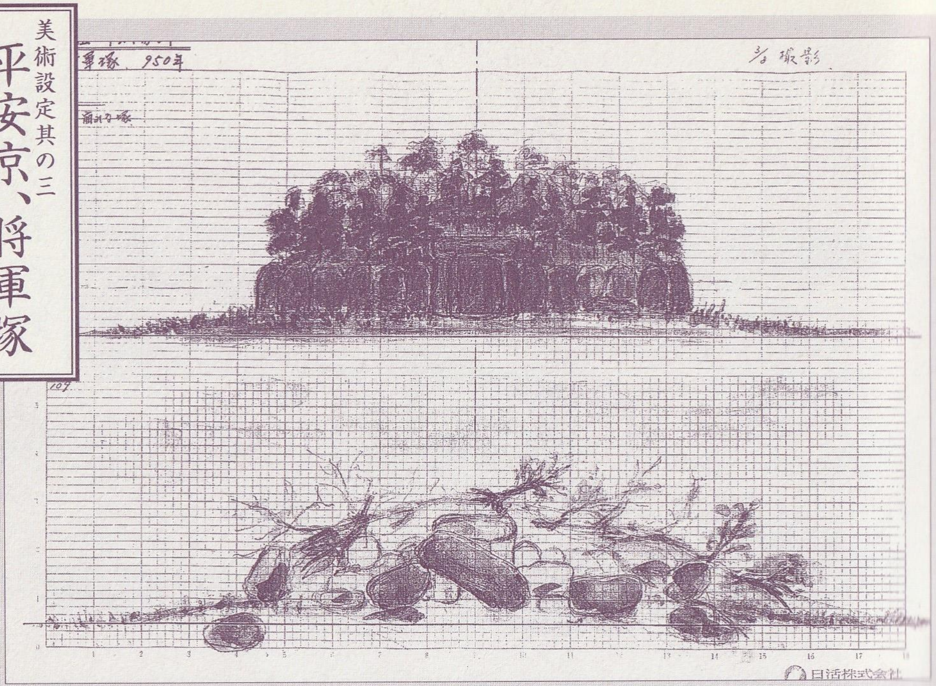




上／道尊のアジト
祐姫にかけた呪(道尊符)を火矢にして返され、炎上する道尊のアジト。この際、道尊の式神が身代わりとなって果てている。これをきっかけにして、呪による天子暗殺を諦めた道尊は、早良親王を復活させるという実力行使に出る。
下／アジトの祭壇
物語冒頭より、道尊が陰陽の術を行っていたアジト内の祭壇。晴明に火を放たれた際、道尊は仏像の下にある布の切れ端のみを持って逃げる。劇中、陰陽の儀式を行う祭壇は複数登場するが、一回づつシチュエーションに合わせて、素材選び、サイズ決めなどをして作り込まれた。



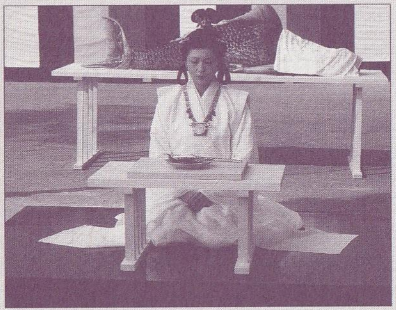
## 美術設定其の三
# 平安京、将軍塚




### 美術担当コメント

上の将軍塚では、いくつかのシーンが撮られました。が、風による布のたわみとか、揺らめきみたいなモノは、映像的にこの映画の雰囲気を決めるかなり重要なファクターなんですが、ファースト・シーンの早良親王の鎮魂の儀式のときは風が強くて、祭壇の布や紙が捲れたり大変でした。

また、道尊が早良親王の怨霊を復活させる塚の内部のシーンでは、セット自体が若干狭めに作られました。これは、狭い場所に閉じこめられた親王の魂を、道尊が解き放つという意味も込めてのことです。本当に剣が振るえるかどうかのスペースでしたが、口上から坂上田村麻呂の像を一刀両断するまでの流れが、一発OKだったんです。失敗したときのために像は予備を何体か用意してたんですけど、不必要でした。





上／将軍塚(794年)
平安京東に位置する晴明たちの生きている時代から150年前、長岡京の滅亡から平安への遷都の際建てられた。長岡京滅亡の原因とも言われる飢餓、疫病の流布を、謀反の罪で死に追いやられた早良親王の祟りとする考えから、鎮魂の目的が主。
下／将軍塚
道尊によって、早良親王の怨霊を封印していた征夷大将軍・坂上田村麻呂の像が破壊され、解き放たれた怨霊の力で塚は崩壊する。

# 美術設定其の四
# 平安京、鳥辺野




## 美術担当コメント

上の鳥辺野の埋葬地はこの時代の恨みや呪いが吹き溜まっているようなイメージで作りました。当初、このシーンは道尊が沼のほとりに立って悪霊を呼び起こすというだけのものだったんですが、道尊なら恨みがこもった沼に身を浸して、躯を愛でることも厭わないだろうということで、監督と真田さんにリクエストして実現しました。ここでは真田さんの演技にあらためて凄みを感じましたね。セットを自然に活用して、その中にとけ込んで行ってしまうんです。これって、セットを作った者としては凄く嬉しいことなんです。まさに美術冥利につきますね。このシーンはCG合成で、多数の霊魂が蘇っていく様子が加えられて完成なので私も完成版を楽しみにしています。

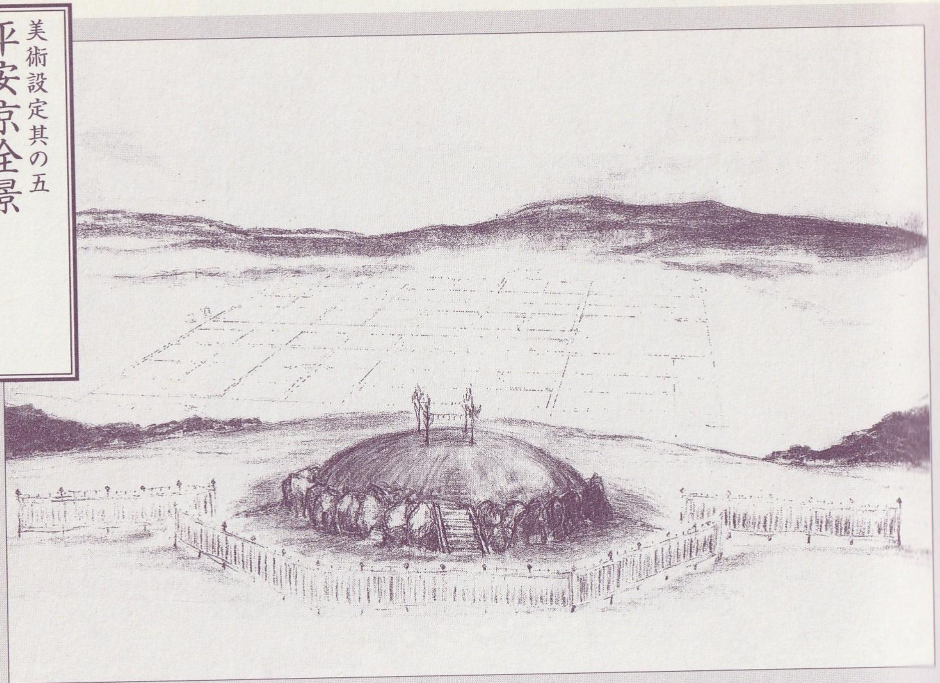




上／一条戻り橋
大内裏の北側の一条大路の東に位置する堀川にかかる橋。一条大路が都の北の外れに位置することから、それより北は整地されておらず、鬼が棲むとされていた。また、都に対して丑寅（北東）の方角に位置することから、その先にある庵に住む晴明は「人に有らざるもの」との噂もたった。
下／鳥辺野
平安の古より埋葬地として有名な場所。五条大路の先、平安京南東、東山に位置する。埋葬地とはいっても当時、骸はほとんどが野ざらし。白骨化したモノあり、腐乱するモノありと異界の様相を呈していたと思われる。無念の死を遂げた亡骸も多い。



# 美術設定其の五
# 平安京全景



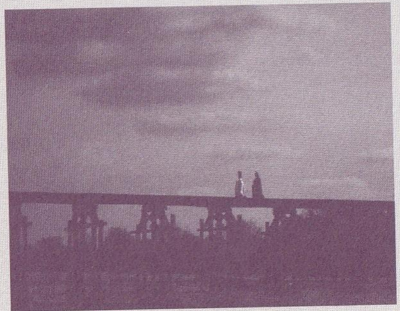
美術設定コメント：部谷京子

## 美術担当コメント

平安京については全景にはＣＧが使われました。内裏他の場面については当時に建立されて現存するお寺などをお借りして撮影しています。内装などで活かせる部分はそのまま使用していますが、風にゆらめく壁蓬や几帳（平安時代の住戸には殆ど壁がない）など当時の生活の特徴的なつくりはプラスして復元しています。また、内裏内で使用された太い柱は、無垢の木で岩手県から30本余り運んでもらっています。

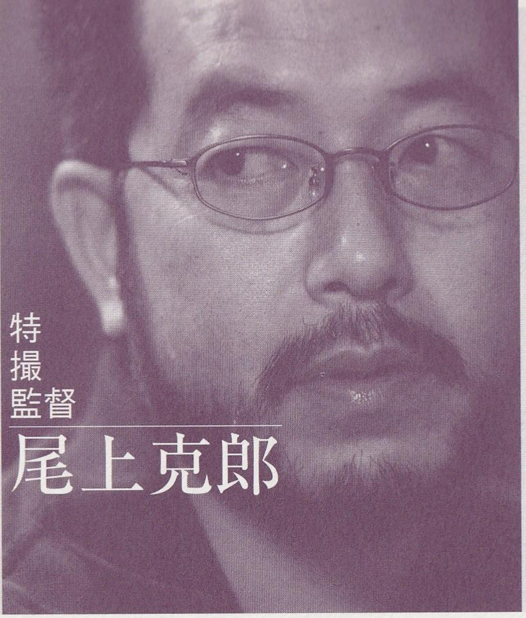
作り込みが多くて、やりがいもありました。その分油断も出来なかったけど……（笑）。色んな映画をやってきましたがこんなに終わった後も気持が引きずられていたのは初めてです。それだけ魅力がある作品になったと思います。皆さんも陰陽師の平安世界にタイムスリップしてみて下さい。





上／朱雀門
平安宮の南に配された巨大な門、南の守り神、朱雀が祀られている。いわば平安宮の玄関口とも言える。平安京の玄関ともいえる羅城門から85mに及ぶ朱雀大路が続く。藤原兼家邸の松の木になった瓜の呪（=蛇）を追って、晴明と博雅が歩いていたときに通り過ぎた。
下／橋の上
朱雀門との位置関係から、鴨川にかかる橋と思われる。兼家の呪を追いかけてきたふたりが、橋桁に引っかかっている布に戻っていくのを見た場所。鳥辺野をはじめ、骸がわりと自然に放置されているのも、魑魅魍魎跋扈するこの時代らしい背景と言えよう。

『陰陽師』の映像には、実に様々な特撮技術が施されている。特撮監督の尾上氏と特殊メイク、特殊造型を担当した原口氏。



■PROFILE
おのうえかつろう
鹿児島県出身。'85年より株式会社特撮研究所に参加。'93年特撮監督、'96年よりデジタルエフェクト監督を兼任。TV特撮シリーズを数多く手がけ、主な映画作品に『爆裂都市』『ガメラ3』『さくや　妖怪伝』などがある。

特撮監督
尾上克郎

# 『陰陽師』の映像魔術

## ～尾上克郎×原口智生Wインタビュー～

本作の世界観を構築したこのお二人にご登場願い、その過程と撮影秘話を語っていただいた。



特殊造型・特殊模型
原口智生

■PROFILE
はらぐちともお
福岡県出身。特殊メイク、特殊造型や怪獣造型で約100タイトルもの作品に参加。主な作品に『帝都物語』平成『ガメラ』シリーズ『御法度』『五条霊戦記』などがある。'00年には『さくや　妖怪伝』で監督を務めた。





### 『陰陽師』の世界観

**――お二人が『陰陽師』に参加されたいきさつは？**

**原口：**プロデューサーの林（哲次）さんと以前お仕事したことがあったので、今回声をかけて頂いたんです。それで、僕から「尾上さんに特撮をやってもらったらどうですか？」と提案させてもらって。

**尾上：**あ、それで俺に電話がかかってきたんだ（笑）。

**原口：**尾上さんが作品に関わったのは、僕よりかなり遅い時期からですよね。

**尾上：**遅いよ～。撮影1ヶ月前くらいからの参加だもんで、その時期に絵コンテがまったく描かれてないって聞いて、「え!?　じゃあ俺が描くわ」と慌てて動き出したという感じ。ロケハンにも行けなかったから、自分の車で7回くらい京都に行きました。この映画は京都の位置関係を把握しないと成り立たない話なんで、四方八方の山に登ってそこからどういう風に街が見えるのかを写真に撮って。

**――本編の絵コンテも描かれたとか？**

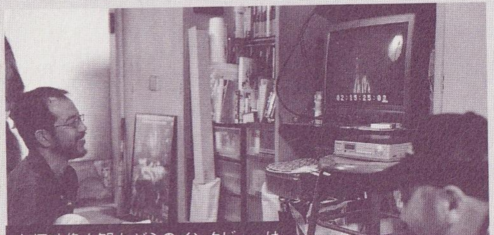
**尾上：**特撮の部分だけを描いても前後のシーンとのつながりがわからないから、結局前後を含めた本編部分の絵コンテも描きました。最初はCG合成が入るカットが今の5倍くらいあったんですよ。それをなるべく減らすための方法論を考えたり、シーンの前後を変える作業をして。それからイメージボードを何枚か描いて、滝田監督に「このシーンはこういう風に仕上げます」というプレゼンをしたんです。

**原口：**合成がらみの前後は、ほとんど尾上さんの絵コンテに近い形で作品が出来上がったよね。

**尾上：**最初は「特撮的な見せ場を作って下さい！」って言われてたんだけど、監督や他のスタッフと話すうちに、だんだん『陰陽師』の世界観が掴めてきて、「こりゃいつものようにド派手にやるわけにはいかないな」と。だから、少しずつ表現をおとなしくしていった結果の絵コンテなんですよ。

**原口：**特撮が絡む映画、特に「陰陽道」みたいなテーマを持った映画って、テイスト一つで全然違うものになってしまうんですよね。包装紙にキティちゃん柄やアール・デコ調のものがあるのと同じで、どういうパッケージで映画を包むかが勝負になってくる。

**尾上：**将軍塚が崩壊するシーンなんて、いきなり大噴火が起こって地割れして……という具合に派手にした方が簡単なんですよ。でもそれを抑えなきゃいけなかったから大変だったな。俺の特撮って一歩間違えると、お茶目な方向に行っちゃうからさ（笑）。



本編映像を観ながらのインタビューは、2001年8月中洲プロ（原口氏の工房）にて行わせていただいた

**原口：全体的にいわゆる「上品な」映像に落ち着きましたよね。**

**尾上：**『陰陽師』の世界観、意味のある背景を創るのが、特撮班の仕事だったんです。不気味な雲のようなものや妖気のことを我々は「もや」と呼んでいたんですが、特撮はもやに終始したと言ってもいいね。

**——将軍塚が崩壊したあと、不気味な「もや」が都を覆いますが、あの画だけで観客は「大変なことになってきたな」とわかりますよね。**

**尾上：**「もや」で都をイッちゃった風にしたかったんだよね。『ダンテズ・ピーク』みたいな感じを狙ってたんです。「もや」には赤と黒しか色を使っていないんですよ。つまりは、「赤＝血」「黒＝闇」を表現しようということで。一口に赤と言っても、今回使ったのは暗い赤。黒にも緑を混ぜて暗くしています。色を濁らせることで、いや～な感じを出したかったんです。



尾上氏曰く「このシークエンスだけでも1本の映画ができちゃいますよ」との祐姫のシークエンス。夏川氏のアクションにも注目。

**原口：**全体的に「上品な」テイストでやっている中で、滝田監督に「道尊の式神だけはマンガのようなテイストを狙ってるんだ」と言われたので、造型するときに少々混乱しましたね。道尊の人間味を出すために、愛情を注ぐ対象を登場させたいという監督の意図だと思うんだけど。どこまでマンガっぽくするのか、非常にさじ加減が難しかったですね。

## 祐姫、道尊と晴明

**——特に印象深いシーンはどこですか？**

**原口：**祐姫が生成りになるシーンは、感情移入しちゃったな。このくだりは、誰が呪う側で誰が呪われる側なのかが一番はっきりしている『陰陽師』っぽいシークエンスですね。

**尾上：**メイクテストで、夏川結衣さんをぼた眉＆お歯黒にしてたでしょ？　異様な感じがしてよかったね。

**原口：**時代モノって、リアリティを追求するとぼた眉にお歯黒なんだけれども、それ故にお客さんがキャラクターに対して引いちゃう場合があるんです。今回は普通にメイクしたんだけど、その代わり生成りになった時の牙を黒いものにしてみたりと。お歯黒のような黒い牙って、前々からやってみたかったんです。

**尾上：**夏川さんの頭に載っている燭台は、本物の鉄と蝋燭ですよ。



道尊の式神死す！　ちなみに、道尊の式神が飛んでいるのはこのシーンのみ。CGIの式神が、実写画面に合成されている。

**原口：**夏川さんの演技だけで十分に迫力があるから、生成りのメイクはやりすぎないようにしています。本当は額に角が生えているだけでもいいのかもしれません。ただ、夏川さん本人が、メイクされていることによってテンションを上げられるっていうこともあるんですよね。







**尾上：**俺は、道尊が朱雀門の上から崩壊した都を見下ろしているシーンが一番やりたかったところだね。

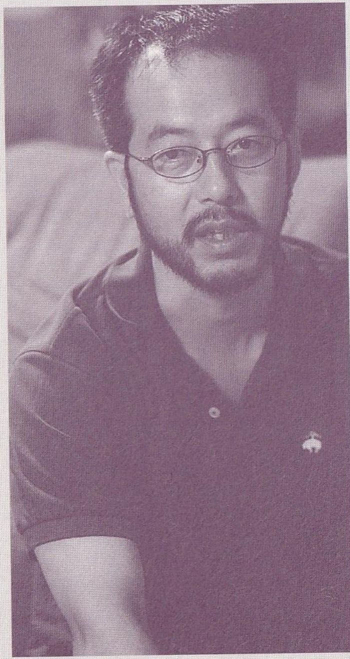
**——カメラが道尊の周囲をグルッと廻り込みますね。**

**原口：**尾上さん、廻り込むの好きだよね（笑）？

**尾上：**好きだよ（笑）。このシーンで初めて平安京全体が登場するんです。建物だけで1500くらいのCGモデルを作っています。崩壊した京都全景を見せることで、結界が破られたことを見せたかったんです。

**原口：**やっぱり、そういう「映画的な」画に真田広之さんを合成したいよね。

**尾上：**そう、したいのよ～（笑）。凄く手間がかかったんだけどね。真田さんが不敵に笑っている顔をまずイメージして、そこに平安の街並みを入れたいな～と思った瞬間に、自ら地獄へ落ちていったようなものだもん。



**——道尊の頭に矢が刺さるシーンもご苦労されたのでは？**

**尾上：**あそこは、絵コンテ通りにぴったり構築されているんだよな。何コマ目からかCGが入るんだけど、これはオムニバス・ジャパンさんが本当にがんばってるよ。このシーンのアイディアを監督から聞いた時は腰が抜けるほどびっくりしたね。

**原口：**一歩間違えれば、映画全体が破綻しかねない内容だもんね。

**尾上：**原口くんが造ってくれたダミーの人形を使ったカットもあるんですよ。

**原口：**人形はあくまでも人形だから、大画面で観られるかと思うとヒヤヒヤしますね。

**尾上：**このシークエンスは、使える手は全部使ってる。CG、人形、操演、そして真田さ

## 『陰陽師』の世界観や、意味のある背景を創るのが我々の仕事でしたから ——尾上

んの演技。

**原口：**今回、真田さんは本当に気合いが入っていましたね。撮影入る前に、「ちょっと太るから」って言ってたし。

**尾上：**特撮部分は、ほとんど真田さん一人が担当してる。アクションの基礎があるから、完成画面になった時のシミュレーションができるんですよ。野村萬斎さんも凄い。晴明と道尊のバトルでの裾捌き……あれ、普通はやれないよ。

**原口：**本当に複雑な立ち回りを、二人が短期間でこなしてたもんな。あのバトルで使った刀って、当初は予定してなかったものなんです。でも真田さんのアイディアで、急きょ僕が造る事になって。で、造った刀を新幹線で運んだ（笑）。こうなるともう特殊造型なのか、特殊メイクなのかわからない。

**尾上：**人魚の造型も原口くんが一人で脇に抱えて運んだんだよね？

**原口：**今回一番大変だったのは、その2つを新幹線で運んだことかもしれない……（笑）。

**——最後に、『陰陽師』を振り返って一言お願いします。**

**尾上：**この映画って女性が観るんですかね？ 脚本をもらった時に女性スタッフに読ませてみたら、「この映画のテーマは女の怨念ですよ」って言うんだよね。それで、「ああ、そういうことか」とわかって。女性向けって言われると、俺じゃない方がよかったような……（笑）。

**原口：**でも予告編は、『帝都物語』を彷彿させるような動きのある映像になってますし、男性も原作知らない人も観たい！と思ってくれるんじゃないでしょうか。

**尾上：**普段から原作はなるべく読まないようにしてるんだけど、今回に限ってはやっぱり原作や岡野玲子さんのマンガを読んでくるお客さんも多いわけでしょう？

## 「陰陽師」みたいな題材ってどういうパッケージで見せるかが勝負になってきますよね ——原口

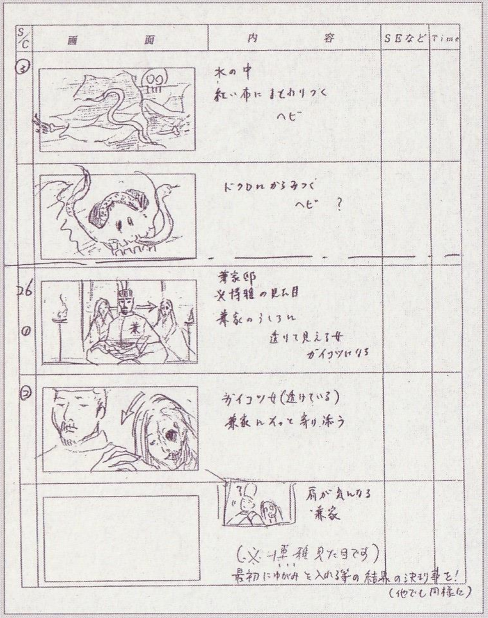
そのイメージをめちゃくちゃに壊すわけにはいかないから、やっぱりあまりいつものようにお茶目なことはできなかったね。

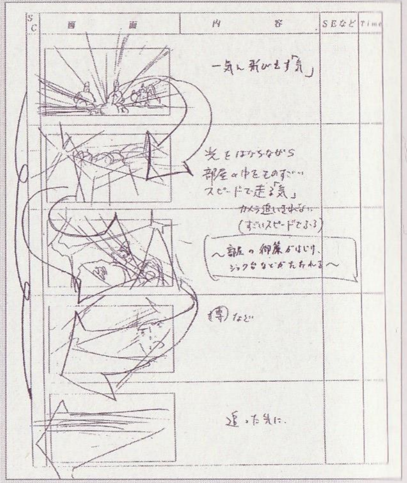
**原口：**僕は今回、自分で考えてやったっていうよりも、尾上さんの絵コンテや監督、真田さんに引っ張ってもらったという感じがします。あと、『陰陽師』は自分が個人的に好きなジャンル・冒険活劇なんです。『里見八犬伝』から途絶えていたジャンルですから、ここで頑張ってもらわないとまた消えちゃう。絶対にヒットして欲しいですね。いや、してくれなきゃ困る（笑）。



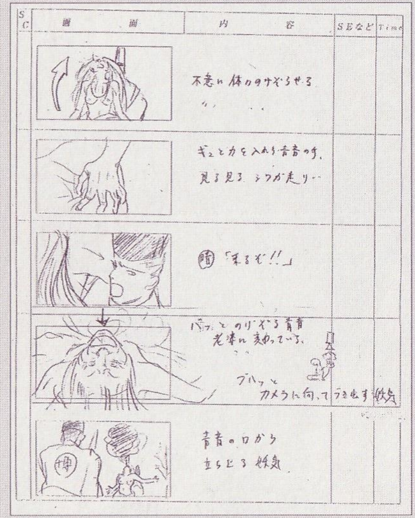


## 絵コンテ





尾上氏によって描かれたあと、㈱マリンポストの辻野南氏によって最終決定版が描かれた絵コンテ。インタビュー中でもお話があった通り、特撮部分だけでなく本編ドラマのカットまで描き込まれている。



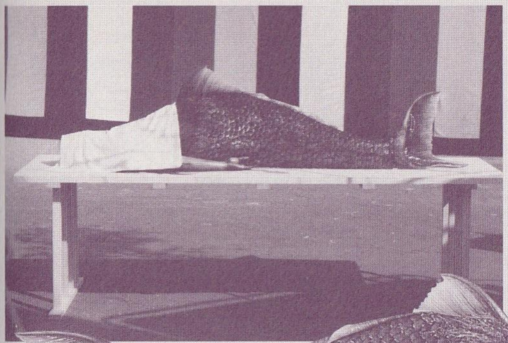


怨霊を表現した「もや」が登場する2つのシーン。当初描かれた絵コンテであるため、映画中では微妙に変更されている箇所もあるが、カット割りはほぼそのまま。

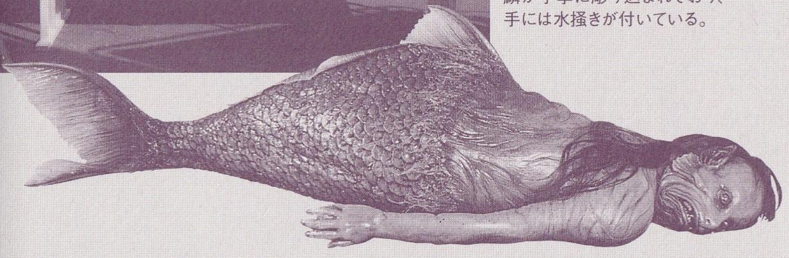
# 造型展覧

原口氏の手による特殊造型の数々は、あたかも生命があるかのようである。もちろん、映像の中では更に活き活きと『陰陽師』を構築する要素としてその役目を果たしている。





青音を数奇な運命に導くことになる人魚の死体。左は映画の1シーン。実際の造型物は、人の身長ほどの大きさ。色をお見せできないのが残念だが、鱗が丁寧に彫り込まれており、手には水掻きが付いている。



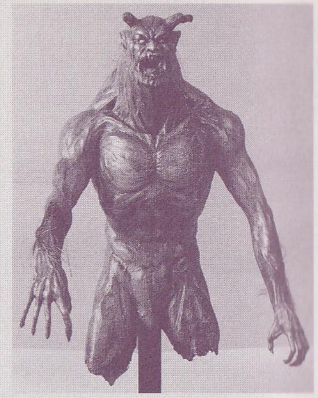
道尊の式神。道尊の命を受け、彼が敵とする人物の言動を見張っている。右から撮影に使用された式神、検討用、映画の1シーン。造型物には、呼吸している様子を表すための仕掛けが施されている。

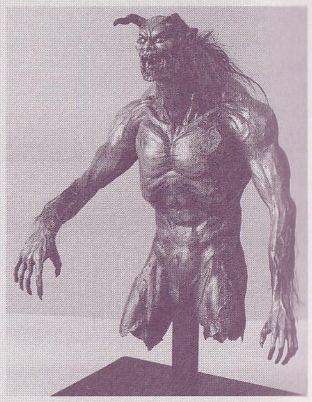






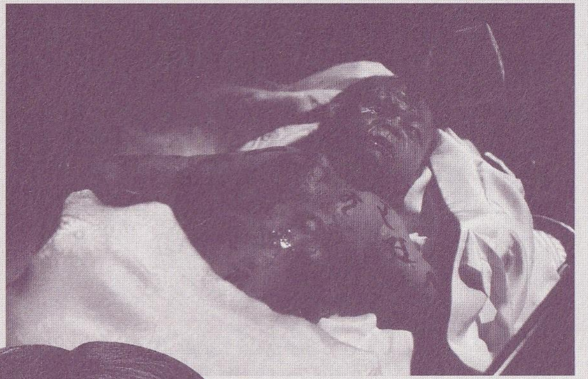






青音の口から飛び出す鬼の形をした妖気。右の造形物をCGIに取り込み、加工したのが左の映像画面である。天野喜孝氏によるイメージイラストを基に造られた。

呪をかけられた敦平親王の痛ましい姿。全部で2体が造型され、撮影に使用された。道尊の式神と同様、呼吸の様を表現するための仕掛けがある。





更衣・綾子の生首。悶絶の表情がことさらに生々しい。写真ではわからないが、首の切れ目周囲の肉がリアルに造り込まれている。

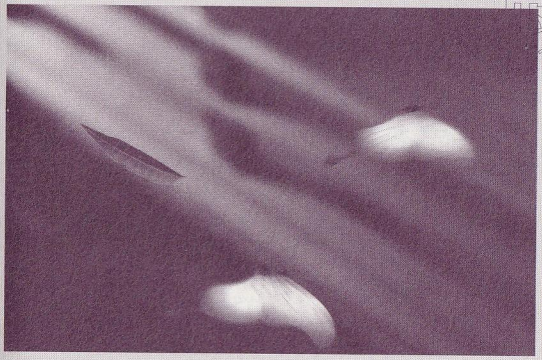


生気を奪われた陰陽師。背後から空気を吸って萎ませている（なんと掃除機がその役目を担っているらしい）。

# あやかしの『陰陽師』映像技芸

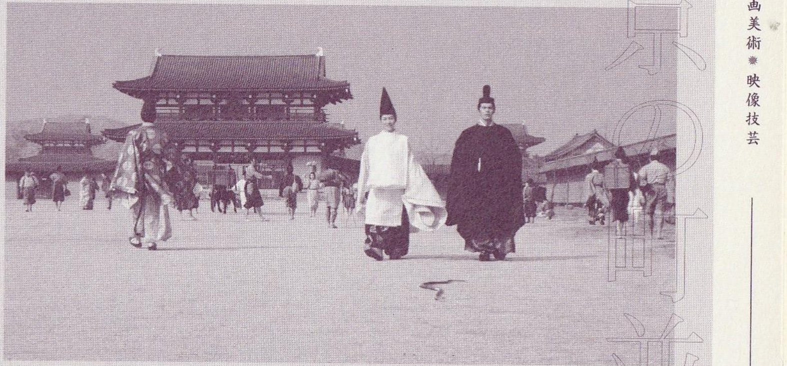
ここでは、さまざまな特撮技術が駆使された映像をご紹介。完成度の高さと、選りすぐりの手法にしばし酔おう

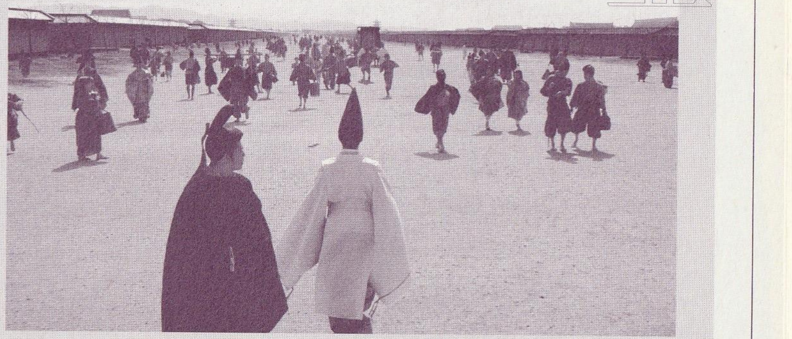
## 蝶



晴明の式神・蜜虫が蝶々となったときの姿は、全編フルCGである。ヒラヒラと舞う表現が見事にビジュアル化されているが、CGで「生物感」を出すのは実はとても難しいことなのだ。

## 京の町並



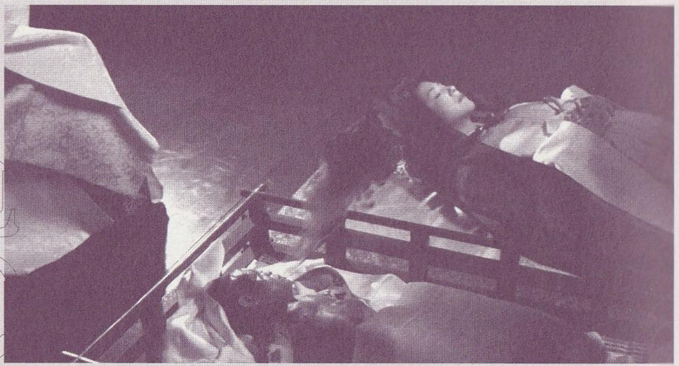


上写真は、まず復元した朱雀門が建っている京都の国立公園にて、門をバックに野村氏&伊藤氏の演技を撮影した映像から、現代的な建物などを全て消している。その後、平安時代の衣装を付けたエキストラたちの演技を撮った映像や壁、蛇などを合成。エキストラたちは何組かずつに分けて撮影されているが、違和感なく画面に馴染んでいる。

下写真に広がる朱雀大路は、ミニチュアとマット画(合成映像用の背景画)によって構成されている。80mあったとされる朱雀大路の大スケール感を再現している。



## 怨霊





上は、敦平親王の口から出る妖気。これはインタビュー中、尾上氏が「もや」と呼んでいたものである。水を入れた水槽の中に絵の具を勢いよく噴出し、それを撮影したものを素材として使っている。下は早良親王の顔が浮かぶCGの妖気。真田氏の目線とCGを合わせるのに苦労したという。

## 暗雲







都に向かう暗黒の雲(のような妖気の一種)。この雲は、大きい水槽の中に絵の具を放ったものを撮り、画像に合成されたという。アナログな手法だが、効果はてきめんである。



尾上氏入魂のシーンである。カメラが道尊の前に回り込むと、そこには都の変わり果てた姿が……。都の風景は、CGモデルとマット画で表現されている。

# 原作と時代背景

*the original and the Heian period*

そもそもの始まりである小説『陰陽師』、
その生みの親・夢枕獏へのインタビューのほか、
小説シリーズの紹介、作品の背後にある
バックグラウンドをわかりやすく解説します。



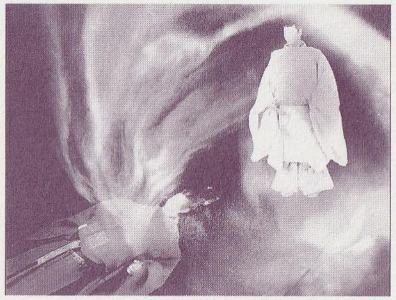
## 泰山府君祭



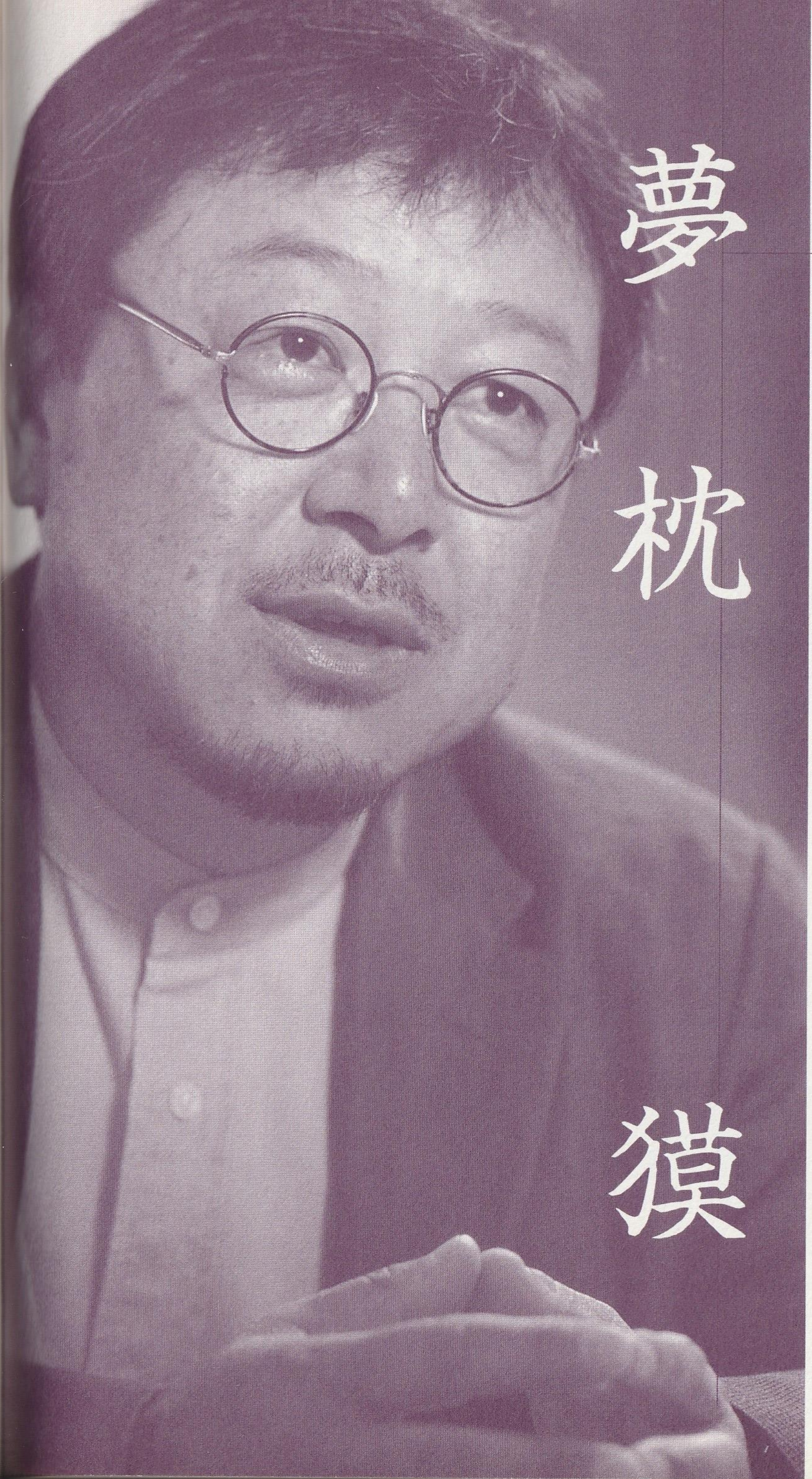
晴明が泰山君祭の舞いを踊るシーン。野村氏がほぼ即興で舞った映像にエフェクトを加えていく。飛び交う金粉や白いものは、CGではなく実際に金粉や包帯を水の中で回転させて撮ったもの。







泰山府君祭シーンを組み立てていく際、CG作業の前にオムニバス・ジャパン金海氏が描いたイメージイラスト。脚本には「光の煙」「光の粉」等の記述があるが、それだけではなかなかスタッフ内でのイメージが掴みづらい。そこで、こういった画をもってイメージの統一をはかる。



原作者

# 夢枕獏



■PROFILE
1951年神奈川県生まれ。77年、「カエルの死」でデビュー。「魔獣狩り」「餓狼伝」など多数の人気シリーズを連載中。



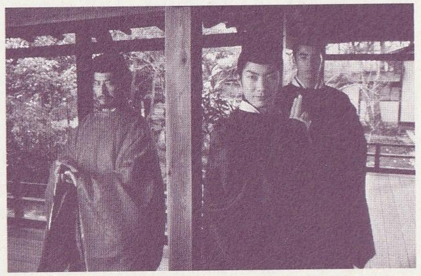


ここ数年、参拝者の数が増加している京都の晴明神社。祭神は平安時代に活躍した陰陽師・安倍晴明である。多くの人を魅了する安倍晴明、このブームの火付け役となったのが夢枕獏のベストセラー小説『陰陽師』シリーズである。現在も執筆中の小説『陰陽師』、この原作の数多いエピソードの中から、なぜ映画ストーリーの軸に「鉄輪」が選ばれたのだろうか。

「じつは、僕が映画のために『鉄輪』のエピソードを選出したのではないんです。まず、映画の題材として、『陰陽師』という素材を提供させていただきました。映画の制作スタッフの方たちが話し合いの上で、脚本家の方が書き上げた第一稿が『鉄輪』をベースにしたものだったんです。その第一稿を元に、滝田監督を初めとして、スタッフの方たちと話し合いながら僕も脚本に参加していきました。僕の方からは、"この場面で晴明だったら、多分こうはしないだろう"とか、"博雅だったら、きっとこの時こう言ったのではないだろうか"とか、映像的にこの場面はこうして欲しい、といった具合に脚本に手を加えていったんです。今回の映画化で、『鉄輪』を選んでくれたのは正解だろうなという気がするんです。というのは、ファンレターなどで読者の方から小説を読んだ感想を、聞かせてもらう機会があるのですが、"『鉄輪』の女の人がとても可哀想だ"とか、"鬼になってしまった女の人の気持

**「鉄輪」は、平安時代の鬼とは何か、を語っていく上で、もっとも適した素材だと思う。**







ちがよく分かる〟といったような意見を多く聞きます。『陰陽師』の中でも、評判の良い、人気の高い話の一つが『鉄輪』なんです。それに、人が鬼に変わっていく過程を描いた『鉄輪』は、平安時代の鬼とは何か、を語っていく上で、もっとも適した素材だと思っているんです」

小説『陰陽師』は'86年から執筆されている。そして、10年位前から映像化の構想はあったという。主人公の晴明役には、伝統芸能「狂言」の野村萬斎が抜てきされた。

「もし、『陰陽師』を映画化するなら、晴明は野村萬斎さんがピッタリだろうな、と以前から考えていたんです。狂言の舞台などに現れた時の姿や立ち居振る舞い、またそこから発せられるオーラというか雰囲気が、〝あっ晴明だなっ〟て、僕の持つ晴明の感覚に近い人だと思っていたんです。ですから、映画会社には最初に〝映画化するのであれば、晴明役は萬斎さんにお願いしてみてください〟と伝えてあったんです。それに萬斎さんは、声の通りがいい。舞台だけでなく、日常的な会話でも声の質がいいんですよ。それが、訓練なのか、地なのか、その両方なのか、僕には分かりませんが…。いずれにしても、晴明も博雅の役も難しいですよ。晴明は、感情表現という意味での役者の演じどころが非常に少ない役柄だと思うんですよ。日常では驚いたり泣いたりしない、いちいち感情を表に出さない人間として晴明は存在しているので、晴明を演じるのは難しいと思う。でも、萬斎さんは黙っていても雰囲気がある方なので、この配役は間違いないと思っていました」



晴明と行動をともにする源博雅は、若手俳優の伊藤英明が演じた。殿上人でありながらも素朴で純粋な心の持ち主で、彼の奏でる笛の音は、人や鬼、はたまた天地までも動かしてしまうほどという源博雅。こちらの役どころも大変重要だ。

「配役に関して、僕の方からお願いしたのは萬斎さんだけなんですよ。原作者が配役を、この役はこの人でなどと、あれもこれも注文するのは良くないと思うので、他の配役は全て製作者サイドにお任せしました。

晴明がそうであるように博雅も、現代人が持っていない資質を備えている人間なので、演ずるのは難しいだろうなと思いました。何度か撮影現場に足を運んで、博雅を演じる伊藤さんを拝見しましたが、非常にいい感じでやってらした。伊藤さんは、すっきりしている。背が真っ直ぐ上にいっている。伊藤さんが持っている雰囲気は、貴族であり雅楽を演奏する博雅に通じるものがある。その存在感も貴族的資質も充分持ち合わせているな、と感じました」

小説のヒットと共に巻き起こった安倍晴明ブームで、晴明や博雅が史実の人物であることは広く知られるようになった。今回の映画では晴明の宿敵として冷酷なキャラ・道尊と、不思議な力を持つ女性・青音が登場する。

「道尊も、青音も、映画のオリジナルキャラです。青音は、小説では白比丘尼として登場していて、白比丘尼も八百比丘尼というモデルがあるんです。青音は、スタッフたちとの話合いの中から誕生した人物で、誰か個人が考えたものではないんです。

また、史実や小説では晴明の好敵手として蘆屋道満という人物が登場しますが、映画で道満に当たるのが道尊です。しかし、小説のキャラクター設定とは異なるので、道満とは別名にしてほしいと僕の方から提案しました。『ドウマン』に『ドウソン』と、音の響きが近い名前になっていますし、二人とも陰陽師という共通点があるのですが、原作の道満と映画の道尊の大きな違いは、二人の人物像にあります。道満は一人山野に寝起きする人間、自由人で、晴明の老いた姿をイメージして貰っていいのですが、晴明と異なる点は博雅のような人間に出会う事ができなかったため、『孤独な老いを迎えてしまった晴明』的要素を持った役割を果たしているのです。それに対して道尊は、陰陽師の頂点に立つ陰陽頭という役職上、宮廷の人間、権力側に立つ官僚的役割を果たしているのです。しかし、実は道尊も…、…この先はスクリーンで確認してください」

〈呪〉という言葉が、『陰陽師』の大きなキーワードを担っている。

「いい加減なところといい加減でないところを微妙に混ぜながら、僕は〈呪〉というものを書いているんですよ。こういう風な言い方をしたら面白いだろうな、というのが一つ。そして、たとえ嘘でも説得力があるもの。聞いていると納得しているが、実は良く分からないというようなものにしたかった。でも、理屈は通っていないといけない。何故、言葉によって天地が動くのか？　呪文を唱える。紙に呪文を書く。色々な方法がある。そして、一番短い〈呪〉とは何か？　僕は〝中でも一番短い〈呪〉が名前である〟と晴明に言わせているんですよ。それが、〈呪〉の全てを物語っているんです。宇宙を認識する上でも、言葉が必

何故、言葉によって天地が動くのか？
呪文を唱える。紙に呪文を書く。色々な方法がある。
そして、一番短い〈呪〉とは何か？
〝中でも一番短い〈呪〉が名前である〟と僕は晴明に言わせているんですよ。

要で、名付けることによって初めて、私と宇宙という関係が生まれてくる訳です。
　映画の中でも取り上げたエピソードの一つですが、空の月を指差して"あなたにあげよう"といい、相手が"いただきます"といった瞬間に、月は相手の物になる、というのが〈呪〉なのです。いかに、そのことを強く願うかによって、言葉で月さえも所有することができてくる訳です。残念ながら博雅は、望月の君から"いただきます"という返事を貰えませんでした。これは、博雅の想いが弱かったということよりも、望月の君が"この方からいただいては申し訳ない"と思ったか、もしくは、他にもっと好意を寄せる人物がいたということでしょうね」
　原作『陰陽師』の魅力のひとつに、晴明と博雅の二人の掛け合いがある。特に読んでいて楽しい晴明邸の濡れ縁での、「ゆこう」「ゆこう」の場面も映画の中に何度も登場してくる。しかし、映画では晴明に使える式神・蜜虫が何度かこの掛け合いに参加して3人の掛け合いになっているのだ。
「何人ものスタッフで考えた結果です。脚本の第1稿段階では、蜜虫にもっと多くのセリフがあったのです。しかし、蜜虫があまり多くの言葉を語ってしまったり、感情を表現してしまったら、蜜虫というキャラクターは、『式神』ではなく『人間』になってしまう。そこで、"ようこそ、いらっしゃいました"や"どうなさいました"など単純な挨拶や、誰かの言葉を繰り返す程度に留めてほしいと、僕の方からスタッフにお願いしたんです。スタッフからはもっと蜜虫を動かしたいという意見も出ていたのですが、あくまでも蜜虫は小説では花の精、映画でも蝶の精という存在なんです。制作スタッフと色々話し合った結果、落としどころとして、3人で掛け合うような演出に落ち着いたのです」
　『陰陽師』を映像化したことは、今後の小説を執筆していく上で、何ら影響を与えるものではないという。
「『陰陽師』で書きたい事、ストックしているネタは変わらずずっと持っているので、小説

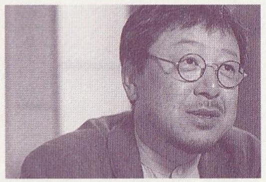
## 晴明のシーンを執筆する時に萬斎さんが演じた野村版晴明が、ちらほらと浮かんでくることがありますね。







を執筆することに関しては、一切影響はないです。いつの時点で映像化されたとしても、その作品は僕の持つ『陰陽師』のイメージとは別のものになるはずですし、ならなくてはいけないと思います。いままで他の小説の映像化や漫画化などの経験からも、どの時点で、誰が作っても、映像化された場合、僕の持つイメージとは、別のイメージになることは覚悟しているんです。映像化作品として、良い作品に仕上がってくれればいいなと思っていました。ただ、影響を受けるという点では、いままでにも何度か博雅のシーンを書いていて、岡野玲子さんの描くコミック版博雅の顔が浮かんでくることがあったんです。今は、晴明のシーンを執筆する時に萬斎さんが演じた野村版晴明が、ちらほらと浮かんでくることがありますね。
　小説は、これまでと同じペースで執筆していく予定です。他に何本も平行して小説の連載を抱えているので、どれか連載をやめなければ『陰陽師』を多く書くことはできないのです。今後も2ヶ月に1本のペースを守って執筆していく予定です」
　映画『陰陽師』は原作者としても、納得の作品に仕上がったようだ。
「滝田監督はアベレージの高い人で、今までもつまらない作品は1本もないのです。晴明が、青音から呪を落とすシーンが、いいですね。それに、真田広之さんが演じた道尊もいい。真田さんは滝田監督と話し合われて、道尊を演じるために体重を5kgも増やされたそうで、その役柄への取り組み方にも感激しています。真田さんはアクションスターとして1人で、萬斎さんは狂言で、二人とも長年躰を鍛え上げているので身体能力が高く、立ち会いのシーンでは呼吸もピッタリですね。野村萬斎という役者の凄さと、それを受ける真田広之という役者がいたというのが、この映画にとって、大きな幸福であったと思います。ぜひ、観てください」







# 陰陽師の世界背景

華やかな宮廷絵巻が繰り広げられていた一方で、鬼や怨霊が棲んでいた平安の時代——その様相を5つのキーワードに分けて解説。晴明や博雅が活躍した時代の背景を知ることで、映画『陰陽師』をもっと深く味わえるはずだ。

## 一、時代背景

**映画の中では、物語は七九四年の後ということしか明らかにされていない。そこで、平安京遷都前後に起こった実際の出来事を振り返ってみたい。**

七八〇 伊治呰麻呂(いじのあざまろ)の乱

七八一 藤原小黒麻呂(ふじわらのおぐろまろ)の討伐

七八四 長岡京へ遷都

七八五 藤原種継(ふじわらのたねつぐ)暗殺事件

七九三 平安京造宮開始

七九四 平安京遷都

七九七 蝦夷遠征・坂上田村麻呂が征夷大将軍に任命される

八〇四 最澄、空海ら入唐する

八一〇 薬子の変(平城上皇復位事件)

八二三 空海、東寺を与えられる

八四二 承和の変(伴健岑(とものこわみね)・橘逸勢(たちばなのはやなり)らによる謀反事件)

八六六 応天門の変(伴善男による応天門放火事件)

八八四 関白設置

八八七 藤原基経を関白に任命

八九四 菅原道真を遣唐大使に任命 道真の健言により、遣唐使派遣中止

九〇一 昌泰(しょうたい)の変(菅原道真左遷)

九〇五 「古今和歌集」撰上

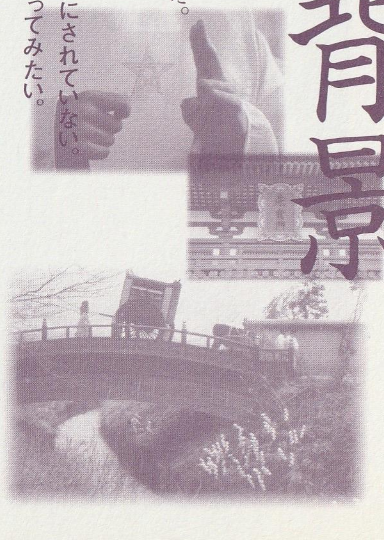
九〇七 「延喜格」撰上

九四七 北野に菅原道真を祀る

九六〇 内裏焼亡

九七〇 祇園御霊会が行われる

一〇一六 藤原道長、摂政となる







## 二、地理

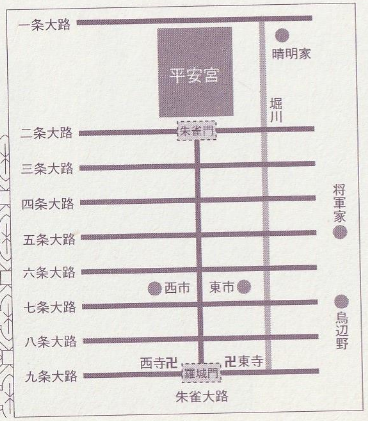
# 「雅び」と「魔」が潜む場所　平安京

政教分離を計るため平城京から長岡京へと遷都した桓武天皇は、新しい都を十年ほどで捨ててしまう。長岡京に遷都した際、都の造営責任者だった藤原種継(ふじわらのたねつぐ)が暗殺され、その黒幕と疑われた早良親王が自殺する事件があった。その直後、桓武天皇の后や皇太子が相次いで病死した。天皇は早良親王の怨霊を恐れ、それから身を守るために遷都したのが平安京である。

平安京造営にあたっては、大陸よりもたらされていた陰陽五行説(いんようごぎょうせつ)に基づき、四神相応の思想を考慮して設計された。四神相応とは、北の山が玄武、南の池や湖が朱雀、東の大河が青竜、西の大きい道が白虎というように、四方に聖獣を配した土地の都は栄えるという思想である。平安京は北に船岡山(ふなおかやま)、南に巨椋池(おぐらいけ)、東に鴨川(かもがわ)、西には山陰(さんいん)・山陽道(さんようどう)と、理想的な土地だったのだ。さらに、北の守りとして鞍馬山(くらまやま)に毘沙門天を祀り、災厄をもたらす鬼が侵入する鬼門の方位(北東)に比叡山延暦寺(ひえいざんえんりゃくじ)を配した。他にも都を守るためのシステムはたくさんあり、平安京は早良親王の怨霊の害を避けることにはじまって、様々な呪術で守護されていたのである。

しかし厳重な守護にも拘わらず、都には鬼やあやかしが現れた。そのため、魔を払い、災厄を遠ざける技術を持った者たちが都には必要不可欠だった。陰陽師、安倍晴明は、そうした技術を持った者たちの代表なのである。

史実では、晴明の邸宅は現在の上京区長者町西洞院東入ルあたりにあったという。内裏から見て鬼門の方向にあたり、晴明その人も都、つまり帝を守護するシステムの一つに組みこまれていたことがわかる。また、映画の中で博雅が晴明を訪ねるときに通った橋があるが、これは一条戻り橋である。都の最北端になり、洛中と洛外の境界であるとともに、人間世界とあやかしの世界との境界でもあった。伝説では晴明はこの橋の下に式神を隠しておいたという。博雅のぼやきがすぐさま晴明に伝わったのは、どうやら式神が報告していたようである。



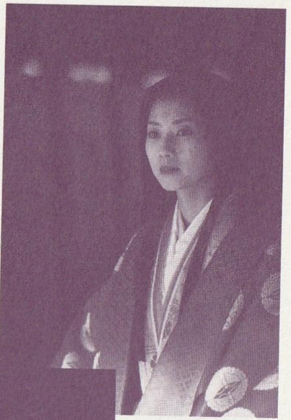
## 三、生活様式

# 春夏秋冬　時の移ろうままに

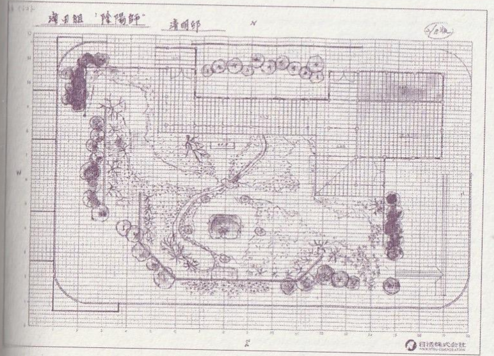
晴明や博雅が活躍したのは、平安時代の中期になるだろうか。映画でははっきりしていないが、原作での帝は村上天皇になっているので、西暦でいえば九四〇年代後半〜九六〇年代後半あたりである。当時の貴族たちの生活は、現代人から見ると優雅に見えるが、実際はなかなか厳しいものがあったようである。

例えば映画の中で、晴明は自分の屋敷でくつろいでいるときは白い狩衣（かりぎぬ）（古くは狩猟をするときの衣装だった公家の常用服）でいるが、参内するときは束帯姿（朝廷の公事に着用する正装）になっている。博雅も晴明の屋敷にゆくときは直衣（のうし）（公家の平常服）だが、内裏にいるときは衣冠姿（束帯の略装）である。

雅びな衣服一つとっても、位によって使える素材や色に規定があり、場所や会う人によって衣服を変えなくてはならなかった。また、貴族たちの衣服は袖口の広いゆったりとしたデザインになっている。女性の十二単（じゅうにひとえ）や、本来動きやすさを求められる狩衣や武士の装束も動きにくそうだ。このようなデザインは、生産活動をしなくてもよい者たちの衣服だからである。別の言い方をすれば、活動が制限されていたともいえる。王朝の政治とは国内が安泰でいるように神に祈り、祭を行うことだったと言っても過言ではなく、そうした祭に従事する貴族たちは、日々穢れることのないように過ごした。歌や楽器を奏でることは、貴族たちが穢れることなく遊べた娯楽であるとともに、仕事の一部でもあったのだ。









原作と時代背景●陰陽師の世界背景



貴族たちの食生活については、あまりよくわかっていない。貴族の日常食を記した資料というのはほとんどなく、特定の儀式で食された食品がわかっている程度。各地方の国司が朝廷に奉納した地方産物の記録から、おおよそのことが推測できるくらいなのである。米を主食とし、副食には干した肉や魚、漬け物といった保存食が並べられたらしい。それが朝夕二回というのが普通で、間に間食といって軽食を食べただけだった。生鮮食品はあまり口にできず、そのため貴族たちは栄養失調ぎみだったようである。一方、庶民たちは食べられるものはなんでも食べたし、生産者は生鮮食品を口にしていたから、貴族よりははるかに健康だったようだ。

映画の中で当時の食生活が伺えるのは、晴明と博雅が酒を飲む場面くらいだろう。当時の酒は濁酒である。また、映画中の酒杯は土器だが、当時はガラス杯もあったようだ。



# 四、恋愛様式

## 女の情念は鬼となり……

平安時代には、男女ともに大変おおらかな恋愛を楽しんでいたようだ。天皇以外の男は自由に女のもとに通えたし、二人三人とかけもちすることも珍しくなかった。女性にしても同じで、一人の女性に複数の男が通うこともあった。例えば平安中期に活躍した和泉式部のもとには、四人の男が通っていたという話もある。一夫一婦婚は儒教の思想が広まった室町時代あたりからといわれ、それまでは重複婚が公然と行われていたのである。ちなみに男が女のもとへ通うというのは妻問い婚（夫が妻のもとに通うだけで同居はしない。後に妻の家に同居する婿入婚になり、藤原道長の時代あたりから嫁入婚の形式が見える）のスタイルをとっているからで、通う日時や時間は女性の都合にあわせていたようである。

恋愛をするにはまず恋の告白をしなくてはならないが、平安貴族たちはよく歌を贈って自分の気持ちを伝えた。この時代で歌といえば和歌のことで、好きだという気持ちを自然の風物や景色を借りて間接的に表現したのである。映画の中で帝が祐姫に贈った「望月の〜」という歌もその類であろう。

このような自由な恋愛の風潮は、紫式部の『源氏物語』のような恋愛文学を生み出すことになるが、一方で映画の祐姫のような女性を生み出すことにもなった。祐姫は謡曲『鉄輪』の女性がモデルであろう。夫に捨てられた女が怨みを晴らすために貴船神社に呪詛──願掛けをして、社人より赤い着物を着て朱を顔に塗り、頭上に鉄輪を乗せてその三つの足に蝋燭を灯せば、生きながらにして鬼になれるという神の告げを聞く。鬼となった女は男を殺そうとするが、安倍晴明の方術によって退散してゆくというのが『鉄輪』のおおまかな内容。映画の中で晴明は祐姫のことを生成りというが、生成りとは怒りと悲哀をないまぜにした醜女のことで、自分の力では鬼になれず、神仏の力を借りることで姿を変えた鬼の一歩手前の状態をいう。謡曲では本当の鬼（蛇）になってしまう『道成寺』の女を本成とし、『葵上』や『安達原』などの女が中成、そして『鉄輪』の女を生成としている。

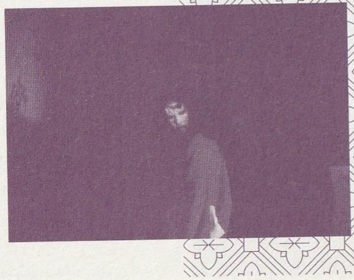








祐姫のように、男の愛情を独占できないばかりか、捨てられてしまう女性は実際少なくなかっただろう。激しい怒りと哀しみから、呪詛に走った女もいたはずである。『源氏物語』で葵上が六条御息所の生霊に苦しめられる件があるように、女の執念は時として恐ろしい力を見せると、平安時代の人々は信じていたようだ。



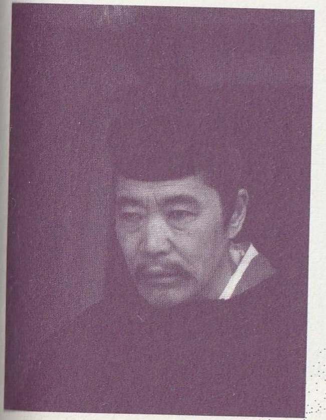
## 五、身分制度

# 華やかな表舞台にうごめく 血の争い

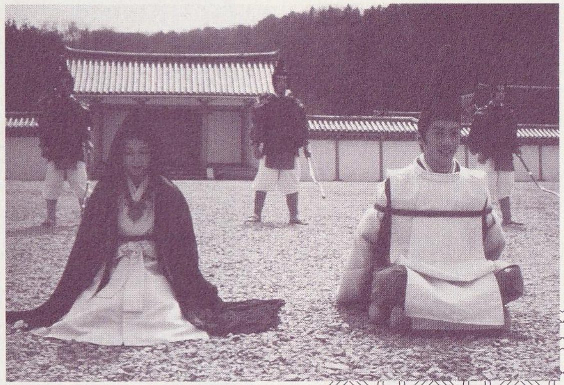
帝を頂点とした縦割り社会に身を置いていた平安貴族。身分を表わす官位には、正一位から少初位まで十段階のランクがあり、それぞれ正と従、四位以下にはその他に上と下などと細かく分けられていた。上下関係は絶対的なものがあり、いくら年長者でも官位が上の若者には逆らえない。また、衣服の色や種類、儀式のときの食事の内容と、身分による違いは様々なところで見られた。

映画中ではわからないが、晴明は原作で陰陽博士、博雅は従三位と設定されている。陰陽博士は七位になるため、官位でいえば博雅の方がずっと上である。作中で、青音の身体より出てきた妖気を博雅が斬るシーンがあり、そこで晴明が「斬れ、博雅っ!!」と叫ぶと、博雅が一瞬ムッとする。これは官位が下の者に名前を呼び捨てにされたことに腹を立ててのことだと思われる。原作では親友ということになっているので、博雅は供の者も連れずに一人で晴明の屋敷を訪ね、それを迎える晴明の方もかなりアバウトになっているが、本来ならば晴明と博雅はお前と俺のような口の聞き方はできないはずなのである。

また、晴明は陰陽寮に所属しているが、当然ここにも身分の上下があった。陰陽寮とは中務省の機関で、暦の作成や内裏での祭事を執り行う部署のこと。事務官と技官とに分かれ、事務官には頭、助、允、大属、少属が各一名づつ、技官には陰陽、天文、暦、漏刻の四つのセクションにそれぞれ一人の博士がいて（暦博士は二人）、それに六人の陰陽師と数十人の学生が加わる。これら陰陽寮に所属する者たちのトップが陰陽頭で、官位は五位になる。映画では道尊がこの役目にあたり、晴明の上司ということになっている。



道尊は右大臣藤原元方に依頼され、左大臣藤原師輔の孫である敦平親王の呪詛をしているが、こういうことは実際にありえた。平安時代に限らず、玉座を狙って親族や兄弟が骨肉の争いをしてきたのはよく知られているところである。呪詛によってライバルを蹴落としたり、身分の低い者が高い者の座を奪うために呪詛をするという行為は、かなり頻繁に行われていたらしい。例えば『続日本紀』という奈良時代の正史には、呪詛を禁止する勅令のことがいくつか記されている。天皇自らが禁止したということは、それだけ多くの呪詛が行われていたことを示している。桓武天皇が平城京から長岡京、平安京と遷都したのには、呪詛の流行がその理由の一端を担っていたともいえるだろう。



| 名前 | 役職 | 官位 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 安倍晴明 | 陰陽寮　陰陽師 | 従七位上（文官） | 陰陽寮内にいる六人の陰陽師のうちの一人 |
| 源 博雅 | 右近衛府　中将 | 従四位下（武官） | 天皇の警備を担当する右近衛府の次官 |
| 藤原師輔 | 左大臣 | 正二位（文官） | 史実では右大臣 |
| 藤原元方 | 右大臣 | 従二位（文官） | 史実では大納言 |
| 藤原任子 | 后妃　女御 | | 従三位 |
| 藤原祐姫 | 后妃　更衣 | 従四位下 | |
| 道尊 | 陰陽寮　陰陽頭 | 従五位下（文官） | 陰陽寮の長官。一般に五位以上を殿上人という |

この表は、『陰陽師』映画製作にあたって設定された官位表です。
原作や史実とは異なる箇所がありますが、ご了承下さい。

# 小説 陰陽師かいせつ

映画『陰陽師』の原作・夢枕獏氏の『陰陽師』シリーズ。1986年から連載が始まり、1988年に第一巻が発売。『陰陽師』という言葉を世に広めた大ヒットシリーズである。映画ではこれらの原作を基に独自の物語が展開されるものの、晴明と博雅のキャラクターはほぼ原作のまま。2人が「あやかし」に臨み、共に酒を飲んで交遊を深めてゆく様を、夢枕氏独特の文章でぜひ堪能してみよう。




## 陰陽師

作者◎夢枕獏
定価◎単行本 1238円
文 庫 476円(文藝春秋)

6つの短編からなる晴明と博雅の登場編。2人の出会いは描かれておらず、すでに親しい関係となってからの物語が綴られている。映画で晴明が博雅に「呪」について説明する重要なシーンは『玄象という琵琶鬼のために盗らるること』から引用されている。

### 玄象といふ琵琶鬼のために盗らるること

宮中より玄象なる琵琶の名器が盗まれ、それを夜な夜な羅城門の楼上で弾く者がいる。鬼の仕業である。鬼のことならば陰陽師の仕事と、武士・源博雅は親友である安倍晴明に相談をする。二人は夜の羅城門へ赴き、鬼に琵琶を返すよう促すと、鬼は宮中の玉草なる女と引き換えの条件を出す。実はこの鬼、天竺出身の旅の楽士で、玄象を作った本人だった。日本という異国で死に、望郷の念にかられて鬼と化した。故郷の妻と瓜二つの玉草と、せめて一夜の契りを交わしたい…鬼はそういった。翌晩、鬼は玉草と引き換えに琵琶を返した。が、玉草は哀れにも喰われてしまう。本性を現した鬼は晴明の呪により玄象の中に封じられてしまうのだった。

### 梔子の女

桂川に近い妙安寺でのこと。寿水なる僧が夜中に目覚め、ふと気になって外に出ると、口を袖で隠した女が廊下に佇んでいた。声をかけると、スッと袖を下げる。女には口がなかった。そんなことが毎晩続くので、寿水は知り合いの博雅を通じて晴明に相談した。そして夜。妙安寺で待ち伏せしていた晴明は、現われた例の女に「如」と一字だけ記された紙を見せた。女は嬉しそうな顔で、後ろを指し示して消えた。女の後ろには寿水が写経をする別室があり、そこに一冊の般若経があった。中を開くと、経文の「如」の字の口の部分が汚れて「女」になっている。晴明が文字を修正すると、以降は女は現れなくなった。般若経の文字の精だったのである。





### 黒川主

鴨川近くに鵜匠の賀茂忠輔という男がいた。十九になる孫の綾子との二人暮らしだったが、ある晩から異変がはじまった。獣の臭を漂わせた黒川主と名乗る男が綾子の寝室に忍び入り、忠輔の眼前で痴態をくり返すのである。その間、忠輔は身動きがとれない。魔性の仕業である。そこで忠輔は、遠い親戚にあたる源博雅を通じて、晴明に相談したのだった。晴明が黒川主の正体を暴くと、それは獺だった。生簀を荒らす雌と子供の獺を忠輔が殺したことを怨み、生き残った雄が復讐していたのだ。晴明が獺を捕らえている間に、綾子は異形の子を産んだ。獺の子は六十日で産まれるという。晴明の通力に観念した獺は、捨てられた異形とともに川を流れていった。

### 蟇

応天門に蝦蟇の顔をした子供のあやかしが現れ、息をかけられると熱病に罹ってしまうという。――昔、尾張義孝なる者の子供が、戯れに竹で蝦蟇を地に貫き通したところ、蝦蟇は死なず、同時に子供は蝦蟇の祟りによるものか熱病に罹って死んだ。ちょうどその頃、応天門が焼失した。戯れにやった子供の行為が門を焼失させる呪詛だと疑われ、義孝夫婦は死罪となる。その直前、夫婦は子供と蝦蟇の死体を燃やし、その灰を壷に入れて応天門の土中に埋めていた。冤罪の怨みを込め、応天門あるかぎり祟ってやろうと。晴明は秘術でもって今は鬼となった義孝夫婦よりこの話を聞き出すと、博雅を伴って応天門へと行き、その祟り――あやかしを封じたのだった。

### 鬼のみちゆき

はじめにそれを見たのは盗人だった。羅城門あたりで、引く牛がないのに進む妖しい牛車と、それに乗る女のあやかしを見たのである。牛の首部分を押さえる横木には、長い女の髪が縛られていた。翌晩は朱雀大路と七条大路が交差するあたりで、ある公家がこれに遭遇した。あやかしは七日間かけて内裏へ向かうといった。どうやら帝の命を狙っているらしい。最初に目撃されてから七日目。晴明と博雅は、朱雀門の前で件の女を待った。やがて現れた女は、鬼と化していた。しかし、晴明が帝の髪を車に縛られた女の髪に結び付けると、光とともに牛車も女も消えていった。――帝に捨てられた女が、死して帝と会おうと、鬼になってしまったのである。

### 白比丘尼

雪の降る晩。晴明の屋敷では、庭を見ながら晴明と博雅が酒を酌み交わしている。やがて二人の前に、黒い僧衣の尼僧が現れた。晴明とは旧知の仲のようだが、博雅は晴明にただ手伝ってくれといわれているだけで、何者とも知らされない。何を手伝うのかもわからない。やおら尼僧は僧衣を脱ぎ、全裸で雪上に座した。晴明は尼僧に二本の針を打ち、呪を唱える。すると、尼僧の股間からは黒い蛇が出た。晴明に促され、博雅は黒蛇を太刀にて斬った。尼僧は人魚の肉を食べて不老不死を得た八百比丘尼だった。体を売って生活しているという。とるはずだった歳は精液と反応して鬼となる。そのため三十年に一度、身体の鬼を追い出す儀式が必要だったのだ。



※価格はすべて税別です




## 陰陽師　飛天ノ巻

作者◎夢枕獏
定価◎単行本　1238円
　　　文　庫　448円（文藝春秋）

**シリーズ二巻目。映画で見事な笛の音を披露していた博雅。『源博雅堀川橋にて妖しの女と出逢うこと』は、博雅の生い立ちやその音楽の才能について触れた短編である。全7編。**

### 天邪鬼

東寺の仏師はある怪異について晴明に相談をしていた。樹齢千数百年を経た檜材で四天王像を彫っていたが、広目天像があと数日で完成というところで、像の下にいた邪鬼が消えてしまったのである。ちょうどその頃。上賀茂神社の奥、山の中の小道の途中に檜の切り株があり、夜、そこを通ると童子が現れて、さまざまな怪異をなすという事があった。博雅よりこの話を聞き、二つの怪異が繋がることを見抜いた晴明は、山中に赴くと庚申の真言を唱え、童子をただの邪鬼の彫り物へと戻したのだった。実は仏師が像を作るときにしなければならない修法——庚申の真言を唱え忘れたため、檜の精が姿を得て、もと自分がいた場所で怪異をなしていたのである。

### 下衆法師

不思議な術を往来の人に見せて商売とする青猿という法師がいた。寒水翁なる絵師がその術を習得したいと声をかけると、青猿は師匠を紹介するという。師匠のもとに行く際は、刀を持ってきてはならぬとも付け加えた。後日、寒水翁は青猿の案内で山中の僧坊に住む師匠にあった。師匠とよばれる老僧は、獣の匂いがして、とても人間とは思えない。今にも取って喰われそうなので、寒水翁は隠し持っていた短刀で老僧を刺して逃げた。老僧と見えたのは実は古狢で、青猿法師は猿が正体だった。寒水翁は傷を負った古狢に命を狙われ、晴明に助けを求める。古狢はあの手この手で寒水翁の命を奪おうとするが、刀を使った晴明の術によって退治される。

### 陀羅尼仙

晴明は明智という僧の相談を受けた。夜、僧形の者が現れ、香を焚いてくれという。明智が毎晩読誦する尊勝陀羅尼を懐かしく思い、つい聞いていたところ、人間界の気に触れたために体が重くて帰れなくなった——などとその者はいうのである。香に乗って帰るつもりらしいが、うまく行かない。そこで僧形の者が、晴明に相談してくれと明智に頼んだのだった。晴明が帰れなくなった原因を探ると、それは明智が秘蔵する白拍子の絵姿に懸想して、俗に戻ったことが理由だった。僧形の者——もと叡山の僧・浄観は、仙人に憧れて仙道を学び、魂を蝶に変える術を得た。しかし不老不死とは行かず、最後は人として死を選び、晴明たちの前から消えていった。





### 露と答へて

ある晩、藤原兼家は女のもとへ出かける途中で百鬼夜行に遭遇した。鬼の瘴気の影響でしばらく通えぬという歌を兼家より送られた女は、源博雅を呼びつけ、晴明に頼んで兼家の瘴気を除いて欲しいといった。博雅は兼家の屋敷に赴いたが、主は寝込むほどのことではないらしい。念のため博雅は晴明に話し、兼家の様子を見るよう促すが、晴明は兼家宛ての書状を書いただけで、それを兼家に見てもらえばすべて終わるといった。実は百鬼夜行云々というのは、別の女が出来たための兼家の狂言だった。晴明も博雅に相談した女も、すべてお見通しだったのである。嘘がばれていることを伝えるのに、角が立たぬようにと人徳のある博雅が利用されただけだった。



### 鬼小町

八瀬の山寺に如水なる老法師がいた。この寺に毎日欠かさず供え物をする品のよい老婆がいて、如水はあるとき声をかけた。老婆は声をかけてくれるのを待っていたといい、自分の家に案内すると、床へ導こうとする。逃げる如水に向かって老婆の口からはなぜか男の罵声が。その晩から老婆が寺に来て如水の名を呼ぶのだった。老婆——小野小町は、百歳の醜い姿で死したものの、今一度男に優しい言葉をかけて欲しいという願いから、成仏できずに鬼となった。さらに、生前の小町に恋をして、思いを遂げる前に死した男の霊が小町に取り憑いているのだった。晴明は小町の霊を如水から遠ざけることはできたが、小町と男の霊を救うことはできなかった。

### 桃薗の柱より児の手の人を招くこと

源高明の住む桃薗邸で怪異が続いた。夜、柱の節穴から子供の手が出て招くのである。高明が矢尻を節穴に入れると、手は出なくなったが今度は人の指が天井から降ってくる。対処すればしたで必ず別の怪異が起きる。さっそくよばれた晴明が原因を探ると……。人の身体と同じく大地にもさまざまな気脈が流れている。ちょうど如意ヶ岳から伸びる一本の気脈が高明の屋敷の下を通っていて、それを止めると怪異が起きる。気脈を止めていた原因は、高明の身の回りの世話をする端女・小萩である——ということがわかった。小萩は高明の子を腹に宿していて、その赤子が気脈を止めていたのである。子供が生まれてしまえば、怪異は止むとのことだった。

### 源博雅堀川橋にて妖しの女と出逢うこと

夜、架け替え工事目前の三条堀川橋に、女のあやかしが出るという。博雅は宿直の者たちに頼まれ、事の真偽を確かめに行くはめに。橋に行くと果たして女はいた。しかし悪意はないようで、博雅は女に導かれて唐風の屋敷に入り、そこで晴明と出会う。女のあやかしというのは橋の下に住む女主人——白蛇の精に仕える乳母で、主人が難産で苦しんでいるとき、橋を渡る者に注意していたのだった。晴明はあやかしを探っているうちにこのことを知り、女主人の出産に立ち会っていた。博雅はわけがわからないままに、晴明にいわれて笛を吹いた。その音色は不思議と女主人の苦しみを和らげた。後日、橋の工事のときに、白い蛇が三匹、川を流れていったという。




## 陰陽師 付喪神ノ巻

作者◎夢枕獏
定価◎単行本 1238円
文 庫 476円（文藝春秋）

**シリーズ三巻目。『鉄輪』の「生成り」となった女性の物語は、映画では祐姫の悲恋となって登場。また、晴明が瓜の呪詛を解くくだりは『打臥の巫女』より引用された。全7編。**

### 瓜仙人

博雅は帝の使いから帰る途中、不思議な翁に声をかけられた。檻の竹筒を持ってきたので今晩行くと晴明に伝えてくれというのである。博雅が晴明にその旨を伝えると、晴明は今から五条堀川の廃墟に行こうといい出す。ちょうどそのころ、都では怪異が頻繁に起きていた。その原因が三善清行が住んでいた屋敷——廃墟にあると晴明はいう。もともとその屋敷には化け物が住んでいたのだが、そこを買った三善清行が一喝して化け物を追い出した。清行の死後、廃墟となったところに化け物が帰ってきたのである。その化け物というのは管狐で、飼い主の不思議な翁——丹蟲方士のもとから逃げて、悪さをしていたのである。晴明は通力を持って飼い主に戻した。

### 鉄輪

貴船神社に毎晩丑の刻参りをする女がいた。五寸釘が打ちこまれた人形には藤原為良の名があり、神社の者はそれを為良に伝えた。身に覚えのある為良は自分が呪われていることを恐れ、晴明に泣きついた。為良を呪う女——徳子。三年ほどで捨てられたことを怨み、鬼となって為良を取り殺そうと、貴船の神に願掛けしていたのである。鬼と化すことを願った徳子だったが、迷いからかその身は生成りと変じた。女が嫉妬に狂って鬼と化したのが般若。自力では鬼になれず、神の力に頼り、怒りと悲哀をないまぜにした鬼の一歩手前の存在、それが生成りである。生成りの徳子はやがて為良の屋敷に現れたが、晴明と博雅とによってその怒りは鎮められた。

### 這う鬼

貴子なる女のもとに、目玉と男根が入った箱が届いた。中には毛髪のようなものが入っていたが、箱を開けるとともにどこかへ消えてしまった。不気味な事件に晴明がよばれた。晴明が箱の中のものについて問うと、貴子は藤原康範のものだと答えた。そのとき、天井より髪の毛のようなものが落ちて貴子の顔を覆った。苦しむ貴子を晴明はわざと気絶させ、貴子は死んだと周囲の者に告げると、髪の毛は顔より外れた。その髪の毛は、かつて藤原康範に捨てられた女のものだった。あまりの怨みにその生霊が康範を殺し、頭皮がついたままの自分の髪の毛を使って貴子を殺そうとしていたのだ。晴明はその女に貴子が死んだと信じ込ませ、難を避けたのである。

### 迷神

菅原伊通という男が死んだ。悲しみに暮れた伊通の妻・藤子は、たとえ死んだ夫でも会いたいと、死者の蘇りを願って智徳という法師を訪ねた。智徳は自分では無理だといって断わるが、もし叶うのならどんな金額でも払うという言葉に、自分の師匠である鼠牛法師を紹介する。やがて藤子のもとに、夜になると腐臭を漂わせた伊通がやってくるようになった。鼠牛法師——蘆屋道満が反魂の術を使ったのである。自分で願ったことではあるものの、藤子は怖くなり、今度は伊通が来ないように智徳に頼んだが、大金が必要とのことで断わられてしまった。そこで藤子は晴明に相談したのである。晴明は道満に義憤を感じながら、伊通を屍体へと変えるのだった。

### ものや思ふと……

清涼殿での歌合わせで、壬生忠見は平兼盛の歌に負けた。ショックから物が食えなくなり、やがて忠見は死んだ。ほどなく、忠見の霊が清涼殿のあたりに現れ、自分の歌を唱えて歩くようになった。忠見の父・忠岑は、晴明に息子の霊を鎮めて欲しいと相談する。忠岑によれば、忠見の歌の才能は、実は鬼のおかげであるという。その鬼は『万葉集』に読み人知らずで掲載された歌を作った人物らしい。晴明は術を使ってその鬼に話を聞く。すると、忠見は鬼に教わった歌で名人となったが、清涼殿での歌合わせの時だけは自作の歌で、それが負けたことが悔しくて死に、鬼となったことがわかった。害のない鬼と忠見の霊に、晴明は手を下すことはなかった。

### 打臥の巫女

巷で占いがよく当たると評判の巫女より、藤原兼家は「瓜」という予言をもらった。それは吉か凶かもわからない。ただ「瓜」と。数日後、兼家は瓜が食べたくなって、二つの瓜を買い求めた。ふと巫女の言葉を思い出した兼家は、その瓜の吉凶判断を晴明に任せた。晴明は瓜に呪がかかっていることを見抜き、そのかかっている呪に形を与える術を施して瓜を割った。すると中からは黒い蛇が出てきた。喰えば病気になるところだったという。さらに晴明はその蛇を使って瓜に呪をかけた人物を探った。するとそれは蘆屋道満の仕業だとわかった。呪詛を依頼したのは、兼家の兄・藤原兼通だった。弟に官位を上に行かれて、腹がたっての呪詛だったのである。



### 血吸い女房

夏。都は日照りが続いていた。そんな折、中納言藤原師尹が、雨乞いと称して何人もの女を神泉苑の池で遊ばせた。このことがあってから、師尹の屋敷の女房たちが次々とあやかしに血を吸われる怪異が起きた。血を吸われた者は、寝込んでしまうのである。晴明と博雅が師尹の屋敷であやかしを待ち伏せすると、その正体は屋敷に住む女房の一人だとわかった。神泉苑で雨乞いをしていたとき、池に長年住んでいた蛭が女房に憑いたのだが、喉が乾いて仕方なく、それで夜な夜な血を吸っていたのである。晴明は女から蛭を追い出すと、その蛭に向かって雨を降らすようにいった。するとその夜明けには雨が降ったのだった。






## 陰陽師 鳳凰ノ巻

作者◎夢枕獏
定価◎単行本 1286円（文藝春秋）

**シリーズ四巻目『泰山府君祭』は、タイトル通り晴明が泰山府君祭を行う。映画では博雅を蘇らせたが、本短編ではライバル・蘆屋道満が仮死状態にした僧を救う。全7編。**

### 泰山府君祭

三井寺の智興内供が死んだ。それを帝は生き返らせよという。晴明は帝の勅を伝えにきた博雅とともに三井寺に赴くと、智興は死んではいないことがわかった。老齢となった智興は死ぬまでに女を抱いてみたいと思っていたが、僧の戒律を犯すわけにはいかない。そこに蘆屋道満が現れ、屍姦をすれば女犯にはならないと智興をそそのかし、新しい女の屍体を抱かせた。だが、その屍体は生死を司る神・秦山府君の供物となるものだった。智興は秦山府君の呪によって仮死状態になっていたのだ。道満はただ退屈まぎれにこのような事態を引き起こし、晴明がどのように動くかを楽しんでいたのである。晴明は秦山府君祭を行い、智興にかかった呪を解いたのだった。

### 青鬼の背に乗りたる男の譚

鴨直平という男に捨てられた女が、直平を怨みながら死んだ。その屍体は何日経っても腐る様子がない。恐ろしくなった直平が晴明に相談すると、難を避けるには相当怖い思いをしてもらうことになるという。それを承知した直平は女の家に行き、晴明の指示で人形を口にくわえ、屍体に馬乗りになって毛髪を握った。やがて鬼と化した女が起き出し、直平の名を叫びながら夜の都を疾走した。その背で直平は生きた心地もなかったが、鬼は朝になるともとの家に帰り、屍体に戻った。晴明は直平がくわえていた人形を屍体に見せた。屍体は鬼となってそれを噛み砕くと、ただの腐乱した肉塊となった。人形を直平に見せかけて、女の怨みを晴らしたのである。

### 月見草

物好きな男たちが、今は亡き文章博士・大江朝綱の荒れた屋敷で歌や詩について話をしていると、一人の女が現れた。女は朝綱に仕えていたといい、主人より贈られた歌を判じて欲しいという。歌の意味がわからぬ男たちを見て、女はすっと姿を消した。恐ろしくなった男たちは晴明に相談した。晴明が屋敷に行くと、果たしてその女は現れた。女は朝綱と男女の関係を持った間柄であり、死しても歌の意味がわからずに成仏できないでいるという。晴明はその歌の意味を解き、地中より砂金の入った甕を見つけた。朝綱は自分が死んだあとに女が困らぬようにと金を埋めていた。歌はその在り処を示していたのだ。歌の意味がわかると、女は静かに成仏した。





### 漢神道士

藤原為輔が桜の下で宴を開いていた。みすぼらしい翁が現れて酒を所望したが、為輔はそれを断わり、供の者が真っ赤な炭を投げつけて追い返した。それ以来、為輔の枕元にその翁が現れるようになった。為輔を外に連れ出し、真っ赤に焼けた鉄の柱を抱かせるのである。相談を受けた晴明は、思うところあって、現れた翁に酒をすすめた。翁は嬉しそうに酒を飲むと、次のように語った。自分は帰化した漢氏の者で、酒の上のいさかいで人を殺し、流浪の果てに桜の下で死んだが、死ぬ前に酒を飲みたいという想いから成仏できないでいた。そこで為輔たちに酒を所望したのだが、酷い仕打ちをされたので仕返しをしていたと。翁は飲酒の夢を叶えて成仏する。



### 手を引く人

鴨川のほとりに籠や箕を造って売る猿重という男がいた。ある行商からの帰り、橋の上でささいなことから夫婦で口論をはじめた。その晩から猿重のもとに怪しい男が来て、橋まで連れてゆくと、川に飛び込ませようとする。妻の方も同じような目にあっていた。嵐の晩、晴明は猿重の家で怪しい者が来るのを待った。やがて現れた男と女のあやかしに、晴明は夫婦の身替わりとなる人形を渡す。男女のあやかしが人形とともに橋から濁流へと飛び込むと、途端に橋は崩壊した。――この橋には仲の悪い夫婦が人柱に立てられていた。橋が流されるのを悟った人柱の夫婦の霊は、自分たちの後釜を探して、ちょうど橋の上で口論していた猿重夫婦を狙っていたのである。

### 髑髏譚

ある朝、最照寺の忍覚和尚は死んだようになり、翌日になって目鼻や耳から肉が焦げるような煙を出しながら悲鳴をあげてやっと起きた。訳を聞けば、夢とも現ともつかない山中の堂に、死んだはずの師匠の寿恵や同輩がいて、助けてくれという。やがてそこに唐人のような者たちが現れ、寿恵たちに煮えたぎった銅を飲ませ、自分も捕まって飲まされ、気がつけば床の上だったというのである。相談を受けた晴明は、寿恵の髑髏を用い、怪異の原因を寿恵の霊より聞き出した。するとそれは、僧たちが懺悔を吐き出すために使った壺の精の仕業だとわかった。壺には唐人が罪人に煮えた銅を飲ます様が描かれていた。怪異は壺を割ることで解決する。

### 晴明、道満と覆物の中身を占うこと

帝が陰陽師として優れた者は誰かと尋ねた。左大臣藤原実頼は晴明と答え、右大臣藤原師輔は道満と答えた。そんなことから晴明と道満は術比べをすることに。箱の中の物の名と数を当てるもので、先に答えた道満は、鼠が十二匹と晴明の答えまでいった。しかし晴明は大柑子が四つと答えた。師輔は慌てて大柑子が四つ入っていた。中には大柑子の皮をむくと中から金の十二神将像をくわえた十二匹の鼠が飛び出し、十一匹は捕まえたが、一匹だけは逃がしてしまった。実は師輔は道満に勝たせて実頼を笑い者にしようと企て、箱の中身が金の十二神将像だと道満に教えていたのである。二人の陰陽師は結託して、晴明が名を、道満が実を取ったのだった。




## 陰陽師
### 生成り姫

作者◎夢枕獏
定価◎本体 1400円
（朝日新聞社）

**シリーズ初の長編。博雅と「生成り」となった女性の悲恋物語が描かれている。**

酒を飲みつつ、博雅は想いを寄せている人のことを晴明に語っていた。十二年前、堀川で笛を吹いているときに出会った、名も知らぬ人が忘れられないと。偶然その人と十二年ぶりに堀川で再会したが、出会ったころより愛しく感じたと博雅は語る。人を遣って素性を確かめればよいではないかと晴明はいう。そんな不粋なことはできないという博雅だったが、その女性を想う気持ちは強くなる一方だった。そんな折、博雅は夜の堀川で再びその女性と会った。しかし不思議なことに、女性の体は透き通っているようで、体を通して後ろの木々が朧に見えた。お助けくださいまし

――生霊となった女はそう告げると、博雅の前から消えたのだった。しばらくしたころ、晴明は藤原済時より相談を受けた。夜中になると頭や胸に激痛が走るというのである。同時に済時が密かに通う女にも似たような症状が出ているという。呪詛である。晴明が呪詛をする人物を探ると、それは博雅が想いを寄せているその人――徳子だということがわかった。済時と男女の関係にあった徳子は、済時の心が他の女に移ったのを恨んでいた。やがて嫉妬に狂った徳子は、まず済時の女のもとへ行き、首を捻って女を殺した。次に済時を殺すため、済時の屋敷へとやって来た。そこには済時の他、晴明と博雅がいた。徳子は博雅の姿を見て激しく動揺した。実は徳子も博雅を想っていたのである。あさましい姿を見られた羞恥と、済時への憎悪とが絡み合い、徳子は鬼になる一歩手前、生成の姿となって走り出ていった。式神を使って追う晴明と博雅。見つけたときにはすでに徳子は自らの喉を懐剣でついていた。死にきれぬ徳子を腕に抱き、博雅は愛を告白する。その言葉に人間性をとり戻しながらも、自分の中の鬼を抑えきれない徳子。鬼と人間とを行き来する苦しみの中、徳子は博雅に笛を所望する。博雅が笛を吹き終わると、徳子は息絶えた。その死に顔は鬼ではなく、徳子の顔だった。




## 陰陽師
### 瘤取り晴明

文◎夢枕獏／絵◎村上豊
2001年10月下旬発売予定
（文藝春秋）

**今秋発売予定の『陰陽師』オールカラー絵本。村上豊氏の40点以上に及ぶ絵が物語を彩る。**

平大成と中成の双子は、70歳を超える薬師。二人は一つずつ頬に瘤があった。ある日、薬の原料となる草木を採りに森に入った二人。そこで大成は道に迷い山中で一泊することになり、鬼たちの百鬼遊宴に遭遇する。ひょんなことから鬼の中で舞い踊った大成に鬼たちは再会を約束する。が、事態は思わぬ方向へと進み、助けを求められた晴明と博雅は、大成と中成に化けて鬼たちと百鬼夜行し、再び遊宴に参加することに……。



# 『陰陽師』シリーズ以外の関連書




### 鬼譚草紙

作者◎夢枕獏
定価◎本体 1700円（朝日新聞社）

**夢枕獏氏と天野喜孝氏のコラボレーションが生んだ平安絵巻。晴明と博雅が登場する『陰陽師』シリーズではないが、平安を舞台とした作品である。**

平安時代における鬼と女とエロスをテーマとした三つの話からなる作品集である。女に憑いた物ノ怪を祓うために呼ばれた真済なる僧が、女のあまりの美しさに懸想して、自ら鬼となって想いを遂げるという「染殿の后鬼のため＝乱せらる物語」。鬼が死体から作ったという絶世の美女をひょんなことから紀長谷雄が譲り受けるが、百日の間抱かなければ本当の人間になるところを、我慢できずについ抱いてしまうという「紀長谷雄朱雀門にて女を争い鬼と双六をする話」。生きながらにしてこの世とあの世を自由に行き来した小野篁という人物の若い頃の恋を物語った「篁物語」。以上の三つの作品が、天野喜孝描く妖艶なイラストとともに展開する。

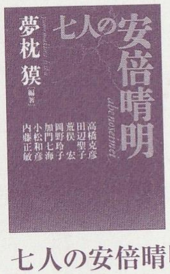



平成講釈
### 安倍晴明伝

作者◎夢枕獏
定価◎本体 1000円
（中央公論社）

**晴明の少年時代を描いた、講談調の一冊。**

帝の病を治すため都へのぼった晴明は蘆屋道満と問答勝負をすることに……。晴明＆博雅が活躍する『陰陽師』シリーズとは趣を異にし、尾花丸と呼ばれた少年時代の晴明が活躍する、講談調の痛快作。



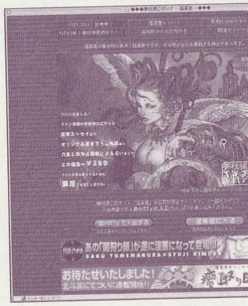

### 七人の安倍晴明

編著◎夢枕獏
定価◎本体 1695円
（桜桃書房）

**当代随一の作家たち7組が安倍晴明を描く、豪華アンソロジー。**

高橋克彦、田辺聖子、荒俣宏、岡野玲子、加門七海、小松和彦＆内藤正敏、そしてもちろん夢枕獏ら7組の著者たちが小説、評論、コミック、対談と多方面から『安倍晴明』を描いた、贅沢なアンソロジー。

# 夢枕獏公式ホームページ



夢枕獏公式HP **蓬莱宮**
■アドレス
**http://www.digiadv.co.jp/baku/**

夢枕獏氏のコラム「日々仰天」が読めるほか、掲示板やゲストによるエッセイ、夢枕氏の新刊情報、連載情報が掲載されている。会員制となっているが、フリーページも用意されているので、気軽に訪れてみてはいかがだろうか。右ページで紹介した『陰陽師　瘤取り晴明』は、この公式サイトで連載中。なお、当サイトのイメージイラストは寺田克也氏によるもの。書籍とはまた違った「夢枕ワールド」を探索していただきたい。

# 現代 陰陽道指南書

さらに深く陰陽道の世界を体験したい



現代・陰陽師入門
―プロが教える陰陽道―

高橋圭也著／朝日ソノラマ刊
本体価格 1,400円

## 現代に生きる陰陽師が語る陰陽道の総合的解説書

陰陽道とはなにか？ そして、その道のエキスパートである陰陽師とは、どういった人たちなのか？ 本書は、「陰陽道というのは、いまもてはやされている割には誤解も多く、そういった誤解や偏見の多い状況を何とかできないか」と考えていた著者が、みずから教鞭をとっていたセミナーの講義を元にまとめたもの。陰陽師になるために必要な、最低限の知識――奈良・平安時代から近代に至るまでの陰陽道の変遷と時代背景、呪法・占術・祈祷法の方法とその意味、由来など――について、幅広く解説している。なんだビギナー向けか、とあなどるなかれ。著者が、陰陽道はその成立から当時の先端技術を取り入れ、バージョンアップしてきた総合技術であり、またこれからもそうあるべきだと語るだけあって、その情報量は相当なもの。前半は、中国の道教や呪禁、日本古来より伝わる仏教（密教）や修験道などに目を向けながら、奈良・平安時代の陰陽道とはどういったものであったかを史料をもとに解説。また後半では、日本ユング派の心理学とシャーマニズムの話を枕に、陰陽師の日常的な心構えについて語り、最後に代表的陰陽師として数々の伝説・文学作品に登場する安倍晴明について独自の見解を述べている。

陰陽師になるには、スタートラインに立つだけでもこれだけ勉強して、さらに修行も必要とは……（一人前になるには、最低でも「天度の祓い」という5年もかかるハードな行をしなければならないらしい。詳細は本書あとがきを参照）。その中でも有名な晴明って、やっぱりスゴイかも……!?



陰陽師伝奇大全

東雅夫編・夢枕獏他著／白泉社刊
本体価格2,100円

## 浄瑠璃から近代伝奇小説までを幅広く集めた陰陽師綺譚集

岡野玲子のコミック『陰陽師』（原作:夢枕獏）の「安倍晴明　忠行に随ふひて道を習ふこと」ではじまり、「安倍晴明　天の川に行きて雨を祈ること」で幕を閉じる、安倍晴明譚全27編を集めたアンソロジー。安倍晴明の秘伝書と伝えられている『三国相伝陰陽簠簋（ほき）内伝金烏玉兎集』、の注釈書『簠簋（ほき）抄』（一部抜粋）や古浄瑠璃『しのだづま』などの古典、小説だけでなく、夢枕獏が自著「玄象といふ琵琶鬼のために盗らるること」（『陰陽師』収録）を戯曲化した『三國傳來玄象譚』まで幅広く収録している。編者は、ホラー評論などで知られる東雅彦。巻末の作品解題は、それだけでも十分読み応えがある。映画鑑賞前後にかかわらず、陰陽師が支配した闇の世界に遊ぶなら、ぜひオススメしたい一冊。



*cast*

# 映画 陰陽師 キャスト＆スタッフ

*onmyouji cast & staff*

キャスト

野村萬斎
伊藤英明
今井絵理子
夏川結衣
宝生　舞
矢島健一
石丸謙二郎
石井愃一
螢　雪次朗
下元史朗
木下ほうか
国分佐智子
八巻建弐

白井雅士
二橋　進
大村正泰
城戸裕次
小柳友貴美
立原　瞳
山本麻生
山口美香（子役）
高橋拓未（子役）
神宮　卓（子役）
ナレーション　津嘉山　正種
小泉今日子
岡元次郎　清家利一
武田　滋裕　藤田健次郎
岡田良治

平井賢治　高尾一生
中島崇文　岩瀬裕二
入江康之
内田陽子　平山美花
江刺市のみなさん
エクラン演技集団
す・適塾
キャストプラン
エルスタッフ・プロモーション
ジャパンアクションエンタープライズ
萩原聖人
柄本　明
岸部一徳
真田広之

# staff

スタッフ

製作総指揮 植村伴次郎
企画 近藤 晋
製作 原田俊明
気賀純夫
瀬崎巖
江川信也
島谷能成
プロデューサー 林 哲次
濱名一哉
遠谷信幸
原作 夢枕 獏(文藝春秋刊)
脚本 福田 靖
夢枕 獏
江良 至
音楽 梅林 茂
キービジュアル・コンセプトデザイン／
衣裳デザイン 天野喜孝
共同プロデューサー 平野 隆
田中 渉
大川 裕
VFXエグゼクティブ 二宮清隆
撮影 栢野直樹(J.S.C.)
照明 長田達也
美術 部谷京子
録音 小野寺修
柿沢 潔
冨田 功
編集 冨田伸子

スクリプター 赤澤 環
ラインプロデューサー 渡井敏久
助監督 足立公良
製作担当 武石宏登
製作担当(京都・奈良) 大里俊博
アソシエイト プロデューサー 鶴崎りか
装飾チーフ 秋田谷宣博
メインタイトル文字 村上 豊
助監督 西山太郎 橋本光二郎
岡村吉洋 久保田博紀
黒川礼人
演技事務
キャスティング 辻井孝夫
撮影助手 宮川幸三 市川 修
馬場 元 鈴木靖之
照明助手 鈴木康介 金子康博
松田直子 田中利夫
中島展貴 松尾文章
録音助手 松本昇和 西山 徹
篠崎純平
美術助手 小林久之 乙竹恭慶
長道 創 中山 慎
装飾チーフ補 酒井 譲
装飾助手 平井 亘
組付装置 白石 学
木村浩之
持道具 佐藤 希
レタリング 笹竹利行
美術デスク 室伏 清
装飾デスク 黒須康雄
衣装 山本亜希子 二宮儀夫
斎藤育子 内海真敏 熊谷 晃
床山 荒井誠治
かつら製作 田村滋男
濱中尋吉
結髪 佐藤典子

美粧 塩幡万里子
メイクアップ・イフェクツ 原口智生
特殊メイク 山田 陽
特殊造型 伊藤成昭 栄福哲史
アニマトロニクス 江久保暢宏 三木康次
稲村敦雄 関根喜美子
特機 実原康之
殺陣 諸鍛冶裕太 山田一善
操演 羽鳥博幸 宇田川幸夫
高見澤利光
アニマル・トレーナー(蛇) 島塚憲一
スタント ジャパンアクションエンタープライズ
宣伝プロデューサー 上田太地
製作宣伝 伏木賢一
宣伝協力 田中大善
ライセンシー 田中康之 金庭こず恵
スチール 野上哲夫
音響効果 伊藤進一
編集助手 原 浩次
ネガ編集 石川 歩
音響効果助手 小島 彩
リーレコ 宇田川 章
録音スタジオスタッフ 大野 誠
音楽編集 浅梨なおこ
現像 IMAGICA
タイミング 小椋俊一 石田記理
オプチカル 金子鉄男
デジタルI/O 柴田 誠 天満屋祐介
デジタルコンポジット 越智武彦
タイトル 篠田 忍
製作担当(江刺) 角田 隆

製作担当 鷲頭政充
製作主任 坂口知久
製作主任(京都・奈良) 相場貴和
京都製作部 河野浩二
製作進行 森 英一 澤田周作
犬飼須我志
製作経理 佐藤尚子 小菅順子
制作デスク、 木内亜紀 古賀華恵
車輌 越智誠志 矢野健司
井上真吾 小原 正
南澤敏博 田中雄一
渡辺 寿 伊藤輝雄
金子 靖
助監督応援 六車雅宣
照明部応援 土井本由里 岩切弘治
録音部応援 渡辺真司
製作部応援 大谷 弘 伊東雅子
安斎みき子
龍笛指導・演奏 芝 祐靖
風俗考証 小峯和明
所作指導 西川扇藏 西川箕乃助
陰陽道指導 高橋圭也
龍笛指導 中村香奈子

**特殊技術／視覚効果**

VFXスーパーバイザー 石井教雄
特撮監督 尾上克郎
特殊撮影 中根伸治
照明 安藤和也
特殊美術 松浦 芳
操演・特殊効果 鈴木 昶
Bキャメラ [illegible]

撮影助手 鈴木啓造 大城真輔
照明助手 池尾利夫 中島清五郎
河野泰昌
美術助手 花谷充泰 富永みのり
山崎功嗣
美術応援 山崎絵理 吉田 匠
ミニチュア製作 高木敏喜
モーションコントロール・操演助手 中山 亨
操演助手 南田英夫
MC―MILO撮影 稲葉貞則
山口 聡 段 和男
佐藤秀樹 武村吉雄
3Dマットペイント・イメージボード 江場左知子
デジタルコンポジット 足立 亨
3DCGアニメーション 捻橋尚文
編集 奥田浩史
絵コンテ 辻野 南
ドミノ・アーティスト 小坂一順
インフェルノ・アーティスト 岡本泰之
荻島秀明
コンポジッター 時任賢三 関口貴史
清水六郎太 近藤武彦
テクニカル・サポート 松尾康徳
フィルムレコーディング&スキャニング 丹野鶴仙
CGアニメーター 首藤奉彦
佐藤伊佐男 井上信行 坂田昌一
宗片純二 村木 芳 廣田俊明
長尾健治 棚田祥恵 迫田憲二
CGデザイナー 金海初芽 宮部一実
内山亜紗美

テクニカル・ディレクター 佐藤高樹
星野直哉 津守俊一郎
ロトスコーパー 道家 林太郎
CGIプロデューサー 桑田秀行
制作進行 指宿太郎 小原彰夫
渉外 間瀬淑恵
アーカイブ 森山正親
マットアート 上遠野恵介
テクニカル・ディレクション 泉谷 修
3Dデジタルエフェクト 金井圭一
小柴 浩
2Dデジタルエフェクト 山本英文
内田剛史
音楽プロデューサー 梅林 茂
吉澤博美(BMGファンハウス)
ミュージシャンマネージメント 内田音楽事務所
音楽制作 モトリス
オリジナルサウンドトラック盤
(株)BMGファンハウス RCAレーベル
挿入曲
「一行の賦」 作曲:芝 祐靖
演奏:芝 祐靖
「合歓塩」 演奏:伶樂舎

**DOLBY DIGITAL**

企画協力 中川豊子(オフィス・オート)
中條裕之(夢枕獏事務所)
野村朗子
撮影協力 松竹京都映画株式会社
大本山 大覚寺
総本山 仁和寺
臨済宗 南禅寺
平安神宮
世界救世教 平安郷
京都チキンランド
晴明神社
京都市
奈良ロケ協力 奈良国立文化財研究所
奈良市経済部観光課
江刺ロケ協力 えさし藤原の郷
歴史公園
岩手県江刺市
御殿場ロケ協力 御殿場市教育委員会
駒門風穴保存会
衣装協力 鈴乃屋
美術協力 有限会社日本活動装置
有限会社長島塗装
有限会社八木インテリア
有限会社山崎背景
株式会社紫水園
株式会社マーブリングファインアーツ
柳瀬恭一
株式会社野村造園土木
小田嶋林業株式会社
高津映画装飾株式会社
協力 日活撮影所
株式会社特撮研究所
日本コダック
日本照明
株式会社ナックイメージテクノロジー
グリフィス
東宝コスチューム
山田かつら
IMAGICA

[illegible]
[illegible]
三交社
天野喜孝事務所
西川流
都ホテル
リーガグランドホテル
MOTOROLA
冨田編集室
スカイワーク京都
関西ロケサービス
α·internet
ISIZE
東洋音響カモメ
東光映材
東宝ミュージック株式会社
株式会社日音
中洲プロ
株式会社アルファ企画
JSB
マリンポスト
日本エフェクトセンター
レプリカ
サンクアール
シネバザール
株式会社イデックス
VFX製作 オムニバス・ジャパン
製作協力 東北新社クリエイツ
監督 滝田洋二郎

構成・執筆
松尾亜希子（STUDIO HARD）
澤上珠理（STUDIO HARD）
村上健司
米本弘美
ウメモトヒロシ（HIVE）
山田浩之（S.E.Cナビゲーション）

出版コーディネート
映画『陰陽師』製作委員会

編集担当
石井康予（角川書店）

装丁・デザイン
吉沢 正（ロケットパンチ）
ノタケシホ

写真
本多晃子
奥西淳二
加藤幸広

スチール
野上哲夫

ヘアメイク（P18～21）
KOJIRO INABA

Thanks
東北新社
TBS
電通
東宝

夢枕獏事務所
天野喜孝事務所
ザ・リブラインターナショナル
エー・チーム
オムニバス・ジャパン
特撮研究所
中洲プロ
スタジオしぶや

鶴崎りか（東北新社クリエイツ）
田中康之（TBS）
田中大善（角川書店）
鈴木雅彦（東宝）

Special Thanks
部谷京子（美術）
山本亜希子（衣装）
西山太郎（助監督）
橋本光二郎（助監督）

映画『陰陽師』キャスト＆スタッフの皆さん

陰陽師 ときがたり絵巻

角川書店・編

2001年9月25日初版発行

発行人 井上伸一郎
発行所 株式会社角川書店
〒102-8177
東京都千代田区富士見2-13-3
営業：03-3238-8521
編集：03-3238-8685
振替：00130-9-195208

印刷 図書印刷株式会社
製本 株式会社鈴木製本所





ISBN 4-04-853380-0 C0076

Printed in JAPAN


安倍晴明より遡ること100年。
平安初期の都に、
鬼を操る貴人あり。
冥府の鬼を率いた
異才の少年・小野篁
美貌の文官として殿上人の間でも人気の
小野篁は、二つの顔を持っていた。
昼は朝廷に仕え、
夜は閻羅王の勅命を受け、
5人の禁鬼とともに
都の悪鬼怨霊を討ち果たす
仕事をしていた…。
書店にて
好評発売中!!
角川ティーンズルビー文庫 定価／各¥438(税別)
篁破幻草子
あだし野に眠るもの
篁破幻草子
ちはやぶる神のめざめの
著：結城光流 イラスト：四位広猫
華麗なるオカルティック絵巻
其は都の花より気高く貴なり―。
あすかコミックス
篁破幻草子
螢月夜に君の名を
漫画：四位広猫
TAKAMURA Project/結城光流
角川書店

9784048533805
1920076014000
ISBN4-04-853380-0
C0076 ¥1400E
定価：本体1400円（税別）
角川書店

晴明は、
人間は生きている限り
呪にかかってしまう、
ということを
気づかせてくれる存在
——野村萬斎

博雅は可愛げのある、
犬みたいな男。
純粋無垢で
「呪」にかからない。
そういうところ、
僕にソックリ（笑）
——伊藤英明

権力という〝呪〟に
取り憑かれて
かつプライドが高い道尊。
そこにワルなりの哲学を
感じられたら
——真田広之

9784048533805

1920076014000

ISBN4-04-853380-0

C0076 ¥1400E

定価：本体1400円（税別）

角川書店

